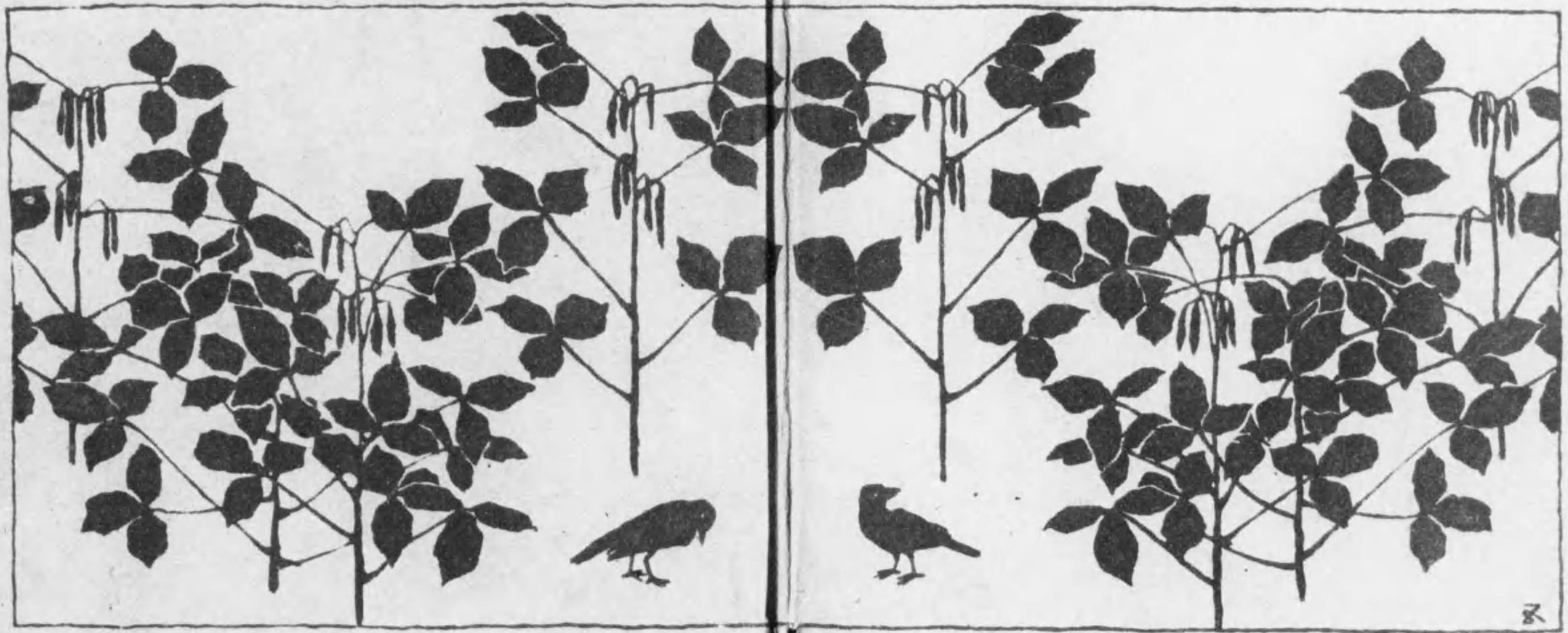
091
a
162

始

091
162



名家隨筆集

上

091
162

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

2186

緒言

名家隨筆集二卷は、德川時代著名の學者の隨筆中に就きて、其尤なるものの五六を選輯して卷を成す所なり。

上卷收むる所の三書は、漢學者の隨筆中夙に白眉を以て目せられたるもの、特に玆に其價値を誇揚するを要せず。駿臺雜話の、義理明晰にして道を誨ふるの懇到なる、獨語の、世態人情を盡して、一家の識見を以て之を剖判せる、梧窻漫筆の、漢宋明淸諸儒の詿誤を匡して其弊竇を攻め、學者をして必ず中正の見地に住せしめんと試みたる、皆是良匠心苦の作、時移り勢變れる今日と雖も、亦讀書家架上の珍たるを失はず。

駿臺雜話の著者室鳩巢(享保十九歿、七十七)は、程朱の道學を骨髓とせる

醇儒にして、徳川吉宗の師事せし所、獨語の著者太宰春臺(延享四年歿、六十八)は、文辭に耽溺して放縱に流れたる蘐園派中、獨り毅然として名節を尊び、師友に畏憚せられたる高士、梧窻漫筆の著者太田錦城(文政八歿、六十一)は、淵博の學を以て百家を綜該し、折衷の一派を立てゝ、一代に雄視せし鴻儒、三家三樣の面目、本篇によりて其一端を窺ふを得べし。

駿臺雜話梧窻漫筆の二書は、木版原本に據り、獨語は寫本を以て底本とし、百家說林本を參照せり。校訂に就きては文學士青木存義氏を煩したること多し。茲に記して謝意を表す。

本書の索引は上下二卷を通じて之を下卷に收む。

大正二年四月

校訂者　武笠三

名家隨筆集 上 目錄

駿臺雜話

駿臺雜話……一—三三
序(藤原明遠)……一
序……三
卷一(仁集)
老學の自叙……一一
釋源空が誓……一四
異說まち〱……一七
心の目しひ……一九
愚公が山……二三
老僧が接木……二四
葉公が龍……二五
扁鵲藥匙をすつ……二九
矯レ輕警レ惰……三六
忠孝の心……三八
鬼神の德……四〇
聖人の誠……四四
妖は人より興る……四六
飛驒山の天狗……五一
年內の立春……五三
袖ひぢての歌……五五
諸道わざよりいる……五八
釋寂室か祕訣……六三
卷二(義集)
武運の稽古……六七
善惡の報……七〇
天人相勝……七二
夢の浮世……七五
鈴木某が歌……七八

朝がほの花一時……八〇
不レ忮不レ求……八三
春秋のあらそひ……八六
祕事は睫……八八
佛になるやう……九二
仁は心のいのち……九五
義は心のきれ……九九
浩然の氣……一〇三
敬の工夫……一〇五
民は王者の天……一〇九
富士のすそ野……一一四
天下の寶……一一六
風俗は政の田地……一二二

卷三（禮集）

天下は天下の天下……一二七
直諫は一番鎗より難し……一三一
杉田壹岐……一三七
伴大膳……一四〇
阿閉掃部……一四四
士の節義……一四八
歲寒知二松栢一……一五一
手折りし手にふく春風……一五六
烈女種なし……一六三
澤橋が母……一六七
天野三郎兵衞……一七二
結解の何がし……一七六
二人の乞兒……一八〇

卷四（智集）

燈臺もとくらし……一八七
運慶が口傳……一九三
法は江河のごとし……一九六
鶺鴒のふみ……一九九

つれ〲草……二〇二
青砥が續松……二〇五
渡部番……二〇八
大佛の錢……二一一
泰時の無欲……二一六
楠正成……二二〇
足利家の乱れ……二二三
武田信繁……二二七
兵法の大事……二二九
孫臏韓信が兵法……二三三
兵は詭道……二四〇
不レ忘レ向レ君……二四四
大敵外になし……二四七

卷五（信集）

月は世々の形見……二五一
離騷の祕事……二五四
遍照が黑髮……二五七
世をすてゝ身をすてず……二六〇
詩文の評品……二六三
倭歌に感興の益あり……二六八
六義の沙汰……二七三
作文は讀書にあり……二七六
多錢善買……二八一
文章の盛衰……二八三
壘陽大師……二八五
寸鐵人をころす……二八九
言は身の文……二九二
一日の澤……二九七
尤物人を移す……三〇二
年にはづかし……三〇六
壬子試筆の詞……三一一
獨語……三一五—三六〇

梧窻漫筆……三六一—四八五
序（唐公愷）……三六一
序（荒井堯民）……三六三
卷上……三六七
卷下……四二九
跋（宅山公愷）……四八九
梧窻漫筆後編……四八七—六二五
序（出井元愷悌三）……四八七
序（片倉　直）……四九一
卷上……四九三
卷下……五五一
梧窻漫筆三編……六二七—六三九
題辭（唐公愷）……六二七
卷上……六三一
卷下……六四〇

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五卷。廼鳩巢室先生之所著也。夫以講論之餘。壟壟及此
言。大抵發乎所問者。而研窮理義。藻鑑人物。或往事之可感。或當世
之可警。莫非守正學而扶名教之意也。何其諄諄諭人之若是哉。一
時遊門之士。皆虛往而實歸。從可知已。明遠雖不敏。執經下座。竊與
有聞焉。嗟乎。在則人。亡則書。先生已遠。九原不作。後之讀此書者。亦
可以想見其造詣之深爾。雖然鐘之應撞而始鳴。其聲之大小洪纖。
惟隨乎其所叩。則善教之待其問。理亦不異於是。而先生之蘊。固有
非斯書所能盡者矣。書肆崇文堂。請上諸木。以傳不朽。因與其孫室
直溫謀焉。遂告之官。以一本授之。適剞劂功成矣。於是乎序。

寛延庚午十一月冬至日

東都　直學士　藤原明遠謹識

むさしの國大城の東駿臺のもとに、草の庵むすびて住みける獨の翁ありけり。そのかみ北國より爰に來て家居せしが、もとより深山木の花にあらはるべき材もなければ、其梢としる人もなくして、たゞ學の窓に文をひろげ、見ぬ世の人を友とし、老の至るをもわすれつゝ、きのふといひけふと暮して、はやふたとせあまりにおよべり。ちかきころより衰病日に加り、それに痿痺の疾ありて、起居も心に叶はねば、日夜衾枕をのみ親しみ、書籍にさへうとくなりにたり。何をか世にあるおもひ出にせまし。爰に此翁に就いてもの學ぶ輩ありて、書を講じ文を論じ、おの〳〵虛にして往き實にして歸らぬはなし。其外、花の晨月の夕には、かならず問來て、なにくれと世にあらゆる事ども語りつゞけつゝ、日をくらし僕を更ふれどもやむ事なし。む

かしより良辰は失ひやすく、嘉會は得がたければ、いつも賓主ともに唐錦たゝまくをしくなん見えし。翁も客に對して清談することをこのみて、身の煩はしさも心地よくおほゆる儘に、いにしへ今の世にいひふる難波の事のよしあしとなく、本末懸けてその理を盡しけるが、われながらをかしとおもふひとふしもあれば、其席はてゝ、わが子弟に命じて、やまと文字に寫し置きけるに、日數を經ておほえず巻をなせり。もとより有識のきはの人の目をとゞむべきものにもあらねば、さしてをしむべき事にはあらねども、古人の雞肋といへるも類しぬべし。さすが反故となしてかいやり捨てんも本意なければ、さて兒輩にあたへてよましめんとて、しばらくのこしおきけらし。

享保壬子のとし九月中旬鳩巣の翁駿臺の草の庵にして筆をとる。

月は世々の形見　　離騷の祕事
遍照が黒かみ　　世をすてゝ身をすてず
詩文の評品　　倭歌に感興の益あり
六義の沙汰　　作文は讀書にあり
多錢善買　　文章の盛衰
曇陽大師　　寸鐵人をころす
言は身の文　　一日の澤
尤物人を移す　　年にはづかし

駿臺問答の話、是に限るにあらず。經傳の文を論ずれば、所論の書により、諸生の問に答ふれば、所問の人にしたがふ。この故に、所論の文參差として齊しからず、所問

の事多端にして一にあらず。今こゝに所記は、正道を明かにし、邪說を辨じ、すべて學問の大綱に係り、又は世俗の諺淺近の語といへど、平生の事に通じて觀省の益ともなるべき事どもを採集めて、しるし置くになんありける。よりて觀るに、たよりあるべきために、章段を分ち、其中の提要の一語を摘みて、篇に名付けけらし。鋪叙倫なく、議論複出するやうにきこゆるもあれど、本より撰次して書となすに心なければ、たゞそのかみ語りしまゝに、叙錄して、家に貽し置くものならし。

國語大やう古雅にしたがひ、世俗のいやしき語を避くるといへど、事情にちかく、人聽に切なれば、たとひ鄙しき俗語にても、そのまゝ取用ひて、擇びすつるにいとまあらず。又近代漢字をもちひて、音にてつらねよみて、常語とするあり。武家の盛衰に武運といひ、武士の戰功に武邊といひ、人に禮辭するを挨拶といひ、事に懈弛するを油斷といひ、

君父の義絕を勘當といひ、山林の鬼魅を天狗といふ。是等の類なほ多し。甚無謂といへども、久しく世にいひ來る詞なれば、今改むるに及ばず。又字を誤りもちふるあり。號令して流布するをふるゝといふに、徇の字たるべきを、觸の字をもちひ、强忍にして敢てするをおすといふに、忍の字たるべきを押の字をもちふ。是等は同訓に誤らるゝなるべし。雨露の滴をしづくといふに、雫の字をもちひ、種ゝ菜の田をはたけといふに、畠の字をもちひ、伴語の人をとぎといふに、伽の字を用ふ。是は雨下の二字を合せて一字として、露の下垂するといふ意をとり、白田の二字を合せて一字として、白地の田といふ意をとり、人加の二字を合せて一字として、人の相加はるといふ意をとるなるべし。又同仇の兵をみかたといふに、味方の字をもちふるは、一味の方といふ語を略するなるべし。又家號氏族のかぢるかぢはらといふに、梶の字を用ふ。是は柁の字を誤りて梶に作るなるべし。すべて此類は假名をもて其詞をしるしおきてもよかるべし。されど畠山梶原などいふ氏族をしるすには、假名をもちひ難し。誤りながら眞名をもちひても、咎なかるべし。

雜語の中に引用ふる古語古文もしくは事實頗多し。そのかみ客に對しては、あらまし覺えしまゝに語りし程に、すこしづつたがひ、又は首尾せぬ事もあれば、後に本書を考へしるし置きぬ。されど今老耄して、精神も乏しければ、その出處を忘れて、急に考へあたらぬをば、必ずしもしひて考索せず。もし善讀者あらば、たゞ大意のある所をとらんかし。其餘は論ずるにたらず。

駿臺雜話

室鳩巣著

卷一

○老學自叙

つら〱身の過來し昔を思ふに、もとは武藏の產にてなんありける。そのかみ初て髪を結びて、詩書を事としてよりこのかた、あるは檄を捧けて藩邸に游事し、あるは笈を負ひて京師に旅食す。其後北地に家居せしかば、常に舊學を修め、素願を償つて、一生を終る事をなんはかりにき。然るに往年、はからざるに大家の徵を辱うして、ふたたび故鄕に歸り住せしが、身老い材腐ちて、やがて丘に首する死を待つ程になんなれりける。されば多くの歲月を經て、今犬馬のよはひ七十にあまる四の年まで、學を好み道に志すといへども、人の師表となるべき道德もなく、又外になにの材能もなくして、むなしく

丘に首する―禮記「禮は其本を忘れず古の人言あり曰く狐死して正しく丘に首するは仁也」

俗儒に習つて云々—朱子の大學の序に「自レ是以來、俗儒記誦詞章之習、其功倍ニ於小學一、而無レ用」

老學—老人

世にあるこそいと本意なき事なれ。されど翁を信じてこゝに問來る人々に、日ごろ自得したる事を語りきかせて、後學のたよりともならば、それこそ責めてながらふる甲斐もあるべしと思ふにぞ、病をつとめ痛を忍んで、たえず書を講ずるにてぞありける。ある日講はてゝ、宋儒以來學術の異同におよぶ。座中に程朱の學に疑を貽す人ありしに、翁のいふやう「某も若かりしとき俗儒に習つて、記誦詞章を學びて多くの年月を曠うせしが、或時忽往日の非を悟つて、始て古人己が爲にするの學に志ありしかども、不幸にして良師友もなかりしかば、諸儒紛紛の説に眩惑して、程朱をも半信じ半疑ひつゝ定見なかりし程に、とかくして又むなしく歳月を經にけり。年四十に近き頃にもあらん、ふかく程朱の學終に易ふべからざる事をさとりて、それより日夜程朱の書をよみて、心を潛め思を覃うすること今に三十年、仰げばいよ〳〵高く、きればいよ〳〵堅く、高遠に過ぎず卑近におちず、聖人復出づとも必ず其言に從はん事疑なし。されば天地の道は堯舜の道なり。堯舜の道は孔孟の道なり。孔孟の道は程朱の道なり。程朱の道を捨てゝ孔孟の道に至るべからず、孔孟の道をすてゝ堯舜の道に至るべからず。堯舜の道をすてゝ天地の道に至るべからず。老學もとより信ずるに足らぬ事には侍れども。是ばかりは實

の古くさき學問

聽を改むる—容を改めて聞く

道學—程朱の學

綜核—すべ明にすること

王陽明—明の大儒。名は守仁、字は伯安、嘉靖七年安南に卒す。年五十七

陽儒陰佛—表面は儒學を唱へ裏面は佛法に歸

見ありて申す事にて侍る、もし實見なくしてさもなき事を申すならば、翁が身忽天地の罸を蒙るべし」と誓ひけるにぞ、座中も聽を改むる氣色也。其時翁いふは「是は五百年來論定りたる事なり。今更翁が誓を待つべきにもあらず。朱子以後宋には眞西山、魏鶴山、元には許魯齋、吳草廬、明には薛敬軒、胡敬齋の諸賢を始め、其外道學に志ある人、程朱を尊信せざるはなし。一代の碩學たる事宋潛溪が如く、百家を綜核する事楊升菴が如き、文字論説の末においては程朱を議すといへども、學術道徳においては間然する事をきかず。されば明の中葉までは、おほやう世の學術も正しく、名教も頽れざりしぞかし。王陽明出でて良知の學を唱へ朱子を排せしより、明の學風大に變じぬ。陽明既に沒して其徒王龍溪がごとき、つひに禪學となる。それより世の學者良知に沈醉し、窮理に欠伸し。其弊嘉靖、萬曆の間に至りて、天下の學者陽儒陰佛の徒となりてやみぬ。諸賢よく思ひて見給へ。西山以下の諸賢、假令汙下なりとも、所レ好に阿るには至らじ。又其德行材識、何れも明季竝に今の儒者の下にあるべきに非ず。それに程朱萬分の一にも及ばぬ學識をもて、輕しくなにくれと譏議するは、鷃の鵬を笑ひ蠡にて海を測るに似たり。韓愈がいはゆる、井に坐して天を觀て天を小なりといふの類なり。然るに輕薄無識の

するをいふ
鶍の鵬を笑ひ云々—莊子及び漢書に出づ、つまらぬ者のすぐれたる者を笑ひ小人の心を以て君子をはかるに譬ふ
井に坐して云々—原道に見ゆ己が小見識を以て聖人の道を小なりとするをいふ
俑作る—惡例を殘す
猖狂の論—

徒其說の新奇なるを喜びて、雷同瓦鳴する事、あげて數ふべからず。國家百年以來太平久しく。文化日に開けて、師儒世に輩出しけり。其學の是非はしらず、たゞ程朱を堅く崇信して ふるき模範を失はざりしをぞひとつの幸とせしに、ちかき比俑作る人ありて始て一家をたて、徒弟をあつめしより、老姦の儒いでて、其上に立ん事を欲し、猖狂の論を肆にして忌憚る事なし。一犬虛を吠ゆれば群犬これを和する習なれば、邪說横議世に盛なるこそ理にて侍れ。誠に此道の厄運ともいふべし。されば韓愈も、佛老盛に行れし時に生れて、獨是を排斥して、みづから孟軻に比せしが、その孟簡に與ふる書をみるに、「天地鬼神臨レ之在レ上質レ之在レ傍」とは誓ひしぞかし。今翁が誓も孟子の功にこそ及ばずとも、韓愈が心にはおとり侍るまじ。あなかしこかり初の空言とおほすべからず。

○釋源空がちかひ

勝手な暴論、猖狂はたけりくるふ意
源空—淨土宗の祖。法然上人建曆二年寂す
月輪殿—關白藤原兼實
誕ならば—作りごとならば—

むかし源空上人九條の月輪殿へつかはせし一枚起請とて、今に新黑谷に殘りてあり。其誓書を翁は見侍らねども、そのかみ人に尋ねしに、「念佛申して極樂に生るゝといふ事誕ならば、源空地獄に墮つべしといふ事なんありける」と語りし。彼宗門にては、さぞ慥なる事におもふべけれど、吾儒よりいへば、この誓ほど浮ける事はあらじ。いかにとなれば、もとより極樂といふ事なければ、又墮つべき地獄もなし。いくたび誓ひてもいと安かるべき業なり。前代いまだ殉死の制禁なかりし時、或諸侯の家殉死あまたありける中に、ひとり輿論のをしむ人にやありけん、其家の老臣みづから其宅へ行きて死をとゞめしに、中々許諾せざりしを、いろ〳〵にこしらへければ、其人やむ事を得ずして一諾しけり。「さらば誓ひてよ」といへば、いと快く誓ふ。さては心安しとて歸りぬ。さて其翌日にか、殉死の面々亡君の菩提所へと相約して寺に聚りしに、日ごろ知舊名殘ををしみつゝまうで來にけり。かの老臣も行きて上座しけるに、昨日ちかひし人、いちはやく來て諸客に暇乞しけるを、老臣うちみて「某をこそ欺き給ふとも。いかで誓をば背き給ふべき。口惜しきわざかな」といへば、其人笑ひて、「御うへを欺き候事は御許し候へ。昨日ちかひ申さず候へば、とかく御のがしなく候故、御疑を散ずる爲にこそ誓ひ候へ。誓を背きて神罰を得候とても、死ぬるより外の事はあるまじく候。されば死をきはめたる身にて候へば、もとより誓を背く覺悟にて誓ひ候」といへば、老臣言葉なくしてやみぬ。此人

眞假一如—眞も假も歸するところは同じもの
密旨—深く祕したるところ
雲泥の沙汰—非常のちがひ

の命を喪ふ外に神罰なき事を意得て誓ひしやうに、源空も土になるより外に地獄なき事を意得てこそ、かくは誓ひつらめ。今翁が誓はそれと異なり。上は皇天を戴き下は后土を履みて、天地にかけて誓ふ。誓もし誕ならば、天地の罰をかうぶるべし。されど我道の爲に誓ふは、源空も同じ心なり。是につけておもふに、釋氏の教は有を無にし、實を虚にするにあり。然るに無を有にせねば有を無にしがたく、虚を實にせねば實を虚にしがたし。されば極樂地獄の沙汰はもと虚なる事としれども、もとより眞假一如とみてこれを説く、往生の教をたてゝ衆生を導けば、賢愚をわかず思慮に渉らず、すべて念佛滅罪の中に歸してやみぬ。是釋迦如來の密旨なり。我朝にても諸宗の祖になる程の僧は、此旨を互に心をもて心に傳へて、假にも淨土地獄の沙汰を浮きたる事とはいはず。今源空が誓も、相傳の旨なるべし。九條殿の生るべき淨土もなく、源空が墮つべき地獄もなし。されば無をもて有とし、虚をもて實として、衆生に生死を出離さする法とするは、釋迦の本意にかなへり。それはいさゝか僞なきことなり。もし吾儒至誠をもて人を敎化する道をいはゞ、雲泥の沙汰なるべし」。

神道を雜へてとく—山崎闇齋等の流
良知を主としてとく—中江藤樹熊澤蕃山の流
新義を造りてとく—伊藤仁齋等の流
一原—根元の單一なること
鄒魯—孔孟、鄒は孟子の生國、

○異説まち〳〵

ある日、翁が病を問ふとて人々來りしを、「翁も徒然にこそ侍れ。今日はしばし」といへば、「さらば侍坐つかうまつらん」とて、日をくらし語りあひし程に、當代異説の事に及べり。座中一人翁にむかひて、「たゞ今西京東都において、世に鳴つて人を率ゐる儒者の説を承り候に、或は我國の道とて神道を雜へてとくもあり、或は陽明が學とて、良知を主としてとくもあり　或は古の學とて、新義を造りてとくもあり、紛々異同の説まち〳〵なり。いづれを是とし何れを非とせん。翁の心においていかゞ思ひ給へるにや」。翁聞いて「當代門戸をたてて異説を唱ふるもの、おほやう今申さるゝ三流ときこえ侍る。是等の説を立つる人々、さこそ所見あるにて侍るべし。もし翁が古に聞くところをもていはば、いづれもさには侍らず。それ道は天にいでて一原なるものなり。その一原のところをさへ悟りぬれば、わが國の道とて人の國にかはるべからず。良知の説とて窮理にはなるべからず。鄒魯の學とて濂洛にたがふべからず。然るに是を知るは聖賢の書にあり。聖賢の書は讀みやすからず。されば志を遜てくはしく讀まずしては、その意を得る事

魯は孔子の生國、
濂洛—周茂叔程明道程伊川
藩籬—かきれ、皮相
武藏房云々—蕃山の言
孔釋の道—孔子と釋迦

なし。今の儒者、多くは自ら高ぶる心ありて、濂洛の書を精しく讀む人まれなり。いまだ程朱の藩籬をも窺はずして、己が心を先だてて、にはかに大賢を議す。所見の是非は姑くさし置きぬ、先づ其學の輕薄浮淺なるこそ、うたてしく覺え侍れ。さやうの人は孔孟の書をもくはしく讀むまじければ、孔孟の意をも得ざるべし。孔孟の意を得ずしては、いかで程朱の說に疑なかるべき。然るに程朱をば輕々しく議すれども、孔孟を議する事をばきかず。是は孔孟にも疑なきにはあらねども、孔孟は二千年來世に尊信す。それを議しては人のうけがはぬ事なり。程朱は世代ちかく、明朝に至りて或は譏る人もありける故に、是を譏るなりといはば、是毛遂がいはゆる因人成事なり。一定の所見ありとはいふべからず。もし又己が道德學術孔孟には企及ばねば其憚ありといはば、さては今程朱を譏るは、是己が賢ははるか程朱の上に立つとみづから許すなるべし。それはともあれ、神道とはいへど、其說を聞くに、我國に荷擔し、湯武叛逆の類といへば、其いはゆる神道は、仁義の外にあるにやあらむ。良知といへど、其說をきくに、佛性を明德と竝べ稱し、武藏房辨慶を智仁勇の士といへば、其いはゆる良知は、是非の心にあらざるにやあらん。古學といへど、其說をきくに、大學を聖人の書にあらずとし、孔釋

との道。即ち儒佛の二道
踐履—實地にふみ行ふこと
支離—統一なきことと譏りし。そかし—原本「し」を脫す
楊墨—楊子と墨子
好辯—孟子「我豈辯を好まんや已むを得ざれ

の道二つなしといへば、其いはゆる古學は、德性の外にやあらむ。是等の說、何れも翁が疑をのがれぬ事にて侍る。然るに、仁義をかね、內外を合せ、古今に通ずるは、たゞ程朱の學なり。されば大中至正の道にて、孔孟の正統たる事、なにの異論かあるべき。たゞ翁がふかく恐るゝ所は、程朱の學をするの輩、身をもて踐履をせずして、たゞ講論をのみ事とせば、其學は正しといふとも、道において何の得る事かあるべき。明朝にすでに其弊ありし故に、陽明も支離をもて朱學を譏りしぞかし。邪說の起るも是故にてこそ侍れ。もとより實行を忘れて空談をつとむるは、聖賢の戒むる事なれば、今更翁が事新しく申すにも及ばず。ふかく愼むべき事にこそ。」

○心のめしひ

座中又ひとりいふは、「翁の仰せらるゝごとく、吾黨の士は、相戒めて實行を力むるこそ、邪說を距ぐ上策と申すべく候。されば、孟子も楊墨を距ぎて、好辯の譏をば辭し給はねども、其要を論じて、君子は經に反るのみといふに歸せられ候。況や今僞學詭辯の徒、野邊におふる葛の如くはひひろごり、邪誕妖妄の說、林に落る木の葉の如くしげければ、

ば也」

五倫―「父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長物有レ序、朋友有レ信」

東坡―蘇軾、字は子瞻、宋の文豪

それにしたがひて辯說を費さんは、反て吾道を淺はかにするにて侍りなん。此頃の事にて候。ある儒者の說とて、耳を驚かす事をこそ承り候へ。「道は天地に出づるにあらず。聖人の作り給へる事なり」又いふ。「道は事物當然の理にあらず、文雅風流のものなり」又いふ。「五倫の内に夫婦のしたしみばかり天性なり。其外君をたふとび父母をうやまふの類は、人の性にあらず、聖人の作り出せる道なり。其作者聖人なる故に、古今に行はれて變ずる事なし」とぞ。古より邪說多しといへど、是ほど乖戾りぬる事は承らず。いへばいはるゝものに候」とて、互にいひあひて笑ひけるに、翁きいて、「諸賢は東坡が日喩の說を見給へりや。生れて盲ひたる人あり、日はいかやうなる物と思ひて、かたへの人にとへば、日はかく圓なりとて銅鑼を探らせけるに、銅鑼をたゝいて、さては日は聲ある物とおもへり。又かたへの人いふは、「日は光あり、燭の至る時には、おのづからあかきやうに覺えぬべし。その如し」といふを聞きて、蠟燭をなでて、さては日は細く長きものと思へり。今の世俗道理にくらき人多し。たとひ書を讀みても、道理にくらければいふ人もきく人も、目こそあき候へ、心は盲ひたるにて侍る。さればその盲ひたる心をもていろ〳〵に思ひなぞらへ候はば、此人の日をはかるやうに、おほきに取たがへたる

記誦―よみそらんずること

四子―孔子曾子子思孟子

六經―易經書經詩經禮記樂經春秋

荀莊―荀子莊子

王李―明の王世貞、李于鱗

造言の刑―訛言を放ち

事もあるべきぞかし。今承るごときの說は、取りあげてなにと申すべき樣もなく侍る。たとへば喪心の人を相手にして是非を論ずるに似たり。その論ずる人もさきと同じ事と申すべし。然れども、翁ひそかに此說の起りを考ふるに、其人もと記誦の儒なり。記誦の儒は諸子百家を涉獵することをのみ好みて、四子六經に心をとゞむる事なし。たゞ其文辭訓詁を僉議して、理趣のふかきに及ばず。然るに日ごろわが學の義理にくらきをばしらず、飽まで己が博學を自負して虛譽を要する程に、世も亦是をもて推崇みて一代の儒宗とす。明季諸儒の風、大抵かくの如し。それに放蕩不遜にして、人に驕り物に傲るを高致とし、好みて大言を吐いて先賢を毀り、抗然として高く唐宋諸儒の上に出でんとす。然れども有識より是を見れば、學は遠く荀莊が餘毒に醉ひ、文は近く王李が浮華を拾ふに過ぎず。されば己が臆見にまかせて、道は天地に出でずとし、事物當然の理にあらずとす。己が曲學に合せて、道を文雅風流のものとし、己が俗情にこゝろみて、夫婦の外は五倫みな人の性にあらずとす。本より論ずるにもたらぬ事ながら、世俗多くこれを信じて、群をなし徒をなすにぞ、とかく世は奇怪を好む事となん今更思ひ當り侍る。たゞ人の心術を害し、世の名敎を損ずるこそ返す〴〵もなげかしく候へ。周禮に造言の

刑あるは、この爲にて侍るぞかし。かやうの中に、翁が道德もなく材力にも拙き身をもて、是を支へむとするは、誠に大厦の一木ともいふべし。たとひ言ひて距ぎ、辟して闢くとも、誰か信ずべき。己が量をしらざるの譏も身にのがれがたく侍る。たとへば、程朱の說は先王の禮服なれども、宋人の章甫を越に賣るが如し。斷髮の俗には用ふるところなし。程朱の說は天下の名曲なれども、郢客の陽春を楚に唱ふるに似たり。鴃舌の俗には和する人なし。詩にいはく、「知レ我ものは我こゝろ憂ありといふ。不レ知レ我者は我何をか求むといふ。悠々たる蒼天これ何人ぞや」此詩は周の大夫周室のおとろふるをかなしびて作れり。今翁が吾道の衰ふるをかなしむも、事はかはれども心はおなじかりぬべし。

○愚公が山

されども翁が心は、知己を一世にもとむるにも候はず。昔より邪僻妄誕にして根もなき事の盛に世に行はれて、あなかしがましく聞ゆるは、女郎花の一時とや申すべき。大方は續かぬものにこそ。世を歷て正道へかへらぬはなし。然るを心短くして早く其驗を見

て人を惑すものを罰する刑
大厦の一木——文中子「大厦將レ顚、非二一木所一レ支也」
宋人の章甫は冠、莊子「宋人資二章甫一而適二諸越一、越人斷髮文身、無レ所レ用レ之」
郢客の——文選「客有下歌二於郢中一者上、其始曰二下里巴人一、

むと思ふは、未練のことといふべし。諸君列子が書を見給へりや。愚公といひし人ありけるが、家居近く山のありしをいとひて、わきへ移さんとて、日々に子ども引き具し出でつゝ、手づから耒耜をとりて一簣づつ毀ちとりけるを、智叟といひし人是を見て、「かく大なる山を、わづかなる人の力にてこぼてばとてこぼちつくさるべきか」と、其愚さを笑ひければ、愚公きゝて、「わが代よりこぼちそめて、わが子の代にも繼ぎてこぼち、わが孫の代にも又其子の代にも繼ぎてこぼちなば、終にはわきへ移さぬ事やあるべき」といへば、いよ〱笑ひけるとなん記し置きけり。もとより寓言なれば、この人あるにはあらねども、愚公がいふやうなる事は世に愚なりといへば、愚公と名づけ、智叟がいふやうなる事は世に智なりといへば、智叟と名づけけるならし。およそ天下の事、愚公が心ならば、遲くも一度は成就すべし。然るに世に智ありと稱する程の人は、大かた智叟が心にて、愚公が山を移すやうの事を聞きては、その愚を笑ふ程に、なに事もその功を成就せぬなるべし。しかれば、世のいはゆる智は反つて愚なり。世のいはゆる愚は反つて智なり。それ故に禦寇が世を諷じてこそかくはいひつらめ。今翁も百年論定まるの日を身後に期し侍れば、世の明智なる人よりみては、翁が迂濶なることを笑はるべし。されど老いひ

國中屬而和者數千人、…其爲二陽春白雪一、國中屬而和者數十人…其曲彌高、其和彌寡
鴃舌——蠻音解すべからざるもの
禦寇——列子の字

將軍家―「寛永のころ」と先にあれば、三代家光なるべし

みづはぐみつゝ―い屈まりて

がめるにやあらん、此志を守りて身を終へなんとこそ思ひ侍れ。愚公が山を移すの類なるべし。

○老僧が接木

されば是につけて思ひ出しし事あり。忍が岡のあなた谷中のさとに、何がしの院とてひとつの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其住僧をしりてしば〳〵寺に行きつゝ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人にむかひて前住の時の事をなん語りしをきゝ侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、徒歩にてこゝやかしこ御過ぎがてに御覽ましましけるが、此寺へもおもほえず渡御ありしに、折ふし其時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつゝ手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、お側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、そのまゝ背き居たりしを、「房主なに事するぞ」と仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく、「接木するよ」と御いらへ申せしかば、御笑ひありて、「老僧が年にて今接木したりとも、其木の大きになるまでの命も知れがたし。それにさやうに心をつくす事の不用なるぞ」と上意ありしかば、老僧「御身は誰人なればかく心なき事をきこゆるものかな。よくおもうて見給へ。今此木どもつぎておきなば、後住の代に至りていづれも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもうてする事なり。あながちに我一代に限るべき事かは」と言ひしをきこしめして、「老僧が申すこそ實にも理なれ」と御感ありけり。その程に御供の人々おひ〳〵來りつゝ御紋の御物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大きに恐れて奥へ逃入りしを、御めし出しありて、物など賜りけるとなん。今翁も此老僧が接木するごとく、老朽ちぬれども、ある限は舊學をきはめて、人にも傳へ書にものこして、後世に至りて正學の開くる端にもなり、此道のために萬一の助ともなりなば、翁死しても猶いけるが如し。古人のいはゆる死しても骨くちじといひしこそ、思ひあたり侍れ。いさゝか我身のために謀るにあらず、諸君も翁がこの意を信じ給へかし。

實にも―原本「實も」とあり。

ものに似た

○葉公の龍

しかれども、かく申せば、翁が身ものに似たるやうにて、はづかしくこそ候へ。翁わか

ろ―人がましき名
載籍―書物
林慙澗愧―宋の孔德璋が周顒といふ僞君子を誚りたる文句
晏嬰―晏平仲
程頤―程伊川

かりしより、心に聖賢を慕ひ、口に六經を誦し候へども、たゞ載籍のうへにて聖賢を窺ひて、少し其意を得たると申すばかりにて侍る。今も〳〵眞の聖賢にあひ奉りなば、日ごろしたひ奉りし心とちがひ、反つていみはゞかる事あるまじきや、心もとなくこそ候へ。すこしもいみはゞかる事ありなば、今申す事も皆僞になり、林慙澗愧盡くべからず。又なにをもて後世を待ち候べきや。むかし葉公龍を好みて、其形を畫がかせて日夜愛翫せしが、ある時眞の龍これを聞きて、ゑがける龍をさへさやうに愛翫あるに、わが行きたらむには、ことなるもてなしにもあひなんと思ひ、窓より顏をさし入れたれば、葉公大きにおそれてにげまどひけり。今東西兩都の儒者を見るに、多きなかには正學の志ある人もあるべけれども、大かたは自ら尊大にして師儒と稱しつゝ、我こそ聖賢の道を好むといへど、たゞ論說をつとめ、著述を衒ひ、是をもて世に傲り名を釣るには過ぎず。もとより道に實得の功なければ、もし眞の聖賢にあはゞ、目をかへして相見むとぞ覺え侍る。しからば日ごろ聖賢の道を好むといふは、葉公が龍を好むに同じかるべし。晏嬰が仲尼を毀り、蘇軾が程頤をにくむにて考へ見給へ。ひとりは齊の賢人、一人は宋の名臣にて候へども、それさへかくの如し、況や二子に及ばざるものをや。されば漢の

賊莽―漢の天下を奪へる王莽
後世の子雲―後世の我と等しき人、子雲は楊雄の字
東へ行役しける―江戸詰にて勤役せるなり

楊雄道德を論じ大玄を著し、一代の儒といはれしかども、一旦賊莽に臣とし仕へて、節義を失ひしぞかし。たとひ莽が世に生れずして此事なくとも、是等の學問にては、もし孔孟にあうて節義の事をもて責められなば、必ずにげさけぬべし。然らば大玄五千文皆虛文にあらずや。後世の子雲ありて我を知らんといへど、後世莽が太夫ありて知音たらんかし。この故に、言論のみを聞きてその實迹を見ざれば、世話に畑水練といふ如く、仕方ばかりにては人信じがたきものなり。はや三十年前のことにて侍る、加賀の國に杉本の何がしとて、ひとりの微賤の士ありき。翁その人を久しく相知りしが、其子九十郎といふもの、十五歲の時、父は東へ行役しける其跡、年輩同じ程なる近隣の人の子と圍碁のうへにて口論しけるに、九十郎こらへず、刀を拔きて相手を一大刀きりしを、かたへの人取りさへけり。さて其事廳に達して後、相手の創療治さすべしとのことにて、其間九十郎は官長の家に預り置きしに、いさゝか臆したる氣しき露ほどもなく、言語振舞の落ちつきたるは中々年におはぬやうに見えける。日を經て相手終に創にて果てければ、九十郎も切腹するに議定しける程に、その前の夜、主人名殘ををしみつゝ、酒肴いろいろ用意してもてはやしけるに、九十郎母への文などしたゝめ置き、さて主人にくはしく

つとめて—早朝

謝詞をのべ、此程附居たる家人へも、それ〴〵に懇に暇乞して、さていひけるは、「面面へ名殘もをしく候へば、今宵はあくるまでも語りたく候へども、明日切腹の時ねぶたく候ては、いかゞと存じ候へば、先へふせり候べし。面々は是にてゆる〳〵と酒すゝめられ候へ」とて、奥へ入りて高鼾して寢ぬるを聞きて、跡に居たりし人々感じあひけるとぞ。

又の日つとめてよき程におきいでて、沐浴し衣服あらためつゝ、用意心靜にし、其後切腹の席へいでて、檢使に一禮し、こゝろよく切腹しぬ。其有樣從容としてやすらかなりし。いかなる勇烈老功の士たりといふとも、是には過ぐまじきと見えしとて、其場に有合し人々、年を經て後迄も語り出して、涙おとさぬはなし。此事おこりし始に、翁彼が父のもとへ文やりて知らするとて、「九十郎たとひ切腹するに及びたりとも、此程のおとなしさにては、未練なる事あるまじ。それは心安くおもふべし」といひ遣しけるに、後にきけば、父そのふみを人にみせて、「かくはいひて來れども、童子に灸するに、前には人にすかされて思ひの外におとなしく見ゆれども、火を取つてむかへば、その際になりて俄に泣出して、前の言葉には似ぬ物ぞかし。わが子もいまだ年にたらねば、潔く切腹したるといふたよりを聞くまでは、心もとなく思ひ侍る」といひしとて、古人のいふ如く、此父なくば此子あらじとなん思ひ侍りき。さて此事を今申出し侍るは、九十郎が斯くばかり歳にも似ずしてけなげなるを、世にきゝ傳ふる人もなくて果てなんは、あまり不便に候へば申す事にて侍る。其上今翁をはじめ、言論文字にて古人のまねをして、その實のあらはるゝ時に至りて、日ごろのあらましと違ひありなんは、是ぞ誠に童子の灸なるべし。多年學問して儒者といはるゝ身にて、かの童蒙無智の九十郎が覺悟にさへ劣るべき事かは いと恥しき心ならずや。諸君も常にこゝを察して、よく〳〵省み給ふべし。」

藥匙—藥を調合するに用ふる匙

標的—めあて

〇扁鵲藥匙をすつ

他日の會に翁いふは、「過し日學術の邪正を論ぜしが、其論いまだ盡きざるやうに覺え侍る。今日其論を果し候べし。今世儒者、朱子を議するに三等あり。第一等は陽明良知の說を祖として朱子を議するあり。陽明は傑出の人なり。朱子の學を毀りて支離とするも少しいはれなきにもあらず。當時朱學の弊多くは文字言語に求めて、内省の工夫やゝ少きを見て、朱子格物の說を義外とする程に、良知を標的として、一向に内省につとめしむ。これ其意よからざるにはあらず。しかれども朱子格物の說、良知を外にするにあら

五聲―宮、商、角、徵、羽
五色―青、黃、赤、白、黑
五味―辛、甘、鹹、酸、苦

ず事物に卽きて良知を致すなり。たゞ陽明の說の如く、良知に求めて事物に求むべからずといはゞ、先王の敎、詩書禮樂といはずや。詩書禮樂、事物にあらずして何ぞ。孔門の敎、文行忠信といはずや。文に六經あり。行に百行あり。忠と不忠と、信と不信と、必ず事物によりて其理を知るべし。もしひとつの良知を致せば、おのづから敬して、禮を學ぶに及ばず、おのづから和して、樂を學ぶに及ばずといひ、又ひとつの良知を致せば、おのづから百行も修り、忠信にもすゝむといはゞ、それほど簡約にして手近き道あるを、聖人何とて示し給はず、かくむづかしく迂濶なる敎をたて給ふべき。且いへ良知を致すに、事物をもてせずして何をもて致すや。定めて內省を專にして私欲を去るをもて、良知を致すとするにやあらむ。それは、たとへば五聲を知るは耳にあり。耳を守れば、五聲をきかずして五聲をしるといひ、五色を知るは目にあり。目を守れば、五色を見ずして五色を知るといひ、五味を知るは口にあり。口を守れば五味をなめずして五味をしるといふが如し。知らずや、五聲を知るは耳にありといへども、五聲は物にあり。五聲を聞かずしては、五聲の眞をしるべからず。五色をしるは目にありといへども、五色は物にあり。五色を見ずしては、五色の眞をしるべからず。五味をしるは口にありといへど

恒言不稱老云々―かりそめにも老といふことを言葉に出さず、又犬馬に對しても荒き聲を出さず

も、五味は物にあり。五味をなめずしては、五味の眞をしるべからず。況や五聲にも淸濁物每に異同あり。五色にも淺深物每に異同あり。五味にも厚薄物每に異同あり。其物にあらずしては、何によりて其別をしるべき。親を愛し兄を敬するは不學して知るといへど、事親事兄の事の上にて、愛敬の理を窮むべし。すべて君子百行皆しかなり。其事に卽きて、其理を窮めずして、己が善く知り惡しく知るものひとつにて知るべきにあらず。孝は百行の本といへば、しばらく事親の事にて申侍るべし。朝省昏定やうの事は、およそ事親の人誰か知らざるべきなれども、其さへ田舍農家の民などは、愛親の心なきにはあらねど、朝に省むべく昏に定むべき事とも知らざるぞかし。況や親を養ふは誰も養へども、口體を養ふと志を養ふの異同あり。親を敬ふは誰もうやまへども、嚴威儼格は事親の道にあらず。其外父母の前にては、恒言不稱老、叱咤の聲犬馬に及ばずといふの類に至るまで、すべて事親の事なり。もし其事に卽きて各其當然をきはめずして、わが愛親の心にもとむれば、おのづから事々つくすに足りぬといはゞ、聖人の上にはさもありなん、學者の及ぶべき所にあらず。おそらくは孝の道をつくさぬのみにてもなく、又心ならず不孝の事もありぬべし。かくいへばとて、事親を

體用—心の本體と活用

毫髮—極めていさゝか

やめて是等の事を講ぜよといふにもあらず、又是等の理をのこらず究めねば事親べからずといふにもあらず。たゞ事親の上にて其事の當否をきはめ明にし、又は讀書の上にても聖人孝を論じ給ふにあはゞ、反復して其理趣を味ひ、其本末をきはむべし。もろもろの事是をもて例して知るべし。是則格物の學なり。斯くしつゝ久しうすれば、やうやく道理純熟して、後はわが愛親の心ひとつをもて親につかふるに、其道を盡さずといふ事なし。是程朱格物の學の妙處なり。かねて力をこゝに用ひる人にあらずば、其味をしるべからず。孟子の不學してしるは良知なりといへるは、人に孝弟の心學びずしてあり。是を本として學んで、其量をつくせとの事なり。不學してもそれにて足れりといふにはあらず。今朱學の弊を改んとて格物窮理を廢するは、朱子の言を知らざるのみにあらず、矯枉過直といふべし。それも亦まがれるなり。第二等には、理氣體用などの說、孔孟の言及ばざるといふに據つて朱子を議するあり。むかし孔子性相近しと宣ひしに、孟子に至りて性善を論じたまひ、其外養氣夜氣の論など、唐虞三代の書に沙汰もなく、もとより孔子も似たることをも宣はざりしかども、宋の諸先生其旨の聖人にもとらずして、毫髮の疑ぶべきことなきを見つけられし程に、先聖のいまだ發

規々とし—規々として か

蹈襲—あとをふみ行ふ

疎鹵膚淺—ておち多くあさはか

擧正—とりあげたゞすこと

流行し—ゆきわたり

昭然—あきらかなる貌

あなたにても—支那に

せざる所を發すとて、殊に稱嘆せられけり。況や程朱の時、孔孟の世をさること遠し。言を選び論をおこし、道を明かにするに急なり。道理においてたがふ事なくば、何ぞ必ずしも規々とし古人の言を蹈襲すべき。今朱子の說孔孟宣はざるに出でなば、其意を深く考へ究むべし。もし未だ合はざる所あらば、しばらく疑を闕くとも可なり。然るを己が心にあはぬとて、孔孟のたまはざるに事よせて、にはかに大賢の說を輕々しく毀るこそ、其學識の淺陋なるもしられ侍れ。其議論を聞くに、いづれも疎鹵膚淺なる事になん有りける。こゝに一々擧正するにいとまあらず、たゞ其理氣の說をあらく〳〵辯じ侍るべし。彼がいふは、天地の間氣の外になにかあらん。この氣四時に流行し、萬物を生じて、おのづからやまず。是則天道なり。昭然として見えたる通りの事なり。然るを朱子一等上に形象なき物をたてゝ、氣に配して理とするは、隱怪にちかしとぞ。其說似たり。此疑は彼に限らず、あなたにても先儒の中に、是に類したる疑難ありしぞかし。それは朱子の言を深く考へて、なほ疑を免がれぬといふにてありける。かれが一過の見をもて、臆決するやうの事にはあらず。固より理氣前後の說は微妙なる事にて、一座の話にていひ盡し難し。翁暫く老子の語をかりて、譬をもてかたばかり申侍るべし。車を數

ても
疑難—うたがひ非難すること
臆決—よい加減にきめること

へて車なし、歲を數へて歲なし。譬へば車を數へて、是は輪なり、是は軸なり、是は軾なり、是は轅なり。輪をもて車とすべからず、軸をもて車とすべからず、軾、轅をもて車とすべからずとて、輪をすて軸をすて、軾をすて、轅をすてゝ見たれば、車も共になくなりにけり。唯車の理は、車の出來ぬ前に定まりてあればこそ、上代車のなかりし時、車をば作り出すらめ。今とても車匠車を作らんとては、輪を斲り軸を斲りて、何時によらず車を作り出すは、車の理常に滅びずしてある故に、それに基づきて作り出すにあらずや。是によりて見よ。車は輪軸より出づる歟、輪軸は車より出づる歟。車は輪軸より出づるといふは、車の形ある事を知りて、車の理ある事をしらざればなり。歲をもてたとへても同じかるべし。十二時を日とし、三十日を月とし、十二月を年とす。是は時なり、是は日なり、是は月なり、是は年なりとて、のけて見たれば、外に歲といふ物なし。然れども三百六旬有六日に、天と日と會して歲となるの理は、前に一定してありて、日月も約束の如く運ればこそ、それに本づきて、上代に曆をも作り出し、今も曆家に當代の曆を作るは勿論にて、只今なき日月を考へて、前百載後百載の曆を作るに、毫髮もたがひなきぞかし。是その理は日によらず月によらずして、常に存在するにあらずや。されば

樞紐根柢—もの事の根本
方所—方角場所
底極—きはまるところ

天言はずして四時行はれ、百物生ず。是その樞紐根柢となるものありて、天地の太極柱となりて、四時も是より行はれ、百物も是より生ず。然るに車をかぞへて車なく、歲をかぞへて歲なければ、氣をはなれて理なし。外に形象もなく方所もなきほどに、たゞ道理とまでいふべし。よりて孔子は形よりして上下をもて器に對して道をいひ、朱子は形よりして先後をもて氣に對して理といふ。すべて同一理なり。今其本源をしらずして、枝葉の上にて議論を生ぜば、紛々異同なにの底極かあるべき。體用の說も亦しかり。道に用あれば、必ず體あり。寂然不動は體なり。感而遂通は用なり。靜にして存養すれば、體に卽いて用存し、動きて省察すれば、用に卽いて體行はる。是を體用一源顯微無間といふなり。孔子の敬以直内、義以方外とのたまひ、子思の中和をもて大本達道といひ、孟子の仁義をもて正位大道といふ、是またすべて同一理なり。體用をいはねども、いづれか體用にあらざる事ある。彼曲學の徒、僅々として得小自足とすれば、道に全體大用あるをしらぬも理ぞかし。深く論ずるにたらず。第三等には、放蕩を貴び、名撿をいとひ、專に文辭典籍を學とし、一たび程朱居敬窮理の說をきゝては、腐儒の常語とて、相ともに嘲笑ふ程に、學者修己の道においては、講ずべきものともせ

譊々—さわがしきさま
洛陽—京都
剽輕—かるはずみ

ず。その議論を聞くに、不急の察、無用の辯譊々として人耳を喧しうせざるはなし。なにをか取擧げていひ出すべき言の葉にせん。たゞ太息に付してやみなまし。むかし扁鵲齊の桓公の疾を見て、二たび迄はなほいふ事ありしが、三度に及びては、もはや療治の手なかりし程に、藥匙をすてゝ驚走りき。俗學の弊も、こゝに至りては、桓公の疾の日に深きが如し。儒に扁鵲ありとも、療治の手なかるべし。況や老學非才無智の身にて何とて道の輕重をなすにたらん。たゞ口を箝みて驚走りつべうこそ覺え侍れ。」

○矯レ輕警レ惰

翁又いふやう、「當代東西兩都の儒を見るに、もとより人によりて一槩には論じがたけれども、多くは異論を好み、名譽を要するは同じ事にして、其病根は又異なるべし。大抵洛陽の儒は驕惰の弊あり、東都の儒は剽輕の弊あり。洛陽は風氣和し土地狹し。この故に近き比まで其土の宿儒おほくは溫厚柔謹にして、制行正しく、威重ありて人望を失はざりき。然るに近年溫柔變じて惰弱となり、威重變して驕泰となる。空談を倘び文史を玩び、是をもて自ら尊大にして曾て遜レ志時敏する事を知らず、されば良工

蘇秦—春秋戰國時代の辯士。洛陽の人。六國の合縱を策して秦に當る
洛陽負郭の田—都の町はづれの田地
二頃—一頃は百畝

用レ意の勞をいかでしるべきなれば、たゞ道を容易なる事に心得る程に、はては先賢を慢り程朱を毀りてやみぬ。たとへば王孫公子、暖に育ちて艱苦を經ねば、おぼえず驕泰になるが如し。宋の武帝の高祖の葛燈籠麻蠅拂を見て罵つて田舍翁とするも、祖宗の大業を建立せし艱難をしらねば、更にとがむるに足らず。翁むかし史記蘇秦が傳を讀みて、秦が我をして洛陽負郭の田二頃あらしめば、豈能佩ニ六國相印一乎といふを見て、實にもしかりと思ひき。今洛陽の儒、大かた土著に安じて、隱居放言自から足れりとす。もし其人をして世務にあづかり、一官をつとめ、一職を辨ぜしめば、知らずよく其任に堪へんや否や。恐らくは洛陽二頃の田祟をなさば、懷レ居求レ安の人にひかれて、やがてかけ籠らまし。いかで是等の人と聖賢の志を論ずべき。東都の儒は又是に異なり。關東は風氣薄く土地潤し。それに武人俗吏其地に逼居て、其風おのづから儒者にも移れば、昔は文飾なく質直なるかたありて取るべかりしが、今は質直變じて麤惡となりぬる程に、放蕩輕薄德義を銷刻し、浮辭恠說文字を造作す。たとへば蘇秦が洛陽宿執の害はなけれど、世に游說するは縱橫捭闔傾危の道なるが如し。されば今天下の學者、惰弱ならねば剽輕なり。此二病除かざれば、高談ニ性命一博究ニ群書一とも、聖賢の徒といふべからず。横

造作―つくりだす
横渠先生―張載
鄕愿―一鄕の俗人の稱して謹厚の人とする者

渠先生も是をもて學者の要務とし給へばこそ、矯輕警惰の一語を擧げて示されしなれ。惰弱なれば義にいさむ志なく、つひに鄕愿の人となる。剽輕なれば忠厚の人なく、はては讒佞の徒に陷るべし。こゝをもていへば、矯輕警惰の一語、學者の要務なるのみにあらず。しかしながらすべて士たる者の頂上の鐵針たるべし。

○忠厚のこゝろ

されば、士は第一忠厚の心を本とすべし。その人となり輕薄にしては、材の美ありといへど見るにたらず。それにつきて、翁日ごろ樂毅が傳をよみておもへらく、毅は戰國の士にあらず、學問ありて道のあらましをきくの人なり。しかるに後世毅が將略あるをしりて、學問あるをしらず。樂毅燕の昭王に仕へ、上將として齊を伐つて七十餘城を下せしは非常の大功なり。不幸にして師未だ凱旋せざりし先に昭王薨じ、惠王齊の反間を信じて將をかへ兵權を奪ひしかば、毅みづから垂成の大功をすてゝ、すみやかに燕をさる。見幾而作不俟終日といふにちかし。其後身を趙によせし時、趙王燕を伐たむ事を毅に謀りけるに、固辭して其謀に預らず。誠に忠臣の法とすべし。その惠王に報

空谷の足音―極めてめづらしき意
兒の手がしは―其葉表裏共に綠なるより「ふたおもて」の序としていひしなり

ずる書をみるに、忠厚の心言外に藹然たり。戰國反復の世には空谷の足音と申侍るべし。その書中に、君子交絕不出惡聲、忠臣去國不潔其名といへるは、三代の遺言なるべし。もし學問なくしては、誰か其言の旨き事をしらむ。今其意を解き侍るべし。交絕不出惡聲とは、たとへば人と交通して、其人の惡事をいはぬは、もとよりの事なり。其人と中たがひては、己が是をいはんとて其人の非をいふべきに、交絕えて後に其人のあしき事を一向に言に出さぬは、君子の忠厚人に負かざるの心なり。翁其意を詠じ侍るとて、

ならはじな兒の手がしはのふたおもて身は葛の葉のうらみありとも

今更翁づれが申すも愚なれども、伊川先生に感服する事あり。蘇東坡伊川を嫉み惡みて、哲宗に上る奏狀に、程頤が姦と稱し、又衆中にて嘲りて、廖糟陂裏の叔孫通などといひしが、伊川遂に東坡が是非を一言のたまひし事をきかず、是にて知べし。洛蜀の二黨いづれか正なるいづれか邪なる、いはずして明かなり。又邢恕初めは伊川に從ひて學びしが、後に小人に黨し、伊川を讒して陪陵に謫せしむ。門人聞いて伊川に告げしに、伊川宣ひけるは、故人かねて情厚し。われすこしも疑ふの心なしとて、いさゝか不平の辭色な

長湫の戰―天正十二年豐臣秀吉と織田信雄との戰
池田勝入―池田信輝

かりし。是等の事誠に吾徒の師法とすべし。「忠臣去レ國不レ潔二其名一」といふも、忠厚の事なり。是は人臣たるもの君と義絶えて其國を去らんに、あながちに君の非をいふもあらねど、己があやまらぬ事をいうて、一分の上を潔うせんとすれば君の惡しきになるゆゑ、わが名をにごらし自らわが惡しきやうにしてをるとなり。是忠臣の心なり。翁加賀にありし時、ひとりの老人あり、其父太陽寺左平次といひし者。長湫の戰に池田勝入の手にて戰功あり。其後天下泰平になりて、大阪籠城の輩をさへ、御仁政にて諸侯の國に仕ふる事を御許しありし程に、戰功ありし士ども、己が手にあひし事をいひたてゝ仕をもとめしに、左平次一生己が長湫にての戰功をいはず。さて親しきものに、「大將の敗亡したるに、其手に屬したるもの、己が戰功をいふべきにあらず」といひしと語りし。己が戰功をいへば、惣勢の敗軍をば大將の越度にし、一分の言譯して退くにて侍る。左平次そこを思ふにこそ。古人忠厚の餘味あり、いとやさしき事なり。其戰功をいふは遙に劣り侍りぬべし。」

○鬼神の德

益をこふ―學びて益を得んことを乞ふ。敎を乞ふなり
神妙―靈妙にして易く知るべからざること
覺悟―のみこみさとること

ある日講過ぎて後、五六輩跡に殘りつゝ、おの〳〵疑問に及びしが、中にひとりいふは「こゝにひとつ問ひまゐらせたき事侍る。我朝は神國とて、ちかきころ世に神道を說く人あまたあれども、いづれも其說隱怪にして、正理を得たりとも覺え侍らず。もとより鬼神の說は、聖人も假初にはのたまはねば、我等ごとき薄識の人のにはかにさとるべき事にはあらねども、たゞ其片端を示し給はゞ、他日の功夫の種ともならまし」と、各同じ心に益をこへば、翁きゝて、先易を引きて、「聖人以二神道一設レ敎」とあるは、聖人の道の神妙なるをさして神道といへり。仁道などいふが如し。是をひとつの道とするにあらず。然るに世に神道とて說くを聞くに、我國の道とて、聖人の道より一等たかき事のやうにいへるこそ心得難けれ。抑鬼神のふかき道理は、翁もしらぬ事にて侍れども、日ごろ覺悟し置けるあらましをかたり侍るべし。中庸に、「鬼神之爲レ德」といへるは、いかゞ心得給へる。朱子釋して性情功效といへるは、德字の義を釋してかくいへり。もし其德たる實をいはゞ、左傳に神は聰明正直にして壹なるものなりといへる、是則神の德なり。然るに、神は正直なるものといふ事は誰もしれども、聰明なる事をしらず。神ばかりすゝどきものはなし。其故は、人は耳をもてきけば、耳のおよばぬ所は、師曠が聰といふとも

聰—耳のさときこと

端的—其のまゝ

來格—いたること

きかずしてありなん。目をもて視れば、目の及ばぬ所は、離婁が明といふとも見ずしてありなん。心ありて思慮すれば、頴悟の人といふとも、なほ猶豫ありぬべし。神は耳目をからず、思慮に渉らず、眞直に感じ眞直に應ず。是二つもなく三つもなきたゞ一ッの誠より得たる德と知るべし。されば天地の間に、きはめて耳敏く極めて目はやき物ありて、時をもわかず所さりせず、有のまゝに現在し、端的に往來し、あらゆる物の體となりて兩間に盈ちわたりてあれども、元より形もなく聲もなければ、人の見聞には及ばずして、たゞ誠あれば感じ、感ずれば應ず。誠なければ感ぜず、感ぜねば應ぜず。應ずれば忽ちあり、應ぜねばおのづからなし。これ天地の妙用にあらずや。中庸に「視レ之而弗レ見、聽レ之而弗レ聞、體レ物而不レ可レ遺」といへるは此事なり。昔西行法師伊勢の神祠に詣でてよめる歌に、

　なに事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

かたじけなさは何事によるや。涙は何故にこぼるるや。是誠の感動にあらずして何ぞ。神前にて其心他念なく一筋に誠になれば、神も其誠のなりに來格して、迭に感動する程に、涙もこぼれつべし。たとへば淸くすめる水には、其まゝ月のうつりて、たがひに光をますが如し。久しくなれば、一つ誠に渾融して、神と人とをわかず。たとへば水や空、空や水ひとつに通ひてすめるが如し。こゝに至りては、洋々乎として、其上に在るがごとく、其左右に在るが如くなるべし。是神のあらはるゝなり。誠のおほふべからざるなり。さりとて神を遠き事とな思ひ給ひそ。たゞわが心にもとめ給へ。いかにといへば、心は神明の舍なり。一毫も私欲のさはりなければ、おのづから天地の神明と同氣相感じて、斯く著きぞかし。但相感ずる事なければ、さる事なかるべし。西行も神前に至らぬ時は、いかで涙こぼるゝばかりのかたじけなさあるべき。是をもて來格は相感ずるにありといふ事を知りぬ。今各に申す。たゞ躬に省み内に求めて、心の誠に本づき給はゞ、下學の功積んで上達せらるべし。其時にこそ只今翁が申すやう、いさゝかうける事にてなしと思ひ知り給はめ」とて、其談やみぬるに、座中良久しく聲もなく、靜まりかへりてありしが、「翁の御物語いとたふとくこそ侍れ。誠に西行が歌にこたへて、今日もかたじけなさに涙こぼれつべう侍る」とて、各感心にたへずぞ見えし。

舍—居所

無爲—人爲を施さぬこと

○聖人の誠

翁又いふは、「前に申侍る西行が歌にて、舜の無爲にして治まるといふ事を思ひ給ふべし。聖人の誠は則神明なり。もし何事のおはしましては、無爲とはいふべからず。そも何事の何故とは知らねども、たゞその篤恭の至りなん神の如くにして、おのづからかたじけなさに涙こぼるゝばかりに覺えぬべし。それに衣裳をたれ手を拱いて、上に現在しておはしませば、天下仰ぎ奉る事日月の如く、慕ひ奉る事父母の如し。天地無形の神の感應時あるやうなる事にてはあるべからず。されば所レ過者化とて、聖人の身の歷たまふ所は變化をなして改まる事、物のかたに入るがごとし。舜歷山に耕したまへば、民皆畔を讓り、河濱に陶したまへば、器皆いしまあらざるといふにて知るべし。又所レ存者神とて、聖人の心のとまる所は自由を得て廻る事、ものの掌にあるが如し。孔子邦家をえてんには、綏ずれば其まゝ來り、動かせばそのまゝ和すといふにて知るべし。こゝに至りては、とかく凡慮の及ぶ事にあらず。これ聖人の手柄にて仕出したまへる不思議にもあらず。たゞ誠は覆はれぬものになんありける。されば「君子室に居て言を出して善なれば、千里の外應ず。況やその邇きものをや。室に居て言を出して不善なれば、千里の外違ふ。況やそのちかきものをや」と孔子ものたまへり。さりとて家にてする事の、忽に千里に及ぶといふにはあらず。たとへば風の草木に移るが如し。其響彌高にまさりゆく程に、家より國にひゞき、國より天下にひゞく、是自然の理にして、誠のおほふべからざる所なり。こゝをもて、君子は常に内に心をもちひつゝ、たゞ手前を正しくして外を飾る事なし。たとへば錦を衣てうはおほひするが如し。其美おほへどもおほふべからず、いやましに著きぞかし。小人は内行をさまらずして、外見をのみ飾れば臭きものに蓋するがごとし。其臭ふさけども塞ぐべからず、いとゞあらはるゝぞかし。枚乘が吳王を諫むる書に、「欲二人勿一レ聞、莫レ若レ勿レ言、欲二人勿一レ知、莫レ若レ勿レ爲」。此語淺きに似て味ふかし。名言といふべし。口にいうて人の聞かぬやうにし、身になして人の知らぬやうにとするは、いやしきたとへながら、惡に利息を添へて身に負ふが如し。日にそひ月にそひて、其負まさりなば、いかでおほひ隱すべき。聖人より以下は、君子も過なきにあらねども、これをかくさんとはせずして、人の見るまゝに改むる程に、過ちは過ちと見え、改むるは改むると見えて、其しかたにかくるゝ事なく、心に一點曇なきと

錦を衣て—禮記「衣レ錦尚レ絅惡二其文之著一也」

食—「蝕」に同じ

蠻貊—南蠻と北狄とをいふ、卽ち夷の意なり

しるれば、反て其徳の光もまさりぬべし。されば子貢も、君子の過は日月の食のごとし。過てるも人皆見、更むるも人皆仰ぐといへるぞかし。むかし小邾驛千乘の盟を信ぜずして、子路の匹夫の一言を信じ、回紇六軍の兵をおそれずして、郭子儀が單騎の約をおそる。是二子の誠かねて隣國にあらはれ、蠻貊に及ぶことを知るべし。千里の外應ずるにあらずや。もとより聖人の誠には及ばねども、心事明白にして一毫の疑なき事を、天下の人皆しる故に、一たび其言を聞き、一たび其面を見ると其まゝ信服する程に、なにの手もなくなにの造作もなし。是誠の感應にして、恩威智力の及ぶ所にあらず、是をもていふに、好事門を出でず、惡事千里を行くと世話にいへど、これ僻言なるべし。好事、惡事ともに、其實ある事のいづれか千里にゆかざる事あるべき。惡事のみに限るべからず」。

○妖は人より興る

座中ひとり「神は聰明正直なるものにて至誠の感應はさもあるべき事にて候。然るに、昔より妖怪不正の事ども世に流布し侍る。是もその理ある事にや」といふに、翁「鬼神は

五行—木火土金水

爗煜—ひかりかゞやく貌

櫚楹—のきとたるきと

榜表—立札

天地の功用二氣の良能といへば、勿論正理より出でたる事なれども、人の本性惡なくして、氣質におちては善惡あるごとく、神も人世に降つては、正しきあり正しからざるあり。其子細は、陰陽五行の氣の四時に流行するは、天地の正理にて、不正なけれども其氣兩間に游散紛擾して、いつとなく風寒暑濕をなすには、おのづから不正の氣もありて、人に感ずるにてしるべし。されば天地の間、この氣の往來にあらざるはなし。正氣をもて感ずれば、正氣應じ、邪氣をもて感ずれば、邪氣應ず。但正邪ともに二氣の感應より出づれば、邪氣の感とても神にあらずといふべからず。夫正氣の感は、大小となく精誠の所レ致にあらぬはなし。大事にていはゞ、高宗の良弼を感じ、周公の金縢を感じ、小事にていはゞ、鄒衍が六月の霜を感じ、韓愈が惡溪の鰐を感ずる、其事は異なれども、同じく精誠の感にして、怪むにたらず。前年眞西山の集を見侍るに、ある民家の女子、父の疾を憂へて、夜になれば天に向つて身をもて代らんと禱りしに、その誠感じてやありけん、一夜群鵲にはかに遶レ屋飛噪し程に、仰いで空中を眠れば、大星三ッ爗煜として月のごとく、櫚楹の間を照しけるが、翌日より父の疾瘳えけり。西山郡守として、其事をまのあたり見聞せしまゝ、其閭を榜表して懿孝坊とし、記を作りて其事をくはしく著されける。

に書記すこと

是等はことにたしかなる事にて、其感いちじるしといふべし、然るに衰世に及びて、人心正しからねば、大かた邪氣の感のみにて、それより妖怪を生ずるなるべし。もとより怪力亂神は聖人の語り給はぬ事なれども、其理を窮むるは格物の一端なれば、諸君のために申侍るべし。左傳に、妖を魯の申繻が論じて、人之所レ忌其氣燄以取レ之妖由レ人興也といへり。よく物理に通ずる言といふべし。燄は火の未レ盛して進退するとあれば、人の氣にても斯くの如し。すべて人の忌みおそるゝ所は、世話に恐しき物の見たきといふやうに、さながら心に忘れえぬほどに、思想にひかれて火のかつ燒えかつ消ゆるやうに、あると見つなしと見つして、かくしてやまねば、氣うかれて我にもあらずなりぬる程に、邪氣隙に乘じて、幻に形象をさへ生じぬれば、さまぐ\に妖をなし怪をなすぞかし。齊侯の彭生を見、鄭人の伯有を見るの類是なり。すべて氣燄の所レ致にて、正氣の感には絕えてなき事なり。唐宋小說の書に、洞庭湖の邊に水神の祠あり。大湖を渡る人は是に水難をのがるゝやうに禱る事になんありける、ある賈人毎年大湖をわたる程に、その祠をふかく信じて、往來に必賽祀せしが、ある年湖上にて風に遇ひて船破れて、つひに溺死しけり。其子湖邊に到り、父の死を悲しみつゝ怨悔する餘りに、わが父

駿府—今の靜岡
廻舞のやう—めぐりひろがへるさま

此祠を多年信仰して、祭奠聊か懈らざりしに、冥助なかりしこそ遺恨なれ。明日は必ず此祠を焚かんと思ひきはめていねたりし其夜の夢に、水神ふかく恐るゝけしきにて、汝わが罪をゆるさば、湖上にて樂を奏して、其恩を報ずべし。さればとてわれ祠をやかるるを恐るゝにあらず、又汝が怒氣のいきほひに恐るゝにもあらず。唯心のそこに必ず焚かんと決斷したる一念、我にこたへて敵しがたき程にかく謝する、といひけるとぞ。もとより齊東の野語、信ずるにたらぬ事なれども、神は決行におそるゝといふ事、道理ある事なり。もし此人怒の心ゆくまゝに、やかんと思ひながら、その氣燄にして、燒くともやかぬとも決せず、其氣進退せば、やがて神にけおされて、反て祟を受くべし。むかし駿府の御城に、うは狐といひ傳へし狐あり。人是に手巾をあたふれば、それをかぶりて舞ひしが、聲ばかりして形は見えず。たゞ手巾空に飜轉して廻舞のやうを見せし程に、人々興に入りけり。人手巾をあたふる時に、受取る形は見えねども、もたる手をものゝすりて通るやうに覺えて、其まゝ取りてゆきける。若き人々わざと渡さじとあらがふに、なにと堅く持ちても、とられぬといふ事なしと語るを、大久保彦左衞門聞きて、我はとられじとて、手巾をもちて、これとれといふに取得ず。さていふは、さても無分別の人

虚誕―うそいつはり

よ。あな恐とて逃げさりぬとぞ。彦左衞門は、手に覺のある時に、わが手共にきりて落さんと思ひつめけるを、狐さとりしなり。されば武士の心剛にして一筋に直なるさへ、其氣談になき程に、狐も妖をなしえず。まいて正人君子においてをや。本より邪は正に敵せねば、正氣にあうては、氷の日にむかうて忽に消ゆるがごとし。西域の妖僧、傅毅を祈り殺すとて自から暴死し、武三思が妾、狄仁傑にあうて藝を施しえず畏縮せしにて知るべし。夫につきても、世に正人君子乏しき故に、邪氣おのがじし威福をなすこそ悲しけれ。しかのみならず、世擧りて宮觀の淫祠をあがめ、浮屠の邪法を信じて、あゆみをはこび、貨を費さざるはなし。もとより正體もなき事なれども、もののゆるみながらも、形あれば其なりに影あるやうに、深く信向する心から、不思議と見ゆることもあれば、いよ〳〵これに惑ひて、正理を失ふにてぞありける。ともある事には、こゝの神かしこの佛とて、漫に靈驗ありと稱しつつ、いろ〳〵虚誕なる事を造作して、世を誣ひ民を欺く程に、人群聚りて市をなし、錢財積んで山をなす。其人は國家の大賊、其事は天下の大弊といふべし。」

いろひ得ざろ―干渉し得ざる

邵康節―宋の高士

○飛驒山の天狗

しばらくありて、翁、「鬼神の感應は氣の往來なり。わづか氣に渉れば、聲色に顯はるゝを待たずして、鬼神ははや疾にしるものにて侍る。こゝに寂然不動にして、毫末も氣をまじへず、鬼神もいろひ得ざる所あり。是わが本分のある所にて候へば、翁はこゝをさして、我と申したく候。謝靈運が詩に、達人貴自我といひしは、暗に申しあて候へども、その我といふもの、中々靈運ごときが知る事にてはなく候。天且不違、況於人乎、況於鬼神乎。とあるも、人はいふに及ばず、天地鬼神も我にたがひえざる事をいふなり。三代の聖人、この我をもて天下の上に立ちて、天下惟我のみあり、たれか我志に違ふ事あらむといへり。後世の賢人、この我をもて萬人の外に立ちて、千萬人の中といへども、たゞ我ある事を知るといへり。されば我といふもののあり所を尋ぬるに、一念未生の時、本然未發の體是なり。君子こゝを存養してそこなはねば、天地も我より位し、萬物も我より育し、鬼神も我より感應す。なに事か我によらぬ事あるべき。邵康節の、一念起る事なければ、鬼神もしる事なし。我によらずして誰にかよらんといへるは、これを

不思議の—原本「の」の字なし。今假に補ふ

いふ也。それに付きて、あやしき事ながら、加賀にありし時人の語りしは、北國にいやしき工の、飛驒山に行きて、杉を採りてへぎて生業とする者ありき。ある時山中に杉をへぎて居けるに、ひとりの山伏の鼻の隆きが來りしを見て、心に、不思議のものかな。天狗にや、と思ふに、汝はなにとて我を天狗とおもふぞといふ。はやく去れかしとおもふに、汝はなど我をいとひて去れかしとおもふぞといふ。何にても心におもへば、はやしりてとがむる程に、後は是非なく、そのへぎし板のながくはへたるを縮撓めて、繩して括らむとしけるに、心ならず取り外して板はねける程に、其板の末、天狗の鼻にしたたかに當りしかば、汝は心ねの知れぬものかな。恐し、とて行きさりぬるとぞ。板のはねけるは思慮より出でざる事なれば、こゝには天狗も及ばぬにこそ。是にてしるべし。念慮なき所は、鬼神も窺ひえざるになんありける。常人多くは、心に閑思雜慮常に絶ゆる事なく、何事も思慮作爲の中より出づる程に、氣にひかれ物にうばはれて、我といふ物自立する事あたはず。さればこの我を失はじとならば、心源存養の工夫をなすべし。心源存養の工夫は、私欲なきを本とす。この心私欲だになければ、靜虚動直とて、何事も思慮作爲をからず、たゞ靜虚の中より、道理のまゝに眞直に出づる程に、萬物の先に定

無體の體—形なくして然も形あるに等しきこと

萬化の大柄—萬の變化のおほもと

不御の權—制御を加へずして自ら他を從はしむる權なり

見ぬ京物語—知らざることを知れ

まりて萬物の後に墮つる事なく、鬼神を制して鬼神に制せらるゝ事なし。無聲無臭して天下の大本となる、無體の體ともいふべし。無思無爲して、萬化の大柄となる、不御の權ともいふべし。老子の「象帝之先」といひ、釋氏の唯我獨尊といふも、此所をすこし見つくるにやあらぬ。されど彼は人倫をすて事物を外にし、たゞ空寂を事とすれば、人欲を制すといへど、天地を明かにするに足らず。一心を治むといへど、萬事を宰するにたらず。其體はありと見えて其用なし。なにをもて大本とし、なにをもて大柄とすべき。大に似て大に似ざる事なるべし。

○年内の立春

されば中庸にいはゆる、其不覩を戒愼み、其不聞を恐懼るとは、誠の本源、かの何事もおはしまさぬところを持養するの功夫にて、さて隱微の中、一念の起るを省察して、その本源の地を亂らぬやうにするこそ、又簡要にて侍る。これは中庸を講ぜし時にくはしく申したる事にて侍れば、今更いふに及ばず。それに、見ぬ京物語に似候へ共、倭歌の意に引合せて申候べし。古今集の巻頭にのする在原元方の歌、もとより歌のさま

る如くよそほひ話す譬

古今集―我國最初の勅撰歌集

祖父―在原業平

千里の謬も云々―禮記「君子愼レ始差若毫釐謬以二千里一」

濂溪先生―宋の大儒周敦頤の號

も手づよく力あるやうに覺え侍る。二十一代集をはじめ、家々の集にも、春の巻頭とするを見るに、大方は空の霞、谷の鶯など、春の景色をもて春たつ事をよめり。それは春の始をいふには、第二段に落つるなるべし。いまだ冬ふかく何のけしきも見えぬに、氣色をはなれてよまんは、なにをか言葉の種とせむ。いと難かるべきわざなるに、去年とやいはん今年とやいはんとは、なにの造作もなく、さりとは面白く取りなされたり。祖父にもはぢざる作者といふべし。されど翁が此歌を取侍るは、詞の面白きといふにもあらず、これをわが修行にたとふるに、我心に人しらず一念のきざすは、獨居の時暗處の事なれば、なにのけしきも見えず、いはゞ年の内に春の來るに同じ。一念の萌すところに、既に善惡のわかれあれば、年の内に去年と今年のわかるゝに同じ。されば千里の謬も毫釐の差よりおこるといふも、こゝにある事なり。濂溪先生の、幾は善惡といへるも此事なり。是非のさかひ善惡の關と知るべし。されば目をはなたず此關を守りて、われとわが心に善とやいはん惡とやいはんと尋ねつゝ、一筋に惡をさり善に向ふこそ、我儒の修行の本とする事なれ。もし此所に心ゆるして、色にいで聲にあらはれて始めてさとらば、たゞ手の延びたるといふばかりにもあらず。たとへ勉強すとも、力をもちふるに

貫之―紀氏古今集の撰者

難かるべし。されば、元方の歌、詞のをかしきのみにもあらず、聖學のふかきにさへたとへつべし。常に打吟じて、我心の省とするに助なきにあらず」。

○袖ひぢての歌

座中ひとり和歌を好める人ありしが、「只今迄、元方の歌たれも口馴れたる事に候へども、人心善惡の幾にして意得べき事とは思ひよる人なく候に、御物語にて始めて承りて候」といへば、翁「古今集は外の集とちがひ、其歌いづれも誠實に候故、おのづから道理にかよはして見るべくこそ候へ。右の元方の歌にさし繼ぎて、貫之の自らよみたる袖ひぢての歌をのせしも、月令に、孟春のはじめに、東風解レ凍とあるにかなひて、心ありて見え侍る。其故は、春風の凍をとくこそ、陽和の至る最初のしるしにて侍れ。かの霞鶯などやうの事は、是程に的實には覺え侍らず。されど春風の凍をとくといふばかりにては、いかによみかなへたりとも、さまで餘情あるまじきに、去し歲の春過ぎての後より夏秋冬をへし事を、「袖ひぢて結びし水のこほれるを」と、一首の中に詠みこめて、さて「春たつけふの風やとくらむ」と、今又春にかへるこゝろにて結びし事、千鈞の重さ

ある物から、歌にたけありて、餘情かぎりなきものなり。此外の歌も、古今集にのせしは、いづれも言葉すなほにて、なにの手もなきやうにて、打吟ずれば、その味おのづから深長にして、言外にあるやうに覺え侍る。詩にていはゞ、漢魏の樂府古詩の如し詩は盛唐といへど、漢魏の詩は、實情より發して、おのづから巧拙をはなれて見ゆ。更に同じものにあらず。古今集の歌もしかなり。その言葉すがた後の作者の及ぶべきことがらとは見えず。是をおもふに、さして撰者よみ人のとがにもあらず。文章は時と上下すとあれば、時代の盛衰につれてかくあるにこそ。いかゞ思ひ給へる」といへば、「翁の仰せられやうちがふまじく覺え侍る。歌人の論も大かたさにてこそ候へ。さて右の貫之が歌に付いて思ひ出したる事侍る。天文のころかとよ、織田備後守、一族彦五郎と不和になりて、爭戰に及びたるを、備後守が家老平手中務といひし者、一族の不和なるは、敵國の侮を受くるものなりとて、和睦の事を謀りしが、事とゝのひしかば、彦五郎が家老坂井、河尻などいふ者のもとへ、中務よろこびの文を遣すとて、其文のはしに、貫之が袖ひぢての歌をかきつけけるとぞ。親族のちなみは、袖ひぢて結びしやうになれ睦じきものの、不和なるは是氷れるにて、今又和睦してもとへかへるを、春たつけふの風

春秋の世―周末六國對立の時代

淀のわたりの云々―拾遺集「何方に鳴きて行くらむ郭公よどのわたりのまだ

やとくらんとよせけるにて、かゝる事によそへても、こゝろ深く思ひ長く、言葉さへたりて、誠にたけき武夫の心をも和ぎぬらんとおぼえ侍る。中務かしこくも思ひよりぬるにて候。翁はいかゞ思ひ給ふにや」翁打ちうなづきて、「昔春秋の世に、列國の士大夫宴會の時は、必ず三百篇の詩を歌ひて、互に志をあらはしけり。其後このこと世に絕えて、魏晉よりこのかた、たゞ自ら詩を賦するを專にし、巧拙を爭ふ事になりけるこそなげかしけれ。やまと歌もさにてこそ侍れ。むかしより歌を好む人をみるに、たゞよまんとのみするなるべし。必ずしも自らよまずとも、萬葉古今などの歌を、時にあたりて思ひよりて、打吟じたらむは、心もやすらかに、あはれも深かるへし。

白河院、五月のころ淀に行幸の時、曉になる程に、子規ほのかに鳴きて過ぎければ、俊頼など一首詠ぜまほしく覺えしに、女房の舟中にて、「淀のわたりのまだ夜ふかきに」と打吟じたるは、中々あたらしくよみたるには、まさりて聞えけるよしいひ傳へ侍る。されど是は、ほとゝぎすの歌をほとゝぎすに思ひよりたるなり。作者の心はそれとはなきを、平手が袖ひぢての歌を引きしやうに、その意のかよふをとりて、外の事に引合せたらんは、すぐに比興のこゝろにもかなひて、ことに感情ありてきこえ侍る。周人の三

夜ふかきに」(壬生忠見)

比興―他の事物に托してうち興ずること

おふする―負はしむる

百篇の詩を歌ひしも、みなかくの如し。いと優しき事なり。その平手、後に信長をいさめかねて自殺しけり。その諫書を見るに、學問ありて義理のあらましをしる人とおしはからる。をしき事なり。古より忠臣義士の不幸ほど痛ましき事はなし」とて、長使英雄涙滿襟といふ句を口ずさびけるにぞ、座中の人々感じあへりき。

○諸道わざよりいる

ある時、講會やゝ懈りしに、日を經て諸客來會せしが、此ほどは世事にさへられて懈怠がちなりとて、悔みけるを、翁聞きて、「世事にさへられて懈怠するといふは、大かた學者の常語にて候。此翁をはじめ、さやうに申す事にて候へども、畢竟己が志のたゝぬ故にて候を、それとは意得ずして、世事に咎をおふするにて侍る。但世事にさへられて、書をよむに懈るは、さもあるべし。それは一説ある事なり。すべて學といふは、聖賢の道をつとめ習ふ事なり。そのつとめ習ふに、致知あり、力行あり。されど、其理をしらねば行はれず。其理をしるは書に限らねども、聖賢の書を第一とする程に、學といへば、致知を主とし、致知といへば讀書を主とす。この故に、大學に、自修も學なれども、學

後生―少年

をもて自修に對しぬれば、その學といふは、致知の事なり。子夏も、「仕而優則學」といへり。仕ふるも學に外ならねども、仕へていとまあれば學ぶとあれば、その學といふは、讀書の類なるべし。又子路、「何必讀書然後爲學」といへるを見れば、その學かみ孔門の學といふは、讀書を專とすると知られ侍る。しかいへど、學は讀書に限るべからず。書を讀みて義理を講じ、事物に卽きて其理を窮る、同じく致知の事にして、力行の始なり。もとより聖人の道は、日用事物を外にせねば、父母につかへ君につかうまつり、朋友に交るより、其外世にあらゆるもろ〳〵の應接に至るまで、一事一物、いづれか致知の地にあらざる。一動一靜、いづれか力行の時にあらざる。善はその善なる理をきはめ、惡はその惡なる理をきはめなば、世事善惡ともに、皆わが學中の事なり、いかで世事にさへられて懈るといふ事あるべき。翁加賀にありし時、大坂よりひとりの後生北地に寓居するあり。翁に相見したきよし紹介していひこしけるが、他日翁が敝廬を問ひて談論時を移しけるに、翁、「近き頃は世事多くして、久しく廢學なんしける」といひしかば、其人「學は世事の外なる物にや」といひしに、翁意得て、其失言を謝しき。翁が意は讀書を廢する事なるを、ふと廢學といひたる故、彼聞咎めけるなり。されば天

職事—職務とする事柄

親切—身に關係の深きこと

下の事に卽きて其理をきはめて、吾心の知を致すは　内外を合するの道といふべし。しかるに陽明良知の學をする人、朱子格物の說を譏りて、朱學の格物よき事にもせよ、世の居官務職日夜給仕する人などは、何の暇ありて天下の理をきはむべきと難じけるよし聞き侍る。是朱子格物の說をあしく意得て、先一間時を得て事物の理を窮めて、後に其事をするとおもへるにかあらん。朱子の格物といふはさにはあらず。親に事ふる上にて、その事々に卽きて孝の理をきはめ、君に事ふる上にて、其事々に卽きて忠の理をきはめ、昨日情のいまだ至らざるを今日しり、今日事のいまだつくさゞるを明日しる。是格物致知の學也。居官任職がごときも、必ず其事をつとむる上にて當否を處し、事空を察し、日々に職事に熟し、誠實に進む。是則格物致知なり。もし居官任職ものは窮理のいとまなしといはゞ、嚮に翁が世事故に廢學するといふに同じかるべし。されば事に大小ありて理に大小なければ、時となく所となく格物の地にあらざるはなかるべし。さりぎらひすべきにあらず。よりて天下の物に卽きて其理をきはむとはいふなり。さりとて先後緩急の序はあるべき事なり。日用親切の事をすてゝ、一草一木の理をきはめよといふにはあらず、今良知の說手短く本づきやすきやうにきこゆれども、聖人の道は

六藝—禮、樂、射、御、書、數、

昆吾の鐵—昆吾は山名、昆吾の劍西戎に出づ玉を切ること泥を切るが如しと列子に見えたり

荊山の璞—荊山は山名、和氏の璧を產したる地なり、璞はあらた

さにはあらず。およそ天下の道、なににてもわざより入らざるはなし。詩にいへらずや。天生烝民有物有則、物はわざなり、則は法なり。たとへば六藝を習ふが如し。其わざにより、其法によらずして、吾心の知にて其理をきはめんとせば、何として其道をつくすべきや。聖人の道もかくの如し。吾心に不學してしるの良知ありといふとも、事物に卽きてその知を致さずしては、未鍛のかねのごとし。昆吾の鐵といふとも、あらがねにては銳利の用をなさじ。未磨の玉のごとし。荊山の璞といふとも、あら玉にては、溫潤の色を發せじ。この理をよく思ふべし。今孝にていはゞ、聖人門人の孝を問ふに答へ給ふを見給へ。孟懿子には無違を宣ひ、孟武伯には愼疾をのたまひ、子游には不敬をいましめ給ひ、子夏には色難しを詠じ給ふ。此四子親を敬愛するの心あらざるにはあらず。たゞ事親事長の上に付いて、或はこれに得て彼に得ず、又は愛勝つて敬たらず、敬勝つて愛たらざるゆゑに、かく宣ふにてありける。仁を問ふに答へ給ふも是に同じ。顏子には克己復禮を告給ひしが、克己復禮、必ず日用事物に卽いて其理を驗むる事なれば、視聽言動をもて宣へり。仲弓には敬恕を告給ひしが、敬恕も亦日用事物の上にて驗むる事なれば、出門使民をもて宣へり。其外も推してしるべし。もし

ま

六經—詩、書、易、春秋、禮、樂の六經書

釋寂室—名は元光、佛燈大師に師事し、元應二年入唐、七年にして歸る。圓應禪師の號を授けらる。貞治六年寂年七十八

比丘—僧侶

阿同す—おもねり雷同する

踐履—道をふみ行ふこと

圓悟—人名。僧

六經の教も良知にて、すむ事にしあらば、詩は思無邪にてすみ、毋不敬にてすみ、易は審變識時にてすみ、春秋は尊周抑夷にてすみなまし。何によりて詩に國風雅頌の情をいひ、禮に經禮曲禮の目をわかち、易に陰陽卦爻の變をつくし、春秋に朝聘會盟の事を備ふべきや。この故に六經の教は、天下にあらゆる事物の理を明かにするにあり。事物の理明かならざる事なければ、吾心の知つくさゞる事なし。わが心の知つくさゞる事なければ、是をもて身を撿するに、節文愼まざる事なし。然れば程朱のいふ所の致知力行は、則孔門の博文約禮にあらずして何ぞ。それに致知格物の説を義外とて譏るは、たゞ罪を程朱に得るのみにあらず、實に孔門の教に違ふなるべし」。

○釋寂室の祕訣

ある日講はてゝ、翁もの語りに、「昔足利家治世の季に、寂室といひける僧あり。わかきころ大明に渡海し、東歸の後、僧侶歸依せしが、其徒に語つていふは、吾に緊要の一訣あり。祕密の事なれども汝に付すべし。汝每日晨に興きて、まづ手を引いて頭顱を摩で、又目をもて袈裟を顧て、心に念じ口にいふべし。吾はこれ釋迦文佛の法孫なり。たとひ命を殞すとも、比丘の模範を失はじと、是第一の覺悟なりとぞ。寂室異端の徒ながら、いと殊勝なる事なり。儒家にこれ程の志操ある人をきかず。大方儒者の模範を失ひて、反つて釋氏に阿同し、彼が下風に立つ事をしらず。むかし尹和靖の踐履の嚴整なるをば僧も見て感じ、「儒家にいふ周孔も是に過じ」といひ、朱文公の高風を圓悟仰慕し、其梅花の詩を和して、「獨憐萬木飄零後、屹立風霜慘淡中」となむいひける。二賢は眞儒にて、異端を絕れしかども、彼さへ歸向せしぞかし。今世の儒者をみるに、武人俗吏にも貶議せらるれば、いかで人の敬信を得べきや。甚しきものは、戈を倒にして聖言を駁し程朱を譏る者も、近來世に多く出來侍る。儒敎の振はざるこそ理にて候。又近來武士の風の衰弱になるも、人々多くは武道に心懸薄きが所致にて候。北地にひとりのふるき武士ありしが、子弟に訓へて、汝等すでに兩刀を佩びて武士と名乘りぬる上は、朝夕武名をけがさじとおもふべし。こゝに一つの口傳あり。汝等門外に出る事あらば、家の閾を蹻ぐ時に、必ず氣をつけて、再び家に歸らじと覺悟すべし。此覺悟なくば、外にて不慮のことあらん時に心おくれしなん、とぞいひし。寂室がいふ所と、道は替れども其意趣は同じ事なり。されば いづれの道にも、心懸ふかき人は、かくなんありける。但其

心懸けて忘れじとするは何事ぞといふに、釋氏は五戒を破らず、聲利に近づかざるをいひ、武士は武道に不覺をとらざるをいふにやあらん。それは簡約にて紛るゝことなく、心懸くるにやすかるべし。吾儒の道は百行を該ぬれば、何をか題目として心懸くべき。翁常に立居につけて思ひ出つゝ、忘れぬ事三あり。其三は、父の恩、君の恩、聖人の恩なり。欒共子が言に「先王之制、民生於三、事之如一。惟其所在、則致死焉。父生之、君養之、師教之」といへり。是欒共子が始ていひ出るにあらず、先王の大訓にして、古今の通誼なり。中に、師といふには同異あり。道德の師あり、術業の師あり。古人も、人師は得がたく、經師は得やすしといへば、まいて後世に至りては、道德の師は得がたく、大かた術業の師なれば、君父の恩に竝ぶべきは稀なるべし。たゞ後世に教をたれて、我人依賴し、其恩深長なるは聖人なり。夫報本不忘恩は、人道の大端なり。されば、父母はわが出來し本なり。我を生じて我を育す、一毛一髮までも、父母の遺體にして、遺愛のある所にあらざるはなし。いかゞして忘るべき。さて君恩に浴して、不餓不寒、妻子を養ひ、親族を賑はす、すべて養生送死の道、世話にいふ箸一本迄も、君恩にあらざる事やある。いかゞして忘るべき。されど、飽まで食し、煖に衣て、

簡約—てみじか
通誼—古今に通じて守るべきみち
術業の師—一術一業を敎ふる師
大端—發端

君父につかうまつる道をもしらずは、禽獸に近かるべし。幸に聖人の敎によりて、義理のあらましをもしり、禽獸に免がるゝは、これ聖人の大恩にあらずや。いかゞして忘るべき。およそ人として、常に此三を忘れずば、天理おのづからほろびずして、本心を失ふに至らざるべし。衆善のあつまる所ともいふべし。翁は常に此三を忘れずおもひ出て、身にしむばかりに覺え侍る。家學の要訣とも申しつべし。今人家の子弟を見るに、多くは我身の樂をのみ思うて、君父の恩を思ひしる心なきよりして、言行に愼みなく、放逸に流れ侍る。又老子碩學と稱する人も、聖人の恩を身におもひしらざるが故に、自ら高ぶり、名聞を務めて、篤實なる方は露殘り侍らず。もしこの翁が家の要訣を授けて内省せしめば、陽浮の氣を降伏して、誠實にすゝむの媒ともなりぬべし。されど、彼が師といひ弟子といふ者、程朱親切の訓を聞きては、嘲笑うて頭痛すといふもあり。惡心すといふもありと、人の語りしが、翁が今いふ說をきかば、さこそ嘔吐もしぬべし。もし世に篤學の人しあらば、老耄の囈言にあらざる事をしらんかし。

衆善—多くのよき事
名聞—世のきこえ名譽
惡心—心地惡しくなること
老耄の囈言—おいぼれの事情にくらきことば

長湫の合戰—前に註す

駿臺雜話 卷二

○武運の稽古

ある時、わかき人々、武藝の場より歸るさに翁が菴へ來て、例の文談に及べり。翁いふやう、「武藝は各の家業といふべければ、常に稽古あるべき事なり。但武藝と武運といづれか重き事とおもひ給へる。翁は武藝より武運は重き事とおもひ侍る。其故は、いかに武藝に達したる人なりとも、武運つきなば何の詮かあるべき。長湫の合戰に森武藏守は打物取つて鬼武藏といはれけれども、かけ出るとひとしく銃丸に中りて即時に果てぬれば、武藝も武勇も用ふべきやうなく侍る。然れば武運ありての武藝ならずや。各武藝の稽古あらば、先武運の稽古し給へかし。さて武藝の稽古は、それ〴〵の師に問給はゞくはしかるべし。武運の稽古においては藝術の師の知る事にては侍らず。それは翁などこそ」と語りのこしけるに、座中ひとり、「翁の仰事には候へども、武運の稽古と申す事こそうけられ候はね。昔より人力の及ばぬ事なればこそ、武運とは申しつれ。も

「稽古」の字原本「藝古」に作る
肅殺の氣—ものをそこなひからす氣
日月の食—「食」は「蝕」に同じ
推步する—おしはかる

し稽古にて及ぶ事ならば、誰か稽古せざるべき」といへば、翁かしら打振りて、「いや武運に稽古こそ侍れ」。「さらば承らむ」といへば、翁、「各思案して見給へ。運はいづくより出づる事にて侍る、天より出るにあらずや。されば世話にも運は天にありと申候。とかく運をば天に禱るより外はなかるべし。天の心に叶はんとならば、天の好める事は何事ぞ、惡める事は何事ぞと尋ぬべし。翁つら〳〵天の好惡を案じ見るに、天は仁をこのみて甚不仁を惡む。信を好みて甚不信を惡む。其いはれをいふに、天はたゞ萬物を生ずるを心とする故に、古より今に至るまで、年々人物を生じ〳〵てやむ事なし。秋冬肅殺の氣行はるゝといへど、果して肅殺するには非ず。生氣を固うして根へ歸せしめ、春を待ちえて又發生せんとなり。易に、「生々之謂ㇾ易」といひ「天地之大德曰ㇾ生」といへるは此事なり。天にありて物を生ずるは、人に在りては人を愛するなり。各是をもて見給はゞ、天の仁を好みて不仁をにくむといふ事疑なかるべし。又信を好む事をいはゞ、日月星辰の行度、萬古を經ても一日の如し。日月の食を見給へ。遙に大空の外なる事を、こゝもとにて推步するに、分秒迄もたがはず、是に過ぎたるたしかなる事あるべきや。天下の至信といふべし。然れば、人は外の事はしばらくさしおく、たゞ仁にして信にだ

冥助し—冥々のうちたれ給ふ神佛のたすけ
よき計—原本其下に「と」字なし
三つ葉四つ葉に—幾棟となくつゞくさま
厭勝—まじなひ

にあらば、おのづから天心に叶ふべし。天心に叶はゞ、などか擁護なかるべき。さりとて、しばらく仁を行ひ假に信を守りて、其驗あるべきとにはあらず。是は平生にある事なり。常に仁を好みて人をそこなはず、常に信を篤うして人を欺かず。かくしつゝ歲月を積みなば、其誠天にこたへて、はからざるに自然の冥助もありなん。されば戰場にても、おのづから禍機に觸れず、矢石にもあたらざるべし。翁が武運の稽古といふは、是を申すにてこそ侍れ。老人の僻言と聞給ふべからず。たゞなげかしきは、世俗の有さまなり。專に身を利して人をそねみ、偏に智を恃みて詐を飾る。自らこれを世を渡るよき計とこそ思ふらめど、終には天に見捨てられぬべし。人として天に見捨てられなば、いかでかよき事のあるべき。翁わかき時より、世に時めく士大夫の邸宅を過ぎて見るに、三つ葉四つ葉に作りならべたるに、歲々に諸寺諸山より捧げすゝめける武運長久といふ牌を、門に釘せぬはなし。然るに其家或は刑戮せられ、或は子孫斷絕して、武運長久の牌は其まゝ門にありながら、主うせ家滅びて、跡方もなく成行くもあまた有るにて侍る。又それ程にこそ侍らね、身を辱しめ名をおとして、晩節を保たざるもいくばく人ぞ。是等は皆武運の稽古なき故にこそとおしはからるれ。日ごろ稽古なくして、祈禱厭勝の

師表—表は木を立てて晷を見るもの。師は弟子の望んで法をとるものなればこれに譬へていふ

左道—邪道

夭す—若死す

力にて武運を守らむとおもふ事、至つておろかなりといふべし。孔子も、「獲罪於天無所禱也」とこそ宣へれ。凡神にこび佛に諂うて、符章陀羅尼やうのことを信ずる、婦女などのするはいかゞせん、丈夫たる者の有るべき事にはあらず。然るに近世士大夫より上つかた民の師表たる人も、こゝに惑はざるはすくなし。されば左道の民間に行はれてはてしなきも、是誰が過ぞや」とて、翁毛詩の「瞻烏爰止于誰之屋」といふを打吟じて、慨嘆におよびしが、いかなる心にかありけん。

○善惡の報

しばらくありて、座中より翁にいひけるは、「武運の稽古と申す事、あたらしき事承りて感服し侍る。今より此稽古わすれ怠るまじきにて候。但世には仁にして信ある人に禍あるもあり、不仁不信なる人に福あるもあり。顏回は大賢なれども、貧窮にして夭し、盜跖は大盜なれども、富厚にして壽し。翁のいへる武運の稽古も、こゝに至りて少し疑はしうこそ候へ。是はいかゞ心得侍るべきにて候」翁、「それ善をすれば福あり惡をすれば禍あるは、是正理の前にて必定の事なり。それに幸あり不幸あるは、時の

黜罰—官をおとされ罰をうくること

不易—變ずることのなきこと

仕合にて不定なる事なり。聖人はたゞ正理を説給ふにて侍る。不定の事をばいかで説給ふべき。たとへば身に病なく、長命ならんとおもはゞ、常に酒色をいましめ、養生するにあり。主君の氣にあひ、立身せんとおもはゞ、職事を懈らずして、よく奉公するにあり。然るに、養生よくても夭死する人あり、養生あしくても長命なる人あり。さればとて養生しても益なし、養生せずしても害なしとはいふべきや。よく奉公しても、不幸にて立身せざる人あり、奉公よくせずしても、幸にて立身する人あり。さればとて、よく奉公しても益なし、奉公よくせずしても害なし、とはいふべからず。もし養生しても益なしといひて、日夜酒色を恣にせば、やがて病死に至るべし。奉公しても益なしといひて、たび〳〵職事に懈らば、やがて黜罰せらるべし。しかれば、養生は長命を得るの道、奉公は立身を得るの道たるは、是不易の理といふべし。各よく考へて見給へ。なに事にてもあれ、かねて覺悟をさだめ給はんには、道理の前にて定まりたる方にきはめ給はんや。時のしあはせにて定まらぬかたに極め給はんや。道理の前にて定まりたる方にきはめ給ふにてあるべし。道理にて極めたる事は、たとひちがひても後悔なかるべし。しあはせをたのみては、覺悟も定まらぬものなり。それ故に、かねてのあらまし違ひぬれば、

愚頑—おろかにしてかたくなること

必ず臍を噬むぞかし。されば福善禍悪といふは、道理の前なる事なり。聖人の教も、君子の守も、道理の前にて極めて、其上吉凶禍福は天にまかする外はなき事なり。いはんや道は人の當然の事なれば、福を得んとて善をなし、禍をおそれて悪をなさぬといふにもあらず。この故に孔孟の人を敎へ給ふを見るに、福善禍悪の沙汰に及ぶ事なし。商書にこそ、天道は福善禍淫とは見えたれ。是はもろ〳〵愚頑なる民に命じ給ふによりて、かくはありし事ならん。然れどもこれ道理の至極したる事なれば、釋氏の方便などやうの事と、同日の談にはあらざるべし。

○天人相勝

翁かさねていひけるは、「人衆勝レ天、天定勝レ人」是は伍子胥呉王闔閭を勸めて、楚國に攻入り、父兄の仇なればとて、舊君平王の墓をあばきて、尸を戮するを、伍子胥が舊友申包胥、平王の臣たりしが、あまりの事とて、人して伍子胥に斯くいはせける。古今の名言といふべし。天は必ず人にかち、邪は正に敵せず。然れども人衆くして勢盛なれば、人力をもてしばらく天に勝つ事もあれど、それは天の未だ定まらざる内の事な

一簞の食一瓢の飮—貧困にして飮食心に任せざること

贓吏—賄賂を收めて事を一二にする不正の吏

り。天定まりては人に勝たずといふ事なし。但天は悠久にて自然なる物なれば、人間の約束などの、急に其驗見ゆるには似べからず。然るを人ちひさき眼をもて、天道を窺ふ故に、たゞ目前見る所をもて、善悪の報なき事と見過しつゝ、君子は善をしても疑あり、小人は悪をしても恐れず。その善悪はかはれども、いづれも天定まりて人に勝つといふ事を知らねばなり。それ顏囘の夭、盜跖が壽は、天のいまだ定まらざるなり。其後天の定まるをみるに、顏囘は一簞の食一瓢の飮、陋巷に窮居せしかども、其名今に日月と倶に垂れて、千載朽ちずしてあり。盜跖は衆徒千人、天下に横行せしかども、身死して肉いまだ寒えざるに名先ほろびて、誰いひ出す者もなし。責て遺二臭百世一こそ、積悪のしるしともいはん。是をもて見給へ。天の顏囘に報ずる事果して薄しとせんか、盜跖に報ずる事果して厚しとせんか。その上顏囘、盜跖の如く善悪の報おそきは稀なり。其外世俗を見るに、善悪の報端的なるもあり、又しばらくおそきもあれども、其身に及ばぬはなし。近きころ國家贓吏多くして、前後罪にあたるが如し。はやくあらはるゝもあり、おそく知るゝもあり。又幸にして一生のがれて死後にしるゝもあり。いかゞして斯くはあるぞといへば、郡縣の租税、金穀の出納、年を積みて限なく稠疊する故に、そ

恬然―恥ぢざる貌

の交互紛糾の間、金銀の出入たがひありても、大かたは知れ難き程に、小人は利欲にさときものなれば、それをよき機會と見て、色々智を廻しつゝ、ひそかに官財を私して、妻子をさかやかし、奢侈を極むれども、その跡見えぬ程は、恬然として自ら計を得たりとす。其内あらはれて罪に行はるゝもあれども、それは其人の才覺たらぬ故也と、反て己が智に自慢して、いさゝか懲戒むる心なし。されど才覺をもてする事の、いつかたがはぬことやある。一旦はからざるに其端見えて、糺問におよぶ時にこそ、分釐も勘定に漏るゝことなければ、智も計も施す事なく、その姦利忽にあらはれて、さきにしばらくのがるゝと見えしも、末の露もとの雫にて、彼も是も終には免るゝはなし。しかれば、國家の上にて見るに、大きなる所帶は、かくの如く事の實否俄には知れ難きぞかし。いはむや天は四海國土を徧覆し、幾億萬ともなき人を引受けて、いはゞ莫大の所帶なり。およそ人のする事、善となく惡となく限もなく入亂るれば、善惡の報いかでか急に極るべき。されば前後不同ありて、治定せぬ事のやうに見ゆる程に、小人の險を行うて幸をもとむる事も、怪しむに足らず。然るに天にも終には勘定の極まる時あり。是を天定まるといふなり。こゝに至りて天の聰明は、天下の名算の人といふとも及ぶまじければ、

葱嶺の敎―葱嶺は釋迦の修行したる山、故に佛敎をいふ

善惡の報輕重大小すこしもたがふ事あるべからず。昔よりもろこしやまと共に、世の英雄豪傑、多くは己が武勇智謀に誇りて、天の未だ定まらざるを見て、天道は人力をもて自由になるものと思ひつゝ、猛威を逞うし、詐力を恣にして、一旦は志を得るに似たりといへども、程なく天定まりぬれば、忽に天罰にあたりて、身失せ家滅ぶる事、古今歷々としてそのためしすくなからず。されば人として天に勝つは、禍のもとと知るべし。小人は眼前の利を見て、淺はかにこれを喜び、君子は未然の害を鑒て、ふかくこれを懼る。詩にいへらずや「畏天之威、于時保之」と。誠につねにおそれて保つべき事なり」

○夢のうき世

こゝにもと葱嶺の敎を信ぜしが、近きころ翁にまなべる人あり。ある日の會に、かたへの人にむかひて、「某翁にまみえしより、儒道の尊きことをさとり侍る。されど釋氏にもすてがたき事侍る。今の儒者を見侍るに、多くは實有の相に泥みて、世事に拘り名利にわづらふ程に、一生道に所見なくて終り侍る。佛者は世を如夢如幻と見る故に、異端

實有の相—實在のすがた

本覺—佛果を證見すること

果然の腹—「果然」は飽く貌。莊子に「三餐而反ル腹猶果然」とあり

にもせよ、佛性をさとり、本覺の地に至る人も多し。吉凶糾へる繩の如く、慶弔踵を門に接ふるを見れば、浮世の有樣すべて夢にて侍る。いかで是に心をとゞむべき。一向に夢と見破りてこそ道にも本づくべけれ」といふ。翁聞きて、なにがしの申さるゝ所、其いはれなきにもあらず。昔より高明の士の儒を逃れて佛に歸するは、其故にてこそ候へ。それにつきて、鄙しきものがたり侍る。いつの事にか、或人翁に語るは、「さる家に宴饗の設ありしに、其座はてゝ衆客もろ共にまかりしが、其中に一人、あまり酒食に飽滿してそのくるしさにたへがたきまゝに、うめき〳〵果然の腹を抱いて歸りしに、路にて乞兒の飢ゑて食をもとむるにあうて、あらうら山し、彼が身にならばなにかあるべきといひし」とぞ。いとをかしく侍る。今儒者世事にあき名利をいとひて、反て頭陀の敎をしたはしくおもふは、此人の酒食に飽きて乞兒をうらやむに似たり。わが名敎中に樂地ある事をしらざればなり。夫天下に眞と妄とあり。天理より出るは眞也、人欲より出るは妄なり。天地開きそめしより。三綱五常の道ありて、古も今もかはる事なし。されば天道の誠より出でて眞なる物なり。いかで是を夢となし假となさん。但世の人々、多くは富貴利達を謀り、毀譽得喪に拘りつゝ、一生東西に奔走して日夜經營する程に、忽に

孔子も—論語に「不義而富且貴、於レ我如二浮雲一」

瞽聾—めくらとつんぼ

往き忽に來り、圖らざるに榮え、はからざるに衰ふ。これ等は皆人欲よりいでて妄なるものなり。夢ともいふべく假ともいふべし。孔子も不義の富貴を見給ひては、浮雲のあるかなきかのやうにおもひ給ふとなり。しかるに釋氏三世の說世に行れしより、すべて此世を夢と見假と見て、眞と妄とをわかずして、三綱五常をはじめ悉く打破りて、是を棄つる事塵芥の如し。たとへば目ありて物を見、耳ありて物をきく故に、見る事にまよひ聞く事にまよふぞとて、終に目をつぶし耳をつぶして瞽聾となり、何事も見ずきかずして快しとするが如し。しらずや、心はもと天より受けて、衆理を具へ、萬事に應ずるにてこそ、その虛靈なる事を貴ぶなれ。今理と事とを二障として、三綱五常をさへすてゝ、わが心をあらぬものとなしなば、なにをか本來の心とすべき。定めてその神識の靈覺なる物をとらへて、本覺眞如とするにかあらん。たとへば心は火の光明なるが如し。火は物を照してこそ火とはいふべけれ。もし山海などにある龍燈、山燈などと世にいふ火のごとく、ものを照す事もなく、たゞすさまじく沈める光のみありて、人里遠く無用の地に自在に飛びありくを。神火とて尊ぶがごとし。されば佛法世に行はれてより後、五倫五常をはなれて、たゞむなしく動作する人あり。人事物理を具せずして、た

ゞむなしく靈覺なるこゝろあり。日本は推古より前、もろこしは後漢の明帝より前に、かくのごときの人なく、つひに斯くのごときの心なし。佛性ともせよ、本覺ともせよ、無用の妖物といふべし、しかるに倭唐土ともに、はや千年に餘りて尊きも卑きもこれに傾かぬはなし。あるひは君臣をすて父子を背きて、出家遁世する人も世にたえせず。それを見きく人、おしなべて眞の道に入りぬよとてうらやみぬ。いかなる心にやとあやしきまでにおもひ侍る。昔の賈誼にはあらねども、長太息しつべし」とて、翁しばらく默然たり。

○鈴木某が歌

さていひけるは、「むかし鈴木のなにがしといふ人なんありけるが、父は一向に釋教に歸依せしに、其子は儒を學びて、道の大意をも知りたる人と聞えし。其人のよめる歌に、

夢の世とたがいひそめし夢ならぬ其ことわりを身にしらばや

それを同志の人に見せけるに、「其理をしれどもかくよみけるにや、但知らでかく詠みけるにや」と問ひければ、「知ればとて遽に知りたるとはいひがたし。よりて疑うてしらばやとは詠むなり」といひしと、ある人の語りしに、翁其時は未だいとけなかりしかば、さやうの事に深く心づきなく、かさねて問ひきく事もなかりき。今おもへば、此歌身にししるといふ所に深き意あるべし。さきに翁がいひける外に、夢ならぬ理とてはなけれども、そのことわりを身にしらねば、眞に知りたるとはいひ難し。もし人ありて、此道の天よりいでて我にある事を身にし知りなば、其親切なる事前に似たる事にも有るべからず。譬へば、今まで由緒あるともしらで其人といひかよひたるに、我とのがれぬ事を知りては、日ごろの親しさは物かはと思はまし。霍去病が父と名のりあひて、始てその遺體たる事をしりし後は、其したしさ其ゆかしさ、前に百倍すべし。其人はもとの人なれども、別人のやうにこそ覺ゆらめ。旨酒のうまさは、下戸もしれども、上戸のしるは別の事なり。蒸餠のうまさは上戸もしれども、下戸のしるは別の事なり。儒者も此道の眞にして實なる味を、劉伶が酒の美をしり、何曾が餠の美をしる如く、朝夕に身にしりなば、何とて外物に移され、實理にまよふ事あるべき。起くるも是、居るも是、動くも是、靜なるも是、行住坐臥皆是なり。夷にも是、險にも是、生ずるも是、死するも是吉凶禍福皆是なり。造次にもこゝにおいてし、顚沛にもこゝにおいてす。是を道を身に

霍去病―漢の平陽の人騎射をよくし、六度匈奴をうちて功あり、冠軍侯に封ぜらる

造次顛沛―

共にわづかのひまの意

彭殤を齊しうする—長壽と短命とを同視する

し知るとはいふなり。かくいへばとて、翁も未だこゝに至らねば、眞にしる人にあらず。鈴木某も、こゝに及ばぬ事を自らさとりて、希望の意にてこそ、身にしらばやとは詠みけるにぞ。

○朝がほの花一時

此時松永某とて、鈴木氏が道學の友ありけり。その人朝顔の歌とてかたりしが、自らよめる歌にや、又は鈴木氏がよめるにや、とかく兩人の内にてあるべし。

　あさがほの花一ときも千とせ經る松にかはらぬこゝろともがな

此歌も意味ふかきやうにおほえ侍る。昔よりあさがほをよめる歌おほけれども、大かた朝がほのあだなることをいひて、秋のあはれをそへ、世のはかなきをしらするを趣向とする外は見えず。白居易が、「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮」といふ詩を、公任の朗詠にも取りて風雅とすれども、是もしひて榮枯をひとつにし、彭殤を齊しうする意にて、俗耳には高きやうにきこゆれども、いと淺き事になむありける。是等は瞿曇が涎を引き、荘周が唾をなむるに過ぐべからず。今松永氏が松にかはらぬ心といへるは、それにてはなかるべし。各いかゞおもひ給へる。翁は、朝に道を聞いて夕に死するも可なりといへる意とこそ思ひ侍れ。朝に咲いて日かげを待ちてきゆるは、朝がほの天より受けたる性なり。世には千とせを經る松さへあるに、是程はかなき生を得て、いさゝか己を忘れ外を羨むの心なく、朝な朝ないと快く見事に咲きて、受得たる性分をつくして枯るゝこそ、花の見する誠なれ。いかであだには見るべき。それは松も同じ事なれど、あさがほのはかなきにて、一入そのことわり著く見え侍る。されば松の心に千とせなく、あさがほの心に一日なし。たゞ各己が性分を盡すばかりなり。然るを松の千とせをさかえと見るも、あさがほの一日をはかなしと見るも、たゞ見る人の欲目なり。松と朝がほの心になにかあらん。およそ無情の物はかくの如し。人は有情なる故に、萬物の靈とはいへど、反て私智に妨げられて、いまだ道をきかざる時は、こゝに至る事を得ず。されば人は道をきくべき事なり。しかれども、道をきくといふは、佛者の頓悟などのやうに、別段の事とは意得べからず。道はもとより事物當然の理なり。匹夫匹婦も共に知り共に行ふところなり。たゞ眞にしらねば、實に行はず。それ故に習ひて察せず、行うて著しからず。身を終るまでこれによれども、遂に悟入する事なし。今道をきくといふは、

瞿曇が涎を引き、荘周が唾をなむる—瞿曇は佛、荘周は荘子なり。

右にいふ如きは僅に此佛と荘子との餘説を傳ふるのみとの意

朝に道を聞いて云々—論語

頓悟—一旦にさとること

絲毫の遺念—いさゝかの心のこり
修短—長短
そこなはずむさぼらず—毛詩の詞

外の事にはあらず。たゞ此道理を眞にしり實に行うて、魚の水を安んじ、鳥の林を樂しむ如く、常に道理をいのちとして、しばらくも離るゝ事なく、いきてある限は道にしたがひ、死すれば身も道もこれまでにて、ながくやすかるべし。一日いきては、一日の道を盡して死し、一月いきては、一月の道をつくして死し、一年いきては、一年の道を盡して死す。かくてはたとひ朝に道を聞いて其夕に死しても、絲毫の遺念なし。こゝをもておもん見るに、あさがほも一日の壽といへど、己が受得しまゝに殘なく十分にさきて、さて日かげを待得てきゆれば、何の恨かありなん。松の千とせと修短は大きにかはれども、いづれも天命をつくして自らあきたる事は、同じかるべし。これを松にかはらぬ心とはいふなり。松永氏も此心にならまほしきまゝに、朝がほによそへてかくは詠みけるならし。翁も其歌にならひて、

天地にうけしまことをそのまゝに咲きてはしほむあさがほの花
あだなりと見てやはやまぬあさがほのさくもしほむも花の誠を
そこなはずむさぼらぬをぞあさがほの松にかはらぬ心とはしる

まことに、世話にいふ兎脣の嘯も心慰にて侍る。各さぞをかしくおほすらめ。たゞ

なり、次章を見よ
兎脣の嘯云々—此諺いぐち(缺脣)のうそ(嘯)も心慰みとして東海道名所記に見ゆ
毛詩—詩經の別名

詞をすてゝ意をとり給へかし」

○不レ忮不レ求

座中の人々、翁の歌めづらしとて、各たゝう紙に書きつけしに、中にひとりいふやう、「そこなはずむさぼらずといへるは、毛詩の詞にて侍る。いま朝がほにはちとあはぬ事のやうに覺え候はいかゞ」といへば、翁聞きて、「およそ人をそねむは、そこなふ心にあらずや。人をうらやむは、むさぼる心にあらずや。是は朝がほの己が天のまゝに、なに心もなくかつ咲きかつしほめるを、人の心に移して見れば、松の千とせをそねまず、又うらやまず、たゞ己が上をつくすと見ゆるを、かくいひけるなり。さらば此序に、詩のこゝろを語り侍るべし。此詩は婦人の作れる詩なり。其夫役に行きて、久しく歸らぬ事をかなしみて、前に先わが思ひの切なる事をいひて、

瞻二彼日月一　悠々我思　道之云遠　曷云能來

一度別れしより、いく度か日もいに月もきぬ。されば日月の往來を見ても、これとともに悠々とながき我思ひあり。はるぐ〜路遠き所なれば、我夫の歸らむ期もはかりがた

縕袍—どてら

狐貉—よきけごろも

し。いつかこゝに來て見もし見えもすべき、といひて、其跡に、

百爾君子不ㇾ知二德行一不ㇾ忮不ㇾ求何用不ㇾ臧

是は夫に告げやるやうにいふなり。早く歸り給へかし。相見まほしとおもふは、女のつたなき私の情なり。かねて、男子は德行こそ大切の事と承る。それに羈旅はよろづ艱難にて、おもひがけぬ事もあれば、日ごろの名節を損ぜられぬやうにとこそ思ひ侍れ。それは百の君子なべて御存知の事なれば、申すにおよばねども、女のおろかなる心におもふには、人はたゞ人をそねみにくまず、人に貪りもとめずして、手前をさへ正しく守らば、何所に在りても、何のよからざる事かあるべき、といふなり。かくいふ意をみるに、夫の德行に疵なく、身を全うして歸るを望むにぞありける。限なく殊勝の事なり。誠に情に發して禮義にとゞまるといふべし。其上、不ㇾ忮不ㇾ求といへるは、淺き事にはあらず。それをいかにといふに、人は人我あれば、必ず人を害ひ、利害あれば、必ず人にむさぼる。人我を忘れ、利害を離れずして、此味はしりがたし。されば、孔子も子路の敝れたる縕袍を衣て、狐貉を衣たるものと並び立ちて恥ぢざるを、此詩を引きてほめ給ひしぞかし。いかなればいにしへは、賤しき閭里の婦人にさへ、かやうの事をしりける

活計—處世の方針

和歌は人の心を種として云々—古今和歌集の序の詞

人あるにや。されど、是は先王の遺澤いまだ竭きざる時の事なり。もろこしも漢より以後は、此俗ある事をきかず。まいて我朝は、昔より釋敎のみ世に行はれて、聖賢の敎ある事をきかねば、婦人の事は申すにやおよぶ、士太夫たる人も、たゞ名利の境にのみ一生をくらして、かりにも誠の事をしらぬ程に、一旦空と說き夢ととくをきゝては、いと高き事におもひつゝ、是をもて世を觀念して、身の活計とするのみなり。もとより五倫五常をさへ空と見るなれば、いかで一草一木にふかき理ある事を知らむ。されば松永氏があさがほを詠ずるの主意は、道をきかざる人のしるべき事にあらず。今翁が不ㇾ忮不ㇾ求をもて松にかはらぬ心とするは、子路の狐貉をきたる人をそねまずうらやまずして、狐貉も縕袍もふたつながら忘れたる心と一つ事と見れば、かくよむなり。かやうの事を詩にいふさへ、明朝の人は、儒者の頭巾をぬがずとて笑ふ事になんありける。いはむや和歌によめるをや。京師和歌の名家など、翁が此歌をきゝては、さこそ笑ひ給ふらめ。されど、詩は人情に發すとあれば、なにのいはざる事かあるべき。三百篇を見てしるべし。和歌は人の心を種として、よろづの言の葉となれりとあれば、何のよまざる事かあるべき。萬葉集を見てしるべし。もとより歌の風體詞の用捨はあるべきなれど、

今日こずは—古今集「今日こずはあすは雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」
いひくたす—惡くいふ
義山が云々—唐の李義山が雜纂に「殺風景」の目ありて趣を害するものをあげたればいふ
山有木—左傳に見えたる諺
大津の宮—天智天皇
大織冠—藤原鎌足
清豫—俗事に遠ざかりて心靜に暮すこと
韶—舜の樂
武—周武王の樂

それは翁がしる事にあらねば、今更沙汰に及ばず」

○春秋のあらそひ

ころは彌生の半にもありけむ、庭の櫻もやう〳〵さかりなるに、鶯さへ友をもとむる聲に打啼きて渡るめれば、今日こずはあすは雪とぞとひとりごちて、人待がほなる折しも、跫然たる音して、五六輩打ちつれて問來りぬ、主もともに花のもとに團居してなん、數獻におよびて、かたりくらしつる中に、ひとりの客人、「春の花ばかりめでたき物はあらじ。花紅葉といへど、紅葉は花なき時に見ればこそあれ、花にはおよびがたし」といへば、又ひとり、「紅葉もさのみいひくたすべからず。秋ぎりの晴間に、千林萬壑さながら錦をさらすごとくなるは、春の山も忘れつべし。今花にむかひてかくいふは、義山が殺風景の譏もあるべけれど、我は紅葉に心をよする」といふに、又ひとり、「山有レ木工則度レ之、賓有レ禮主則擇レ之」とあれば、所詮主の心にまかすべし」といふ。其時翁いざり出でて、「此あらそひは大津の宮の御宇に、大織冠に詔して其沙汰ありしとかや。それより秋に心よするは多し。大伴の黑主も、「錦をはれる秋はまされり」とかよみし。されど其後代々の歌人、春に心よする人もあまた出來て、「淺綠花もひとつにかすむ」など詠み、「秋は夕とたれかいひけん」などともあれば、吉野の雪、龍田の錦は、伯仲の間にあるべし。さはいへど、艷陽桃李の節に先だつべき時しなければ、紅葉はつひに花におとるべし。但此事は清豫閒暇のはかなき戲事に似たれば、いづれ優劣ありてもさてやみぬべし。今是をもて古の韶と武との樂を論ずるに、善喩と覺え侍る。美は聲容の見事なるをいふ。善は美の實なりとあれば、美の出る所なり。たとへば韶は春の花なり、武は秋の紅葉なり。花紅葉ともにその見事さは更に優劣なきが如く、韶武ともにその聲容の盛なるにかはる事はなけれども、花は春の陽和より咲出づれば、其見事さの中におのづからのどかなる氣を含めり。紅葉は秋の風霜より染めなせば、其見事さの内におのづからすさまじき氣をふくめり。韶の樂は揖讓より出づる故に、其美の實優々として泰かなる方に勝れたり。いはゞ春の花の陽和の氣あるがごとし。武の樂は征伐より出る故に、其美の實慄々として嚴なるかたに勝れたり。いはゞ秋の紅葉の風霜の氣あるがごとし。いづれも聖作といひながら、韶はあくまで手厚く、武も薄きにはあらねども、韶に比すればす

こし薄きかたともいはん。それ故に韶は善つくし、武はいまだ善つくさぬなるべし。さればとて春も秋も天なり、天の徳に同異ありとはいふべからず。舜も武王も聖人なり、聖人の徳に同異ありとはいふべからず。唯其時の同じからぬ故としるべし。韶は花の陽和の時にあへるがごとし、聖人の幸なり。武は紅葉の風霜の時にあへるが如し、聖人の不幸なり。さればこそ程子も是を論じて、「所ㇾ遇之時然爾」といへるにあらずや。此たとへほど始終よくかなひたる事は侍らず。各はいかゞ思ひ給へるや」といへば、座中の人人もろともに感じて、「日ごろ、韶の善つくし武のいまだ善つくさずといふ事、くはしく自得しがたかりつるに、けふ戯れに花もみぢの事をあらそひて、はからざるに久しき惑を解侍る。あり難くこそ侍れ」とて、各額をつきて謝し侍りぬ。

揖讓—舜の天子となれるは堯の讓を受けたる也

征伐—武王は殷を伐ちて天下を取れる也

○祕事は睫

さて諸客いひけるは、「われ等書を讀みて憖に性命道徳の説のみ沙汰し、其道理を世話に移して察し候はぬ故に、世話は別段なる事のやうにいと輕く意得候ひつるが、此程世の諺に申し傳へしはかなき事につきて御物がたりを承りて、いづれもふかき意味ある事を覺え侍る。誠に祕事は睫にて、あまりちかきは反て見えぬものにて候故、我等どもの意得ぬにて侍るべし」翁、「その事にて候、孔子も舜の邇言を察し給ふにて、大知と稱し給へり。されば、芻蕘の言も聖人擇焉とも申すにて候。むかし孺子ありて、

　滄浪之水淸兮可ㇾ以濯ㇾ我纓、滄浪之水濁兮可ㇾ以濯ㇾ我足

と歌ひける。此歌の本意は定めて、聖人は不ㇾ凝ㇾ滯於物、世と推遷るの意にて、かく歌ふにてもあらんかし。それを孔子きゝ給ひて、水すむ故に人纓を濯ひ、水濁る故に人足をあらふ。是纓をあらはるゝも足をあらはるゝも、水の自ら取る事なり。小子よくきけと宣へり。されば榮辱禍福みな藻にすむ虫の我から招くといふこと、此歌にて著く侍る。たゞ人をとがめずして、手前をつゝしむにしくはなかるべし。かり初の歌とて、あだにきくべき事に侍らず。翁わかゝりし時、京師にひとりの老儒ありしが、ふるき事をおぼえて語りしは、東照宮御在世の時、御近習の若き者に、「汝等身をたもつに簡要の語あり。五字にていふもあり、七字にていふもあり。いづれを聞きたきぞ」と仰せられしに、「いづれをも承りたし」と申せば、「五字にていはゞ、うへを見な。七字にていはゞ、身のほどをしれ。汝等是を常に忘るべからず」と上意ありしとなり。當世の人、大方は上に目

邇言—淺近の言

芻蕘の言—草苅人の如き賤しき人の言

滄浪之水云々—離騷の句

藻にすむ虫の—「蜑のかる藻に住む虫の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ」(古今集)

> 珊瑚珠―原本珊瑚樹とあり

をつけ身の程をしらず。それ故におのづから驕りたかぶりて、物ごとに華麗を事とする程に、家をもち崩し、不義のことも出來て、禍辱にも及ぶぞかし。むかし或諸侯の家老何某といひしもの、萬石以上の身にてありしが其國にて登城の時、あかねの木綿羽織を著けるが、路次にて雨にあうてぬれける程に、玄關の扉にかけてほしけるを、其主君折しも鷹野がへりにこれを見て、「あかねは日にほせば色かはる物ぞ。取り入れさせよ」といはれけるとぞ。又同じころ、親藩の家にて物頭たりし者、黄金十兩にて著がへの鎧を威せしが、「今當家中にこれ程の金出して鎧威す人はあり難かるべし。武具は格別の物なればかくは結構にしつるなり。子孫わが此意をよく知りて忘るべからず」と一筆書いて、その鎧に添へて家にのこしけるとぞ。又同じ比、諸侯の中に、世に賢君と稱するありしに、其家老の子弟年わかなるが、蒔繪の印籠に大きなる珊瑚珠を緒締にして腰にさげたるを、其主君見とがめられ、他日に其人を前へよびて、「汝は印籠を好むと見えたり。此印籠は藥をよくもつなり。是をさげよ」とて、黑塗の印籠に木欒子を緒じめにして賜りけり。それより國の貴族皆恐れて、華麗を禁ぜしとなり。是等は皆六七十年以前の事ぞかし。いつの程に風俗かく驕奢にはなりぬるや。馬具武具は軍裝にかゝる物なればい

> 奉―衣食住の取まかなひ

かゞはせん。それも華麗を事にし、もの數奇を事とするは、何の用をなす事にやあらん、ほめられぬ事なり。古き人のかたりしは、大阪夏の御陣に將軍家惣陣を御巡見の時、本多佐渡守は澁帷子を著して冑ばかりにて御供せられしとなり。又加賀の家臣に、山崎長門守といひし名高き武功の者あり。後は祝髮して閑齋とぞいひし。翁其子孫なにがしとしば〳〵參會せしが、閑齋大阪在陣の時著せし物とて、紙子羽織に銃丸のあたりたるあとあるを、其家に藏めけり。是等にて其比軍裝の輕き事をしるべし。況や平日の衣服飮食家作等に華美をつくし、無用の事に金銀を費すこそ、なげかしき事なれ。古より太平の弊かくあるとはいひながら、これを改めずしては、風俗日に敗れ、國事も日に非なるべし。但其本源をいへば、私欲にひかれて、上に目をつけ、身の程を忘るゝより起る事なり。東照宮そこをかねて思しめして、斯くは仰ありけるならし。但この驕といふ病は、上下ともある事にて、わが一身の奉に限らず。古より戰國の時主將たる人、自ら驕りて力を恃み敵を慢るは、必ず國を失ひ身を滅す。その例和漢ともにあげて數ふべからず。永祿、天正のころにていはゞ、今川氏眞、武田勝頼にてしるべし。いづれも上にばかり目をつけて身の程にくらく、たゞ一旦の強きにほこる故に、まのあたり滅亡しける

を、かの高き御目にて御覽ありて、御料簡の上にて宣ひし事にもあらんかし。されば三河より起らせ給ひ、御威光日に盛なりしかども、いさゝか驕らせたまふ御心なく、常に御身の程を御考へ御働ありしかば、寸を得れば王の寸、尺を得れば王の尺にて、終に天下をしろしめしけり。されば右の五字七字の訣、なにはにつけて深き御心も有りなんと覺え侍る。たゞ假初の事とは思ふべからず」

○佛になるやう

座中ひとり、是を聞きて、「上を見ずして身の程をしるは、わがともがら道藝を學び候にも要訣たるべく候。身の程をしらず思ひあがりて高慢なる人の、成就したる事は承らず候。たゞ引きさげて身の程をかんがへて進修するにてあるべく候」といへば、翁は「よくも心づき給へり。なる程さにて侍る。其につきて物語こそ候へ。ある大藩の主に刃物の目利に長じたるありしが、或時無銘のふるき刀を見て、是は相州の正宗なりとて、本阿彌にみせられけるに、本阿彌うけがはず、「是は志津と見えて候。中々正宗にてはなく候」といへば、「いやとよ、正宗なるぞ、汝に預けおくなり。より〳〵研ぎて見よ。いつにても正宗になりたる時に返し候へ」とありし程に、意得がたき事に覺えけれど、取りて家に歸りてしば〳〵研ぎてみるに、志津に似たる鍔は見ゆれども、正宗とは見えず。かくて年ふる程に、右の主君もうせられしが、二代になりて、本阿彌右の刀を持參して、「御預けの刀、はたして正宗になりて候へ。今更先君御目利のつよきにいづれも驚きて候」といへば、家老ども其子細を問ひけるに。本阿彌「これは不思議にさる男の後生ばなしにて正宗になりて候。日ごろ某が家に心易く出入いたし候老人あり、常に念誦打して後生をねがひ候ひしが、ある時に來て、「我等此程は後生のねがひやうをかへ侍る。只今までの願ひやうこそ惡しく覺え候へ。このあら凡夫の身として、俄に佛にならんとねがへばとて、佛になられ候べきか。佛にならんとならば、先よき人にならむと願ふべし。よき人になりて後佛をねがはゞ、佛になるにたよりあるべし」と語りしを承りて、是は尤なる事にこそ。彼刀もすぐに正宗の鍔にせんと硎ぐ程に、反て正宗にならざるにてあらん。それより近き志津にして見ばやと存じ候て、志津の鍔をこゝろざして研ぎ候へば、やがて正宗に似より候程に、さてこそと存じ、いよ〳〵心にいれてとぎあげ候へば、今はたしかに正宗になりて候」といひしとなり。正宗の鍔には目をつけずして、其刀の

身に應じたる志津を心ざして硎ぎし程に、終に正宗にはなりたり。翁此物がたりを聞きて、おもしろき事に思ひしが、其後さる酒もりの座にて、二人盃の先後をたがひに辭退しけるに、ひとりのわかき士、「御年にあやかり候やうに御盃を賜り候へ」といふに、其相手の人「われらが年もそことあまりちがひ候まじ、御あやかりありたき程の年にてもなく候」といふに、其時わかき士、「其事にて候。大きにちがひ候ては急にあやかり申すべき思ひよりもなく候。先少しの御年だかにあやかりまゐらせて、それより齢をかさねばやとこそねがひ候へ」といふにぞ、相手道理にまけて、盃をさしけり。彼老人の佛のねがひやうと、此わか士の年のねがひやうと同じ事なり。いづれも高遠に目をかけず、身の程をしりて、卑近なる所より漸々に至る意得なるべし。いへば當座のはかなき物がたりのやうなれども、よくおもへばまことに祕事は睫にてこそ侍れ。もとより學は聖人を目あてにする事にては侍れども、たゞ目ばかりたかあがりして身の程を省ずしては、道といよ〳〵遠くなりつゝ、一生自得する事なくしてやみなん。右の老人、わか士の覺悟には大きにおとりたるといふべし。古今高明の人の行過ぐるは、大かたこゝにあやまらるゝにて候。されど、それは虚見にてこそあれ、道に少し見付けたる所ありての事也。

鉅儒—大儒

今の世に鉅儒と稱する人は、それにもあらず、道においてなにの見付けたる事もなく、自から高ぶる心より、むなしく大言を吐いて、たゞ人の上にたゝんとのみする程に、後は世にもてはやされて、自身にも聖賢のやうに思ひなすこそ、身の程をしらざるの甚しきなれ。たゞし是等の人は、論ずるにも足らざるべし」

○仁は心のいのち

ある時、例の人々とぶらひ來て講習しけるが、仁義の說に及べり。中にひとりいひけるは、「人は天地の心を得て心とす。天地は萬物を生ずるをもて心とする故に、それを得て心とすれば、人は人を愛するをもて心の德とすること勿論なり。よりて仁は心之德愛之理といへり。心の德とあれば、仁義禮智諸ともに、仁にもるゝ事なき程に、仁は四者を包みて、義も禮智も仁によりて立つなり。是は翁の講說にて、かねて承りし事にて侍る。但仁は人を愛する心にあらずや。それを衆善の長とする事、誰も知りたるやうに候へども、大かたは、人はたゞ慈悲を第一とするをもて、仁を衆善の長とするとばかり意得侍る。それは慈悲の重き事をいはゞ、しかいうてもやみなまし。今仁を心の德とするは、

齒德—年高く德ある人

さやうの一通りの淺き事にてはあるまじく候。いかなれば慈悲の心一つが心の德となりて、義も禮も智も、仁なければうせほろぶるにやあらんと、工夫すべき事にて侍る。此ところを今少し承りたくこそ候へ」翁聞きて、「只今申さるゝ所すこしもちがひなく聞え侍る。されば日ごろ申したる外に、改めて申すべき事もなく候へども、猶更くはしく申し候はゞ、心の仁あるは、人の元氣あるが如し。人の元氣は脈にあらはれ、心の元氣は愛にあらはる。脈のかよひ絕ゆれば人死するごとく、愛の理ほろぶれば心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。夫心は活物なるにより、人に情あり、物の哀をしりて常にいきたる物ぞかし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長をみては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒德を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずる事をしり、不義を聞いては必ず恥づる事をしる。もし情なく哀をしらずば、其心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さもしらずなりなん。何をもて自愛し、なにをもて恭敬せん。義を聞いて感ずる事なく、不義を聞いても恥づる事なかるべし。是をもていふに仁義禮智いづれも心の德にして、各その理わかるれども、其本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も禮も智も、其さまあり其用ありとい

天德寺—佐野了伯

へど、所詮內より生ぜねば眞の德にあらず、公の理にあらず。このゆゑに仁に心の德というて外に德をいはず、仁に愛の理というて外に理をいはず。そのいはざる所にふかき意ありとしるべし。其につきてひとつの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天德寺、豪健の勇將なりしが、ある時、琵琶法師を招きて、平家を語らせて聞きけるに、いまだ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、「某はたゞあはれなる事をきゝたくこそあれ。其意得して語り候へ」といへば、法師、「心得候」とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天德寺あはれがりて、雨雫と泣きける。さて「今一曲前の如くあはれなる事をきゝたし」といへば、那須與市宗高が扇の的を語りけるに、平家半より、天德寺また落淚數行に及べり。後日に家臣の輩に、「過し日の平家はいかゞきゝつる」といふに、家臣ども、「尤おもしろき事にて候。但我等どもひとつ意得ぬ事こそ候へ。前後二曲ともに、勇烈なる事にて、あはれなるかたはすこしも候はぬに、君には御感淚に咽ばれて候。是はいかゞの事にて候にや。今に不審なる事にいづれも申あひ候」といへば、天德寺おどろきて、「只今迄は各を賴もしく思ひ候ひしが、今の一言にてさて〱力をおとして候。先佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。賴朝、舍弟の蒲冠者にも賜らず、寵臣の

名なり—名なれ

惻隱の心—他の不幸等に對して氣

梶原にもたまはらぬ生唼を、高綱に賜るにあらずや。されば、其甲斐もなく、此馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死して再び歸るまじきと、賴朝に暇乞して出でける、其志を察して見られよ。あはれならぬ事かは」とて、しば〳〵涙を拭ひつゝ、しばしありていひけるは、「又那須與市も、大勢の中より選ばれて、只一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘入れて的にむかふに至る迄、源平兩家鳴をしづめて是を見物するに、もし射損じなば、みかたの名をりたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らむと覺悟したる心を、察してみられ候へ。武士の道程あはれなる物は候はず。某は每に戰場に臨みては、高綱宗高が心にて鎗を取り候故、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙にたへざりし。しかるに、各にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は、たゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにては賴もしからずこそ候へ」と、云ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。是天德寺が武邊は、涙より出づれば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて、手あらき道なれば、いはゞ仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは、眞

の毒に思ふ心

乾元—坤元に對す、天

の武にあらず。況や其餘の事は、なほもて知るべし。されば、忠孝も禮義も、文道も武道も、內より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば、眞のものにあらず。是則、前にいひし人に情あり、物の哀をしるの心なり。すべてもろ〳〵の言行ともに、義理に當りてはこと〴〵く忍びざるの心より出でて、天德寺が涙をこぼすやうにだにあらば、是心德の全きなり。仁者といはんになにの疑かあるべき」

○義は心のきれ

座中ひとり、「仁は心の德にして、愛の理たる事は、くはしく命をきゝ訖りぬ。今承るごときは、仁は心の全德にて、四性を包ね侍るに、四性の中にひとり義ばかりを掲出して、仁に對して仁義と申し候は、義も仁にさし次ぎて大切なるものとみえて候。此序に、義字の意をも承りたくこそ候へ」といへば、翁、「人に仁義あるは、天に陰陽あるがごとし。この故に、易にも、『立天之道曰陰與陽、立人之道曰仁與義』といへり。されば、乾元は春に居て四時を統べずといふ事なけれども、秋の肅殺するにて、發生の功をなすにあらずや。人道もまたしかなり。仁の四者を包ぬるといふは、一向に自愛すると

肅殺—前に註せり

含糊不斷—はき〳〵とせず決斷のにぶきこと

苟且因循—かりそめに事を處してぐづ〳〵すること

いふにはあらず。もし義の裁制なくば、心の生道を損じて、仁も亡びぬべし。翁かねて初學の人に申侍るは、義は心のきれなり。朱子も心之制事之宜と註し給へり。心の制は、心のきれなり。事之宜は事のきれめなり。事によき程にきれめあるは、すぐに心のきれになる物にて候。仁に心之德、愛之理とあるも、愛の理すぐに心の德にして、二つにあらず。それと同じ例なるべし。されば、日用行事のうへより、取與去就の間に至る迄、含糊不斷の心を持しては、いかでか道理に當るべき。此心にては、たとひ學問しても、苟且因循して、行に敏きことあたはねば、過を改むるに吝にして、善に遷る事速ならず。又なにをもて德にすゝむべきや。よりて、百行すべて心のきれあるを下地とするにあり。孔子も君子の行を論じ給ひて、「義以爲質」とはのたまはずや。又坤の六二を論じ給ひて、「敬以直内義以方外」と宣ひ、又聞達を論じ給ひて、質直にして好義とものたまへり。是をもて、義の簡要なる事をしるべし。たゞ人心の害をなし、仁義の仇となる物は、私欲にて侍る。私欲あるが故に、邪智に誘かれ、外物に引かれて、かの仁の情あり哀をしりてすなほなるものも、忽にひすかしくこは〴〵しくなりぬれば、天理のかよひたえ〴〵しく、人欲日に熾なるぞかし。たとへば、木を蟲の蠹めるがご

頑鐵—鍛冶せぬあらき鐵

防閑—ふせぐもの

機括—ため直す具

とく、其生氣絶えぬれば、喬木も枯槁に同じ。それよりして心のきれも鈍くなりゆく程に、義もつひに失せはてぬるぞ悲しき。たとへば、刀にさびの生ずるがごとし。其はがね腐りぬれば、利刀も頑鐵に同じ。是仁亡ぶれば、義も一時にほろびて、我心あらぬ物になるぞかし。この故に、孔門の學、仁をもとむるを要として、仁をもとむるには私に勝つを本とす、されば顏子仁を問へるに、孔子、克己復禮をもて告給へり。禮は天理の節文人事の儀則とあれば、身を撿するの防閑にして、私に勝つの機括なり。一日私に勝ちて禮に復しなば、枯れたる木のふたゝび榮に向ふがごとく、さびにし刀の新に硎を出づるがごとく、天理流行して、本心の德全かるべし。但顏子は、素より天理人欲の分において、判然として疑なきが故に、すぐに進修の目を問ひ給へり。其餘の學者は、念慮行事の上において、天理人欲の分を眞に不知しては、しひて私に勝たむとすとも、いと難かるべし。さる故に、孔門の教は、博文を約禮に先んじ、大學の法は、致知を誠意正心に先んず。是にて知りぬ、道は仁義にすぎずといへども、禮智をすてゝ仁義に至るの理なし。易にも、聖人の德を論じて、「知崇禮卑」といへり。知崇は天なり。禮卑は地なり。いよ〳〵崇ければいよ〳〵卑し。これ成始成終の道なり。この故に横渠の

濂洛關閩の學—周茂叔及び二程子張横渠朱晦庵の學、皆其の生地の名よりいふ

今川のふみ—所謂今川狀といふもの、今川了俊の家訓の壁書なりといふ

了俊—今川貞世、薙髪して了俊といふ文武の達人足利義詮義滿に仕ふ

一劍兩斷—「一刀兩段」に同じ、斷乎として事を處置し去ること

體認—のみこみ守ること

稟賦—うまれつき

左驗—證據

張夫子、知禮をもて教をたてゝ、知禮成性の説あり。されど、それは横渠に限らざるべし。濂洛關閩の學は、すべて格物に本づきて知を致し、持敬によりて禮をはなれず。誠に孔門以來學者不易の法とすべし。

○浩然の氣

翁幼少にして手習せし時、世にもてはやす今川のふみをよみ習ひて、仁義禮智ひとつも闕けては、諸道成就しがたしといへるを、今におぼえ侍る。了俊さしたる學者とも聞えねども、此一言は、不思議にいひあてられし名言ともいふべし。さて、仁義禮智いづれも大切なる中に、仁に次ぎて義の大切なる事は、孟子浩然の氣にていよ〳〵著く侍る。浩然の氣は、至大至剛、天地の間に塞るといふにはあらずや。各考へて見給へ。斯くばかり盛大なる物が、いかなれば義より生ずるといふにやあらん。人は天地の正氣を得て、もと浩然たる物にて候へども、私欲ありて、心のきれをなづまする程に、其氣いつとなくちゞけて小さくなる事にて候。されば、浩然の氣は、心のきれより生ずる物と知るべし。しかるに、心にきれなき人のくせとして、世話に牛の一さんといふやうにやゝもすれば機嫌にまかせ、調子に乗じなどして、一槩に物を決行して快しとす。是は眞のきれにあらず。反つて大に氣をそこなひ、心の刃もこぼれつべし、いよ〳〵きれぬ物になりなんこそうたてけれ。孟子に、「義を集めて生ず」とあれば、一時一事のきれにてきほひを取りて、浩然の氣を生ずべきとにはあらず。其工夫日用の間、事の大小輕重によらず、道理に當りてはいさゝか狐疑せず、たゞ平等に心のきれを用ひて、一劍兩斷して宜きに合ふにあり。これかれたび〳〵かくのごとくにしてやまねば、此氣常にたるまずして、丈夫になる程に、後には氣より心のきれを助けつゝ、義と合體して、おのづから浩然たるにも至るべし。但氣にて心のきれを助くるといふ事、よく體認してしるべき事にや。たとへばこゝに二人あり、極寒の時に當りて拂曉にふたりながらいひあはせつゝ、同じく起き出るに、ひとりは寒さを痛んで起くるにものうく、ひとりはさむさを事ともせず速に起く。其故をいかにと問ふに、稟賦の强弱によるにもあらず、そのすみやかに起る者は、上戸にて酒氣あればなり。是氣にて心のきれを助くるの左驗とすべし。しかるに、浩然の氣は義より生じて、其生じたる氣が又義を助くるこそ、いと奇妙に覺え侍る。前年韓文をよみて、其雜説の中に、神龍の事をいふにてしりぬ。龍は誠

に靈異なる物かな。氣を噓いて雲を生じ、又わが生じたる雲に乘りて日月に薄り、陵谷を汨ぐ。是雲は龍より生じて、また龍の變化をたすくるにあらずや。今浩然の氣は、心のきれより生じて、又心のきれを助くるにたとふるに、一理なるべし。しかいへばとて、しひて氣力をもちひて、よわきを强しとし、むなしきを盈てりとするは、いはゆる助長するにて、かの宋人の、苗を抽きて長ずるの類なり。此氣自然の生路を妨げて、大きに集義の害を貽すべし。たゞなにの作爲もなく、集義を事とするにあり。孟子に「必有事焉」といふは、たとへば、人なにぞさし當りて緊要の事あれば、朝夕そこに心をとゞめて、すておかぬ物なり。そのごとく、集義するは必定一事あるなり。必の字最力あり心の一定する所なり。しかるに、およそ世間の人、忘れねば助長す。助長せねば忘る勿忘勿助長というて、ふたつの間をしらするなり。忘れもせず助長しもせずして、心のきれを用ふれば、おのづからにぶらず、又はそこねずして、浩然の氣もこれより生ずべし。先儒をもて持敬の法を論ずれば、持敬もまたこゝに同じかるべし。いかにとなれば、敬はたゞ儼然として、なにぞ事あるがごとしとしかいふべし。さればとて、敬に執泥して、此心をしひて拘定すれば他病を生じて その害忘るゝよりも甚し。朝

持敬—常に心をひきしめて道德に離れしめぬこと
執泥—拘泥

鮮の李晦齋がいひしやうに、たとへば鷄卵の手にあるがごとし。勿忘は手にとる事を忘れぬなり。忘るれば取りおとすべし。勿助長は力をいれて握りかためぬなり。握りかたむれば、握り潰すべし。ふたつの間を體認して、持敬の法を知るべし。もとより存心集義二致なければ、持敬養氣二法あるべからず。是等は簡要深切の事なり。たゞ一場の說話ときゝ給ふべからず」

○敬の工夫

座中ひとり、「敬の字の義は、程朱の說最詳明親切にして、なにの疑もなきやうには候へども、敬の工夫は、學者第一の事にて候へば、もし翁の思ひよられたる事も候はゞ、承りたくこそ候へ」といへば、翁、「いやとよ、程朱のとき給へる外に、翁が今更申すべき事は侍らず。但程朱の說あまり反復切要なる故に 吾黨の學者ふかく取り過ぎて、いとむづかしくなりぬるこそ、反つて程朱の心にもかなふまじく覺え侍れ。翁はたゞ常人の心にあてゝ、俗語に引きさげて申したく候。「敬は心のむきを眞直にして、わきへゆかぬやうに、心のもとをたばねて、末のちらぬやうに、身の番人となるやうに、事の目付

盤水—盥などに入れた水

となるやうに」是にて敬はのこりなくこそ候へ。此翁が語、至つて淺きやうに候へども、淺うして反つて深く、至つてやすきやうに候へども、易くして反つて難し。各是を身に驗みて見給はゞ、主一無適も、常惺之法も、この外になき事としり給ふべし。事新しき申樣に候へども、天下に至極大切にて又至極たもち難きものは、此心にて候。孔子も、「出入無時、莫知其鄕」と宣へり。然るに、其至極大切なる物を粗略にいたし、難持ものを心安く存知候程に、此心放逸するよりして、諸惡も起り、萬事もやぶるゝぞかし。しかれば、敬はその大切にしてあぶなき物をたもつ時の心にて候、古人の執玉捧盈にたとへしも、げにさる事ぞかし。今もし寶玉をとり、盤水の盈てるを捧げば、少しも手をゆるさず、氣をゆるめざるにてあらん。其心にて心をたもつを持敬といふなり。されど、玉もとらばとらなん、盈てるも捧げばさゝげなん。此心の執がたく捧げがたきは、中々それに譬へてやむべきにもあらず。いつも申す如く、心は神妙靈活なる物にて候故、たゞむなしく無爲にしてはをらぬものにて候。あるは人に接り、あるは事にしたがひ、さなくして隙にものする時は、不用の事を引出して、彼へ移りこれへ移り、水のつとふがごとし。無根の根をきざして、とさまにおもひ、かうさまにおもひ、麻の

黃勉翁—黃幹、朱晦菴の聟

みだるゝがごとし。荀子は是を偸心といひ、釋氏はこれを流注想と名づく。是我人ある心の持病なり。今翁が、心のむきを眞直にして、わきへゆかぬやうにといふは、是を療ずる主方とすべし。さて心火とて、心は火に屬する物なり。心のむき正しからざる時は、心のほさき亂れて、用ふるにたへず。黃勉齋のいはれしやうに、心は一炬の火にたとふ。其本を堅く引束ねて、火をともすときは、光つよくして、風にもたへず雨にもきえず。もし本のつかねほどけてゆるまらんには、たとひ火をともすとも、光よわく打ちりて、滅えぬべし。翁が本を束ねて末の散らぬやうにとは、こゝをいふなり。ひとりある時は身のある所に心ありて、常に身をまもるを敬とす。是身の番人なり。事にむかふ時は、事のある所に心ありて、常に事を察するを敬とす。是事の目付なり。今敬の事を翁に申せとならば、大かた是にたがひたる事はあるまじく覺え侍る。然るに是等の工夫は、いはゞ病氣に的中したる良藥なり。この上にいふべきならば、藥の用ひやうひとつにて候。其用ひやうは、前に申すごとく、孟子養氣の法に外ならず。翁かねて孟子を讀みておもへらく、「養氣、持敬ともに必有事焉」といふ一言にて、もはやその理盡きたる事なり。いかにとなれば、養氣持敬何の替りたる事かあらん。いづれも本來の面目なれば、鳶の

悍馬—あらき馬

のりずまひ—馬が急に狂出して、人をのせじとすること

とび魚のをどるとおなじく、現在わが當然の事ありとして、常にそこを離れずして居るまでの事にて候。此外毫髮も加ふる事はなかるべし。しかるに、忘るれば、その有事所をうち忘る。助長すれば氣力を用ひてしひて作爲す。忘れもせず、强ひて作爲もせず、其間にて自然の天機を自得して、持敬の法とすべし。昔加賀にありし時、ある士人、持敬の法を問ひしに、翁、持敬の說をあらはして是にあたへき。其大略おもへらく、たとへば、心は悍馬のごとし。持敬は悍馬を御するがごとし。我氣たるみて、鞍弱く轡ゆるめば、馬馳出して、泛駕の患あり。是忘るゝなり。さればとて、力をもて馬を制しつゝ、轡をつよく引きはりて、馬の口を痛むれば、馬なづみ苦みて、こゝろよくゆかずなりぬ。是助長するといふべし。たゞ行かざるのみにあらず、反つて馬の邪氣をさそひて、後にはのりずまひなどして、いろ〱くせつくものぞかし。いはゆる「非徒無益而又害之」にあらずや。されば、磐控中を得、緩急程にかなへば、おのづから進退疾徐たゞ我心にしたがひて、自由ならずといふ事なし。是をもて持敬の法をしるべしといひしが、はや四十年にちかき事なり。其問ひし人も、今は昔語りになりたり」とて、翁感愴いとふかく見えし。

磐控—馬を走らせ又とどむること

式す—頭をさげて拜す

○民は王者の天

ある時、論語鄕黨篇の講訖りて、その「式負版者」とあるにつけて、翁諸客に對して、「王者以民爲天。民以食爲天」この意いかん。各いうて見給へ」といへば、坐中ひとり、「民はこれ邦の本なり。民歸すれば邦存し、民叛けば邦亡ぶ。邦の存亡は民にあり。故に王者は常に民を尊びて天とす。食は民の命なり。食を得れば民いき、食を失へば民死す。民の死生は食にあり。故に民は食を尊びて天とすといふ意にてあるべく候」翁、「さやうにとき候ては、上下兩意に聞え侍る。是は二句ともに、所詮農を重んずるを主意にしていへる事にて候。天より人を生ずれば、又五穀を生じて人の食とす。人あれば食あり、食なければ人なし。天下豈食より重き物あらんや。民は天下の爲に食を生ずるもの也。それを天より王者にあづけ給へば、王者は民を仰尊びて天とすべし。一夫をも輕慢るべからず。されば、昔は諸國の民數をしるす籍を王に獻ずれば、王も拜して受給ひ、孔子も、民數の籍を負ひたるものには、式し給ひしとなり。又民としては思ふべし。天より我人命を續くなる天下の大切なる物を、我等にわたして作らしめ給へば、民

大抵—原本「大根」とあり。意通じ難きを以て假に改む
頭會箕斂—人口を精査して重税を課すること
封侯—大名
賈誼—漢の人、博覽強記、詩文に巧なり、梁の懷王の大傅となる文帝の十二年卒
文景—文帝景帝
ひとりの齊語云々—多勢に無勢の意

は食を仰戴きて天とすべしと。かりにも耕作を粗略にすべからず。是風俗の本、治亂の係る所にて候。今其あらましを申侍るべし。むかし三代の時は、上に民をもて天とするの心ある故に、租税を薄うし、凶歉を拯ひ、困厄流離する事なからしむ。よりて郡縣の民土著に安んじ、農業をつとめ、米穀を出して君上に奉じ、食をもて天とせざるはなかりし。其風おのづから市朝にも移りしかば、士太夫をはじめ、商賈等に至る迄、大抵勤儉にして華奢をいましめ、遊惰の俗ある事をきかず。暴秦に至りて、民を天とするの心なかりし程に、頭會箕斂民に虐取してやまざりしかば、はては郡國離叛き、四方土のごとく崩れて、天下の亂民間より起りしぞかし。炎漢起りて、天下泰平無事になりしかども、逐末射利の徒日に出來て、富商大賈封侯にひとしく、食貨の權を恣にせしかば、村閭の民もそれに化して、豪奢にながれ、游俠を事とす。賈誼が治安の疏を見て知るべし。然れども、上に民を天とするの心なほ殘りて、しば〳〵詔を下しつゝ、農は天下の本といふ事を郡國に告諭し、租を免し復を賜ひ、郡吏の貪欲をいましめ、其上孝弟力田をもて下を率ゐ、たゞ務めて本を崇び、末を抑へし事くはしく、漢史に見え侍る。さればこそ、かの文景の時、君臣恭儉にして、阜厚を致せし事は、三代以後の治世とも申すべし、是によりてつら〳〵古今を考ふるに、上代は格別にて候。後世に至りては、郡縣の風市朝に移るはよく、市朝の風郡縣に移るはあしゝ。其故は、市朝の風は奢侈を貴び、郡縣の風は樸素を失はず。しかるに近來市朝の事を承るに、國に貪墨の吏あり、鄕に貨殖の家あり。いづれも公には法禁を守り、貨賂を遠ざくとみゆれども、私には利欲をつとめ、宴樂を好まざるはなし。しかも私智を逞うして、己が惡を隱し、上を欺き人を誣ふるをかしこき謀とす。その會をきくに、食膳美をつくし、歌舞艶を競ひ、一日の費數十百金に及べども、互に是を風流とし、をしとも思はず。少しも儉素正直なる人をみては、これをそねみにくみて、世をしらぬ田舍人なりとて、群り聚まりてこれを嘲笑ふ程に、ひとりの齊語衆楚の咻しきにたへねば、つひに一統の風となりて、田舍までも見および聞および、華美をつとめ、詐僞を習ふこそ、いとなげかしき事なれ。されば、世こぞりて驕奢を貴びぬれば、その費用過分なるにつけて、己が諸欲を快うするに、金銀なければかなひ難き程に、おしなべて金銀を貪りもとめざるはなし、よりて、天下の金銀常に有力の人のために兼幷せられて、おのづから流行も滯るぞかし。それに、金銀は世を歷て滅し、米穀は年を逐うて生ずる物なれば、金銀は日に貴く、米穀は

狼戾—狼戾の誤歟れぢれもとるの義

菜色—あをざめたる顏色

文なうして—原本「て」の字なし。

日に賤し。食祿の士は、いやしき米穀をもて貴き金銀に易ふる程に　家貲いよ〳〵たらず、貨殖の家は、貴き金銀をもていやしき米穀を買ふ程に、家貲いよ〳〵餘りあり。しかるに、有レ數の金銀をもて無レ限の驕をきはめ、有用の金銀をもて無用の物に費しぬる故に、金銀日に虛耗して、あまねく民間に流行せず。よりて粒米狼戾して極めて價廉なれども、閭里の貧民はそれをさへもとむる力なければ、富民は常に膏梁に厭けども、かたへには菜色ある人あり。富民は常に肥甘に飽けども、かたへには餓死する人あり。中に惡性なる者は、自ら死を救はんとては法禁をも犯し、盜賊をもするぞかし。こゝをもて見るに、世の困窮なる故にこゝに及ぶなれば、その本源風俗の驕奢より起りて、一朝一夕の事にあらず。されど此六七十年以前迄は、世間今よりも猶繁華なりしが、もとより驕奢を好むの俗はありながら、儉素を尊ぶの人もおほくありき。それをいかにといふに、其比は前代の故老あまた國にのこりしが、いづれも其父祖わかゝりし時より、晝夜草野に起臥して、汗馬野戰にいとまなければ、華奢風流の事は夢にもしらず、其子孫も家風に習ひて、いはゞ今いふ田舍風なりしかども、おのづから文なうして質にあまり、いかにも虛なうして實にあつし。甲斐〴〵しく賴もしく、しかもまめやかに情ありし。い

以下の文に倣ひて假に補ふ

鴆毒—鴆といふ鳥の恐ろべき毒、左傳に「宴安鴆毒不レ可レ懷也」

畜ふるに足る—源本畜ふに足るとあり

つしかさやうの人もうせはてゝ、在朝の士太夫世祿に浴し、泰平なるまゝに憂き事をしらねば、宴安をのみ懷ひて其鴆毒なる事をさとらず。驕奢淫佚こゝに至るもあやしむにたらず。まいて、貨殖の家遊俠の徒は、論ずる事なかるべし。されば、其弊郡縣にも移るといへど、今とても、田舍にはさすが古風のこりて、市朝とは同じ物にもあらず。もとより民はおろかにして蠢暴なるまゝに、大惡をする人もあり、又は一槩にて分別なき程に、難儀に臨みては、己が怒にたへず、上にたてあふ事もあれども、大やう市朝の人の邪智をもて人をたばかるやうの事はなき程に、おのづからすなほなる方もありて、惠に感じやすく、理にをるゝもすみやかなり。己がなりはひだにあれば、みづから足る事をしる事ぞかし。たゞ郡長たる人、民を天とするの心を忘れず、歳の豐凶にしたがひて賦稅を上下し、飢寒の患なく、父母を養ひ妻子を畜ふるに足るやうに相計ひなば、民安堵して、ながく流離の愁なからまし。さる上にて、條法を設けて、威刑をしめし遊惰をいましめ、紛奢を禁じなば、一郡感服して、好風俗となるべし。もろ〳〵の郡縣一統にかくありなば、其風おのづから市朝にも移りなん。今市朝にあらゆる人數夥しといふとも。天下の郡縣に比せば、十分の一にもたらざるべし。それさへ市朝の風盛なれば

憲廟—徳川五代將軍常憲院綱吉

郡縣へも移るぞかし。況や四方の郡縣、各安堵して阜厚になりなば、其風天下へ移りて、撲實日に勝ち、華靡日に減じなん。しからば驕奢の風やうやく變じて、儉素に復せん事うたがひなかるべし。

○富士のすそ野

たゞ思ふべし、民は邦の本、郡國は邦の藩屏なり。もし郡縣の民憔悴流離しなば、天下の勢もこれより薄くなるべし。古より、民窮しては亂を思ふといへば、郡縣危ければ國も危く、郡縣安ければ國も安し。さきに郡縣は治亂のかゝる所と申しつるは、是にて候。ひとり風俗のもとといふばかりにては候はず。むかし憲廟の御時、ある士人の好レ學ありけり。其人按察使に命ぜられて、畿内の郡縣を巡りしが、首途に臨んで學問の師に贈言を乞ひしに、其師、「此度道中にて、富士山の下を通り給はん時、よく裾野を見て行かれ候へ。あれ程の山は、あれ程のすそのなくてはたもつべからず。すべて山は、上より土下りて、下の埤厚なるにてこそ持ち候へ。もし上かさありて下細く、上大きにして下小さくば、忽に崩れつべし。此度上の御爲をおぼさば、たゞ下を厚くするやうに御意得

無類—無頼の誤

流氓—國を離れてよるべなき民

候へ。此外に申すべき事は候はず」といひしとなん。是易の剝卦の意にていへるなるべし。剝卦上を艮にす、艮は山なり。下を坤にす、坤は地なり。これ地上に山ある象なり。山は高く上に位すれども、下は地に附いてはなれず。是山は地を基本とするなり。人の上たる人、上を剝落して下を厚うすれば、邦安うして、山の地上に安置するがごとし。もし下を剝落して上にませば、「山在二地上一」の象にそむく程に、やがて危かるべしとなり。其に付きて、翁が愚案にて考へ候に、只今市井無類の徒、多く府下に介居て國の害をなし侍る。第一、人家に火をつけて大害を貽し候。是大方は郡縣の流氓にて候。郡縣困窮して流離に及び、身の置所なきまゝに、なにの心當もなく府下に出で候へども、生活すべきやうなく、又故里へ歸りてもよる方なく候故、盜賊をして身命をつぎ申す外はなく候。もし郡縣困窮せず、父兄親族土著してあらば、それらにも勘當せられて立のく程のものは、格別にて候。其外はたとひ府下にいでて手振すとも、かなはずば故里へ歸り候べし。身のより所あるに、眼前極刑に陷るを見ながら、身をすてゝ惡事をいたす事はあるまじく候。又諸國より追放せられて流浪するものも、郡縣賑ひ候はゞ、しるべにつきてよる所もあるべく候へども、それ右に申す通にて候故、諸方の惡黨こと〴〵く府下

ばさら男—派手なる男
有らしむるにあり—原本「に」の字

に萃るにて候。されば、郡縣やゝゆたかになり申さず候ては、府下の盗賊やみがたかるべく候歟。それに無用の華奢を専にする風俗に候故、貴族厚祿の家より、すこし時めくものに至るまで、下人を召抱ふるに、今樣のばさら男の異形に作れるをえらぶになんありける。下部にても、謹厚なる者に、さやうなるはなし。よりて世上に溢れものども、宅内の側屋にあつまりゐて、飲酒博奕し、はては醉臥して、多くは失火するをもしらず。又其最惡性なる者は、貨をぬすみ難をのがれんとしては、みづから主人の宅にわざと火をつくるもあるやうにきこえ侍る。是は主人たる者の心得あしきに起り候へども、畢竟華奢をこのむの流弊にて候。とにかくに、市朝の奢侈を抑へ、郡縣の困窮を賑はすにしくはなかるべし。

○天下の寶

されど、古より、太平百年に及び候へば、大かたは奢侈風をなし候。今奢侈を抑へ、儉素を崇ばんとならば、節儉廉直の士を選んで官に有らしむるにあり。號令科條の及ぶべきにあらず。第五倫いへらずや。「以身敎者從以言敎者訟」と、官長身正しければ、一

なし
第五倫—漢の宰相、嵴直無私を以て著る
二典—書經の舜典典堯虞典——舜典
忽微—極めてわづかなること
贓—收賄せる官吏
麑を放つ—魏の明帝王たりし時父帝に從つて獵す鹿子母あり父母鹿を射て子に

官の畏愼みて、おのづからしたがひ、官長正しからねば、言語をもて敎ふといへど、其下爭訟へて心服せず。法令屢下れども、いよ〳〵多事になりて治り難し。所詮官長その人にあらざればなり。もとより國政は、法令を闕くべからずといへど、法は人をもて行はる。人なければ法虛しく行はれず。孔子も、「爲政在人、其人存則政擧、其人亡則政息」とのたまへり。翁、昔ある故人の家に會して、二典の文を論ぜしが、曆數の事に及べり。翁いふは、「步曆の法始て虞書に見ゆるといへど、後世を經て元に至りて精しくなりし。そのかみ此法だに具りなば、義和に命じて候せしむるにも及ばざらまし」。主人聞きて「いやさはいふべからず。天は運動の物なり。運動の人をもて候せずしては、其きざしの忽微なるを覺えず。曆法は一定の物なり。曆法にのみゆだねて、人の目力をもて審にせざるは、聖人敬天の心にあらず」といふを聞きて、心に銘じてふかく感服しき。天度は萬古不易にて、遲速盈縮常ある物なり。それさへ動物なれば、定法の及ばざる所あるぞかし。況や人心變動常なく、是非互に見え、情僞紛ひいづ。一定の法をもて畫すべきにあらず。この故に、材は取るべけれども、嗇夫の利口は張釋之是れを黜く。贓は罪すべけれども、掾吏の自首は吳祐これを賞す。麑を放つをもて託國の仁をとり、

甕を射しむ明帝忍びずして弓矢を放つ父歎じて立てゝ太子とす
卵を盗めども—子思苟變を衛侯に薦めて將とせしむ、侯變の嘗て民の鶏卵を強取せしを以て用ひず、子思小過を以て人物を棄つべからざるを説きて用ひしむ
柱に膠して

卵を盗めども干城の將をすてず。公孫弘が布被は、儉に似て矯情の姦をしるべく、郭子儀が奢欲は、奢に似て汚行の譏を貽さず。もし一定の格に泥んで、萬變の事を制せんとならば、いはゆる柱に膠して瑟を鼓し、舟に刻んで劍を求むるなり。いかで變にあひ宜きにかなふべき。たゞ其人を得て、法を人にゆだねて行はしむれば、操縱進退時により事によりて變通する程に　法を用ひて法に用ひられず、法華を轉じて法華に轉ぜられず。さやうの人多く官にあり事に任せば、國政なにの滯る事かあらん。法も行はれ衆も服して、日に治平ならむかし。されば、天下の寶、なにか人材に過ぎたる物あるべき。この故に「楚は白衍を寶とせずして賢を寶とす」と王孫圉がいひし事、楚語に見えたり。梁の惠王、吾國に徑寸の珠ありて、車の前後十二乘を照すとて、齊の威王に誇られしかば威王、「寡人四臣ありて千里を照す。何ぞ十二乘のみならんや」といはれしには、惠王も慚づる色ありしとぞ。それに付いて申すも恐れなれど、ひそかに感じ奉るは、東照宮の御事なり。ある時、一役人闕けたる事ありしに、或老臣に、何がしを代りに仰付けらるべきと思しめす。其人柄いかなるぞ」と御尋ねありしに「其人はかねて臣がもとへ出入いたし候はねば、いかやうの人物にて候や存知し候はぬ由を御いらへ申せば、御氣色か

云々—規則に拘泥して變通を知らざること

はりて、「麾下の多き諸士を、のこらず其人がらをしれといはゞ、わが誤なり。又は汝諸士の善惡を必ずしもしるべき職にもあらぬに、問ひてしらぬをとがめば、わがひが事たるべし。件のものは麾下人多き中にも、日ごろ祿もなみにこえて、人にしられぬ程の身にもあらず。それに汝は、第一群臣の善惡を見聞き置いて、わが今のごとく尋ぬる時はいひ聞するを職とする者なり。いづれに付ても存知せずといふてさてやむべき事かは。さやうの事とはしらで、おもき職をいひつけ置きしは、わが目がねちがひたるにてこそあれ。よく思うて見候へ。すべて武道に志ふかき士は、家老又は權柄の人に諂ひ追從せぬ物ぞかし。さやうなる中によき人あるべし。その埋れぬやうにと、つねに氣をつけ心にかけてたづねもとめてこそ、君の爲を思ふとはいふべけれ。刀脇指、茶湯道具の類に、名物埋れてあると聞きては、なにとぞ取出してわれに見せんと思ふべし。それはいかやうの名物にてもあれ、國家の用にたゝず。なくても事欠かぬものなり。たゞ寶の中の寶といふは、人にとゞめたるなり。これはわれ常々口癖のやうにいふ事なれども、それをよその事にして、うかときく心から、唯今のやうなる返答をばするぞかし。さて、汝等がもとへ出入するものばかり立身する事とおもはゞ、諸士の心だてあしくなりて、

苟偸—苟且偸安、姑息にして安逸を貪ること

君相—君主と宰相と

權家にこび諂ふをよしとせん。されば、麾下の士恥をしり義を守るは、國家の元氣なり。それに諸士の心きたなくなりて、恥をしらず、鼻は曲りても息さへいでなばと思ふやうになりゆきなば、なに事をするも苟偸にして、義を守る心なかるべし。しからば人の元氣うせて死するごとく國家の元氣衰へて、やがて敗亡に至るも難かるべきにあらず。向後汝等こゝに心をつけて、大切の事と覺悟いたし候へ」と仰ありけるとぞ。竊に此仰により て考ふるに、人材を至寶とし給ひ、四維を國の元氣とし給ふ事は、誠に國家の龜鑑、宗廟の基本たるべし。我朝の人主に、つひに此御面影に似たるもきかず。古今にすぐれさせ給ふ御事といふべし。中に老臣を御しかりありし事、とかう申すに及ばず。周禮に冢宰あり、歷代に吏部あり。常に六卿の上に居て、ために人材を選ぶを己が職とす。其外閥閲の家も、所識の材を保任して、朝廷に登進むるを奉公としけり。しかあれど、後世に至りて、古道日に衰へ、君相ともに是を急務とせず、常に人の賢否をしるに心なければ、選擧の道ありといへど、治聞、宏詞、身言、書判の末事にすぎず。吏部たる人も、身詮衡の職にありといへど、簿書、期會さし當りたる事をのみつとめて、第一の本職を取失ひし事、代々もてしかなり。況や本朝において、鎌倉より以來、君相たる人、此さたに及ぶ事をきかず。しかるに此嚴命をきゝては、そのかみの老臣たる人、たれか恐懼諫動して、上の盛意に承順はざる者あらん。うべも御治世以後、人材輩出し、庶政脩擧し、日文明日に開けて、天下泰平の化に浴せざるはなし。是皆東照宮の御遺澤にあらずや。夜奉仰も餘りあるべき事なり。

諫動—悚の誤歟

○風俗は政の田地

しかるに天下國家には、風俗といふ物ばかり大切なるはなし。君上の威は天のごとく、其恐るべき事は雷のごとし。たれか背くべきなれども、世話に大勢に手なしといふやうに、一世の風俗には勝ちがたし。さる程に、號令法度も、それにて一邊は改るやうなれども、つひに風俗にけおされて、あまねく下へ達しがたく、ながく末まで遂げざる程に、たゞ局面ばかり取傳へて、はては風俗のなりになりてやむぞかし。たとへば風俗は田地なり、政は穀種のごとし。たとひ嘉穀の種にても、地拵あしくしては、そだちがたし。そのごとく、善政良法といへども、風俗とゝのはずしては行はれがたし。穀種のそだたん事を欲せば、地ごしらへするにしくはなく、政令の行はれん事を欲せば、風俗

淫佚—佚樂に心奪はれて法度の外に走ること

をとゝのふるにしくはなし。されば、風俗のもとは人君の身にあり。人君たる人、身ををさめて下を化するといふは、古今不易の道なり。人君の身をさまらずしては、下たる人なにを目當にすべき。しかれども、古より善惡ともに久しく堅まりて、世の風俗となりて、急には改まらぬ物ぞかし。中に惡に移るはやすく、善に移るは難き習なれば、今風俗を改めんとならば、たゞあしきかたへゆかぬやうに、つなぎたもつにあるべし。是を風俗を維持すといふなり。風俗を維持する事は、君一人の力にては及びがたし。時の執權をはじめ、もろ〳〵官長として群下の上にをる人、各君の意をうけて、身ををさめ行を愼みて、人の手本となるやうにだにあらば、其下にたつ人、おのづから恐るゝ事あり恥づる事ありて、法令もきくべき程に、風俗も改りてゆくべし。今の御代、上には儉素を尊びおはしまし、毛頭も御榮耀なき事は、天下の知りたる事なれども、末々の驕奢はいまだやまず、常に聲色を遠ざけられ、晝夜御政事に御心を盡さるれども、末々の淫佚はいまだやまず。されば、上の御盛德は、翁づれが數ならぬ身にさへ、常に仰ぎ奉る事なれば、まいて歷々諸役人として、たれか上の御旨をうけざる人あるべき。さここそ各油斷はあるまじけれども、久しく衰へ來りたる風俗なれば、かくあるにてやあらんか

踊貴—「騰貴」に同じ

し。萬治寛文のころかとよ、世に鶉はやりて、貴富の家互によき鶉を購りもとめし程に、其價しきりに踊貴しけり。阿部豐後守忠秋も其ころ鶉をすかれて、常に籠を座側に置いてなかせてきかれけり。それをさる列侯なる人きゝて、其ころ世にかくれなき鶉を厚價にてもとめて、ある官醫をもて、近きころ珍らしき鶉をもとめ得て候。御慰に進じたきよしをいはせけり。その官醫豐州のもとへ來て其旨を達して、「御もちひ候はゞ、さぞよろこびにてあるべく候」といひければ、豐州きかれて、「先へよく意得て」とばかりにて、とかくの返事なし。しばらくありて近習のものを呼びて、「鶉籠の口をみな、庭のかたへむけよ」とある程に、みな外へむけければ、「其口をのこりなくあけよ」とある程に、皆あけければ、鶉殘らず籠をいでて飛去りぬ。かの官醫見て不審におもひ、「久しく御手馴せし鳥にて、又立歸り候にや」といへば、豐州「いや、さにてはなし。今日より殘らず放ちやるにて侍る。さて序ながら申す。某ごとき、上の御威光にて人に執しおもはるゝ身にて、物は好くまじき事にて侍る。某このごろふと鶉をすき候へば、はやさやうにきこゆる人もおはし候。向後はふつと鶉すきをやめ侍るべし」といはれしかば、かの官醫も手持なくみえしとぞ。わが數寄たる事はやめがたく、人の志とてたま〳〵贈

泥塞—泥のためにふさがること
戲場—芝居小舍
寃告する—寃罪を訴ふ

る物は、もらひてもさてあるべきを、上の御爲を忘れぬよりして、かり初の事にも、世の風俗へも移り、わが權威にもなるやうの事は、かたくつゝしまるゝ程に、かくありけり。其外同じころ執權の衆は、いづれもつゆ身に驕なく、權にほこらず、何事も公に沙汰せられし程に、其風下に移りて、末々の役人までも、廉潔質直なる人ありて、風俗を維持せしぞかし。されど、翁おもふに、風俗の上より下へ移るはさる事にて、又下より上へも移るにてありけり。たとへば上より下へ移るは、水の源すめば下流すみ、源濁れば下流濁るがごとし。下より上へ移るは、下流泥塞すれば、其泥を上へ推しのぼせて、漸く上流に及ぶがごとし。今富商大賈の子弟、武人俗吏の惡黨、其外市井無賴の徒、日夜娼家戲場をもて家とし、酒色博奕をもて事とす。其風上へ移りて、列侯郡守の身にて、ひそかに娼家の遊を好むもあり、士太夫といはるゝ身にて、きそうて戲場の風を學ぶもあり。是皆下より上へ移るにあらずや。今此流俗を正さんとならば、いよ〳〵上にたつ官長を沙汰して、源を澄すこともとよりの事にて、又下にある惡黨を搜抉して、下流の泥を浚ふべし。しかるに、今比屋の賤民ども、日ごろ府廳へ手遠き程にたとひ寃告する事ありて、官へ訴へんとしても、大かたは口上拙く、禮義をしらねば、

嚴譴—きびしくとがめらるゝなり
什伍—十人組五人組
悛治—改め治むる、悛は悛か
凶狠—性よこしまにして人にさからひ争ふこと

にはかに府廳の晴なる所へいでては、事の子細をくはしく陳ずる事あたはず。それに下吏いさゝか推恕の心なく、威勢を募る程に、少しにても無調法なる事あれば、嚴譴せられ、一言にても口上相違する事あれば、詰問せらる。よりて、我に十分の理ありても、府廳へ訴ふるをはなはだ難事とす。その上、府廳はたゞ一所にて、四方の訴は日々にかさなりて山のごとし。中々手およびがたく、たとひ輕き事にても、滯りて多くの日數を經る程に、其間比隣什伍相與に、たび〳〵廳へ召出さるゝまゝ、一閭のわづらひとなり、費用もかゝる故に、それにこりて、大かたは下にて無爲にすますをよしとす。かくては、姦賊惡黨いかでか國にたえぬべき。所詮府廳手遠く、又は訴ふる事たやすからず、むづかしき故ぞかし。今姦惡を悛治せんとならば、方々にあまた小廳をたて、囹圄を設け、人を擇びて其長とし、その手寄々〳〵に幾街と各受取の限を定め、すべて府廳に屬せしむべし。さて什伍の法をいよ〳〵嚴にし、比隣互に相いましめて、善をすゝめ惡をこらし、もし凶狠にして人の言を用ひず、衆目にある程の惡ある者をば、たとひ其人國家の法をおかす事はなくとも、すみやかにその手寄の監司へ告げしらするやうにし、其場にて僉議の上、輕科ならば當座にすまし、重科ならば禁獄もいたさせ、追うて

壅滯—ふさがりとゞこほること
面革—外面丈を改むること
杞國憂天—列子に「杞國有㆑人、憂㆓天崩墜㆒」

僉議の趣を委細に具狀し、其人を竝せて府廳に遣して、廳主の處決を仰ぐべし。しかあらば、府下の人家、何事にても官に達するに、府廳に至るの勞なく、府廳も小廳の成獄を受けて聽斷せば、日々應對簡易にして、下より訴ふる事も、壅滯するの患なかるべし。それのみならず、下の惡黨郷曲の間に隱るべきやうなく、人々庸行をつとしむ心も出來て、急に感服する事はなくとも、面革には至りなん。斯くして時月を經なば、風俗も漸く改りぬべし。たゞ官長たる人、大かた此事を專にし、姑息を安んじ、其下を治むるに、公法をさへ犯さねば、見ゆるしきゝのがすをよしとす。それにては風俗の改まるべき期もなかるべし。もし一旦の料簡にていはゞ、風俗の僉議は迂遠なるやうに聞ゆれども、翁はふかく恐れて、國政を妨げ士風を敗るのもとは、こゝにありとおもへり、腐儒迂濶の故態とやいはん。しかしながら、杞國憂㆑天の愚人ともいふべし」

花にまさる—王安石の「綠蔭幽草勝㆑花時」
歷觀—たどり見ること
樂とし—原本「と」を脱し下に「に」字あり

駿臺雜話 卷三

○天下は天下の天下

春過ぎ夏來て日もやう〳〵ながきころ、天氣も折から淸和にて、庭の綠樹もしげりあひつゝ、花にまさるといひしもさる事とおもはる。翁が身のわづらはしさも、やゝこゝろよく覺えしかば、ひとり明窓の下に卷をひろげて、古今の事を歷觀し、いと感慨ふかゝりしに、いつも見馴れし心しりの人さへあまた問來て、かたみに書を講じ文を論じて、日をくらしけるが、座中の人々いかゞ思ひけん、於戲前王不㆑忘といひしを、翁きゝ咎めて、「各申さるゝ如く、只今天下泰平なる故に、世にある有德有位の人は、もとより親を親とし賢を賢とし、我等ごとき德もなく位もなきいやしき身までも、樂を樂とし利を利として、優游して卒㆑歲は、これ皆泰平の餘澤にあらずや。歐陽永叔豐樂亭記を著して、「宋の太祖四海の亂を定めて、天下の人をしてゐながら百年泰平の樂みに安んぜしむ。たれか其恩のふかきをしらむ」といへり。翁も亦おもへらく、東照宮風に櫛り雨

撥亂反正—亂世を治め正道に復すること

幾世不刊—幾萬年の後までも削除すべからざるをいふ

中國—支那をさす

明の太祖—朱元璋

に沐し、御一生の力を盡し、撥亂反正し給ひてより、今百有餘年に及びて、干戈動かず、四海浪靜かにして、天下泰平の化に浴しぬ。又誰か御恩のふかきを戴かざる。然るに我等ごときいやしき身にて申すは恐れあれども、上の御盛德をのべて世に傳へ廣むるは、儒臣の事なれば、さしてふかく憚るべきにもあらず。それにつきて、御盛德の事おほき中に、日ごろふかく奉ㇾ感て、あまねく世にしらせたしとおもひ侍る事あり。今客のために語り侍るべし。天下は天下の天下、一人の天下にあらずといふ事は、六韜の書にいでて、天下の君たる人は、常に忘るまじき事にて候。最萬世不刊の名言と申すべし。されど、中國にても、三代を除きては、凡そ創業の君、大かた天下を得るを我一人の樂として、天下の天下とするはなし。むかし明の太祖創業のはじめ、中山王徐達、軍中にて病を得ると聞給ひて、いそぎ召しかへし、諸醫を召していろ〳〵療治せられしかども、終にかなはざりしかば、太祖自ら山川社稷に禱りて、「今數年徐達が命をあたへ給へ。さるにおいては、達が死せん時、朕が命も一度にとり給へ」と神に告げ給へり。太祖の諸將、徐達を第一とす。天下を平定するの功、徐達にしくはなし。此時天下甫て定まりて、達先死し、われひとり殘りて、泰平の樂を享るの本意なき事を悲しみて、せめて數

規模—かた

長湫合戰—既に註せり

年天下の安きを共にして、死なば諸共に死なんと、わが命をかけて神にちかへるなるべし。翁明の史錄を讀みて、こゝに至りて歎息しておもへり。古より、眞主は別の事なり。馬援が光武を見て、「帝王有ㇾ眞」といひし、うべさもあらんかし。固より徐達が死する時、天下すでに明に歸して、家嗣も定まり、社稷も固く、たとひ太祖崩じ給ひても、そこに危き事なき程に、かくは宣ひしぞかし。されど、天下を得ては、ながく存命して、わが身の樂をきはめむとこそ思ひ給ふべきに、功臣の死を悲しみて、死を同じうせんと禱り給ひしにて知りぬ。あながちに天下を得るをもて樂とせず。なにとて天下を得るを樂とせざるといへば、其心はじめより、天下を天下の天下として、一人の天下とせねばなり。漢の高祖、光武なども、同じ規摸なるべし。此大器量なくては、天下を得がたし。もし小兒のめづらしき玩物を得て、いつも身をはなさず、人にとられんかと氣づかひするやうにては、たとひ天下を得ても、やがて失ふべし。秦の始皇、楚の項羽、我朝にてもちかき比、信長、秀吉をもてしるべし。いづれも不仁にして天下を失ふはさる事にて、しかしながら天下をたもつ器量に非ず。されば古人も、「深山有ㇾ寶無二心於ㇾ寶者一得ㇾ之」とはいへるぞかし。天正十四年の事かとよ、長湫合戰の後、東照宮すでに豐臣秀

鋒楯―不和となりて戰を交ふること

吉と御和睦ありしが、秀吉使を遠州濱松へつかはし、上洛と號して大坂へ御來會をすゝめられしかども、御同心なかりしかば、頻に使來る事數度に及びてやまず。それにてもなほ御同心なかりしかば、秀吉母氏大政所を質として、御出駕を請はれしに、御思案ありて、御上洛あるべきのよし仰出されしを、群臣危き事におもひて、いづれも一同に申上げけるは「もし御上洛なきを秀吉いかられ、鋒楯に及び候とも、もとより御弓矢の强きは申すに及ばず。それに臣等一命をすてゝ禦ぎ候はゞ秀吉百萬の兵といふとも、心やすくは敗れ候まじ。それに只今危き所へ御越しましますは事あるべからず」とて、達てとゞめ奉りしかば、その時、「いづれも申す通りにて候。秀吉の威勢に恐れて上洛せんといふにはあらず。よくおもうて見よ。天下の兵亂久しく打續きて、此比までも干戈をさまらず、都鄙安堵せざるにあらずや。此一兩年の間、漸く天下靜謐にむかひつるに、某秀吉と鋒楯におよびなば、又爭亂始まりて、天下の大難になりぬべし。もし上洛して不慮の變もあらば、其時は天下のために一命をすてんと覺悟したるぞ」と仰せられしかば、群臣みな肝に銘じて、とかう申上ぐるに及ばざりしとぞ。岡崎を御首途の時、井伊、本多に御身後の事まで仰せおかれたれば、御自身にも危しとおほしめさゞるにもあらず。

代らむ―原本「代らぬ」とあり

賓主―客も人も、

權詐―いつはりのはかりごと

それにおもき御身といひ、をしき御命をもて、天下に代らむと仰せられし御一言の誠は、天人に感通すべし。それ故にこそ天命人心に御かなひありて、天下をたもち給ひしぞかし。されば、明の太祖は、命をかけて功臣の死を救はんと禱り給ひ、東照宮は、御命をかけて天下の難を濟はんとおもひ給ふ。御器量の大きにして、いはゆる寶に心なきは同じ事なれども、御仁心の深厚なるは、恐らくは太祖のおよび給ふ所にあらじ。いつの比にかありけむ、ある人の家にて、東照宮の御軍功の事など語りあひしが、其序に、主人この事語りいでて、其忝なさを思ひとり、賓主ともにおほえず落涙に及びにき。しかるに、兵家者流、又は世の智謀を好む者、是等の事を聞きては、主將人心を攬のかしこき謀とおもへり。常に權詐を尙ぶ心より見れば、さいふも似合ひたる評議とはいひながら、是非もなき事なり。さやうの人のためには語るべからず。

○直諫は一番鎗より難し

されば、古より倭漢ともに、創業の君おほくは天下を一人の天下とおもふ故に、天下を得ては、榮華をきはめ、名聞をつとめぬはなし。しかるに、天下を御一人の私物とおほ

燕翼の謀―子孫の爲のはかりごと

重暉累洽―明德の人相嗣いでよく世を治むるをいふ

絲毫―いさゝか

しめさぬ故に、御治世の後も、いさゝか御身の御榮華をばおぼしよらず、たゞ天下の爲に御思慮を勞して、ながく燕翼の謀を貽しおかれしかば、重暉累洽、御代を逐つて昇平なるぞかし。關ケ原御陣以後、いつの比にかありけん、山岡道阿彌前羽半入など御前に伺候し、御閑話ありしに、「天下をしろしめさるゝ御身にては、なにゝても世にまれなる事をあそばしおかれ候はゞ、ながく御名も遺るべく候。それ故太閤も大佛を建立にて候」と兩人申上げけるに、「各申す通り、大佛殿は末の世迄殘り、太閤の名も傳るべし。されど我は一方の名を殘す事を思はず、たゞ天下のためになるべき事を工夫して、後嗣に貽す外はなし。是大佛殿いくつ建立したるよりも增るべしとおもふ」と上意ありしとぞ。さて兩人をば、おろかに淺はかなる事を申すとこそおぼしめしけめと、恐れながらもおしはかり奉らるれ。かの朝鮮を征伐して、おほくの人を殺し、大佛を建立して多くの財を費しぬるは、天下の害にてこそあれ、國家のためになにか絲毫の益になる事ある。たゞ愚人の耳目をおどろかすばかりにて、少し心ある人は、いまの世迄も眉をしわむるぞかし。しかれば、末の世に名をのこすとはいへど、ながき譏を招くなるべし。しらずや、今日光の御廟、屹として泰山の如く、國々までも奉祀して、仰ぎ奉らざるはなし。是こそ

虛損の疾―活力の耗して空しくなれるより起るやまひ

過擧―あやまてる行

永代不朽の御名譽とはいふべけれ。それに別してひとつ感じ奉るべきは、かくばかり古今に傑出し給ふ御事にて、御在世の內、御自身の聰明に傲り給はず、常に下の直言を納めさせ給ふこそ、眞の御聰明とも申し奉るべけれ。古より人君の德を論ずるに、諫をいるゝを本とす。凡そ人聖人にあらざれば、必ず過失あり。假令あしき事ありても、諫をいるれば、虛損の疾の補藥を受くるがごとし。虛損おもしといへど、よく治するの賴あり。いかほどよき事ありても、諫をふせげば、虛損の病の補藥を受けざるがごとし。虛損輕しといへど、不治のおそれあり。しかれども、英明の君のくせとして、好んで自ら用ふる程に、下の直言をふかく忌みにくめり。もろこしにては、いづれの代にも、諫議正言などの官をたておきて、求ㇾ諫要とすれども、多くは其名ばかりにて、直言する人は退きやすく、阿諛する人はすゝみやすし。よりて、上に過擧あれども改めず、國に闕政あれども擧せず。是古今の通患なりき。いはんや我朝武家の代になりて、上は專に武威をもて下を制し、下はたゞ勇力をもて、上につかふ。言語塞りやすく、下情通じがたく、國事日に非なる事、もとよりこのよしなり。しかるに、上下ともにこれを簡要の事と思ひよる人あるはまれなり。こゝに東照宮兵亂槍擾の間に御出まし〳〵て、常に

言路をひらき、下情を通ずるを御心とし給ふをぞ、古今にすぐれ給ひたる御事と申すべし。遠州濱松の御城に御座なされし時、ある夜、本多佐渡守、竝に外樣の者三人、御用の事ありて御前に召出さる。御用すみて、三人の者は退出しけるが、中に一人、御前にて鼻紙袋より筆記の物一通取出し、自身に御前へ持ちてさしあげけり。「それは何ぞ」と御尋ねあれば、「日頃私の存じよりに候事ども書付けおき申し候。憚りながら、萬に一つも御意得にもなるべきかと存知候うて、さし上げ候」由を申しければ、「それは奇特なる心入かな」と御感なされ、「佐渡守はきゝてもくるしからず。それにて讀みて聞かせよ」と仰せらるゝ程に、數箇條ありしを段々讀みけるに、一箇條を讀みをはる毎に、「尤なる事」と御挨拶ありて、「其筆記の物是へ」とて御取りあそばし、さて仰せられけるは、「是に限らず、此後も存じよりたる事あらば、少しも遠慮なくいひきかせよ」とありしかば、「御聞きとどけあそばされ、かたじけなく存じ奉る」と申して、御前を立ちけり。其跡に佐渡守殘り居けるが、「さても彼者卒爾なる仕かたにて候。それに一箇條も御用に立ち申すべきと存ずる事はきこえ申さず候」と申上げければ、御手をふらせ給うて、「いやとよ、さして用にたつほどの事はなけれども、其身相應の思案をつくし、内々書付け置いて我等に見せんとおもふ志は、なによりも奇特なる事ぞかし。其いひ上る事、用にたてばとり、用にたゝねばとらぬ迄にてこそあれ、卒爾なるしかたなどといふべき事にはあらず。惣じて、上も下も、我身の過は知らぬものなり。されど、小身なる者は、心安き友達傍輩などあれば、たがひに身の上の惡しき事をいうて吟味もする程に、意付きて改むる事おほし。是は小身の益なり。大身なるものは、友達傍輩と出合ひて心安く語るといふ事もなければ、常に出合ふものとては、家臣所從ばかりなり。それらは、大方の事をば御尤とならではいはぬ程に、我過を知るべきやうなし。しらねば改むる心もつかずして打過ぐるのみなり。是は大身の損といふべし。古より、富貴なるものの國を失ひ家を亡すは、大かた我過をいひきかするものなくて、自身にする事をよきとばかり思ふ故なり。しかれば、わが惡事を告知する者は、大切に思ふべきにあらずや」と仰せられしを、佐渡守承りて、覺え居けるが、あるとき嫡子上野介に語りきかせ、上の御思慮のふかきにそへて、御仁厚なる事をいうて、落涙に及びしに、上野介きゝて、「其人は誰にて候ひつる、其申上げし事はいかやうの事にて候や」と尋ねられければ、佐渡守、上野介をしかりて、「たゞ上の思召の結構なる事を思ふべし。其人の名も、その申上げし事も、汝きゝ

容悅—おもねりへつらふこと

て何にせんとおもふぞ」とて、いひきかせざりしとぞ。上野介年わかにて、其人を嘲る心にてをかしく思うて、名をきゝ其事をきかんといはれしを、佐渡守合點して、押へられしなるべし、其後駿府の御城に御座なされし時、御側に侍座の衆へ上意ありしは、「人君はよき家老を持つべき事なり。我常におもふに、主君の惡事あるを見て、主君の怒をもかへり見ず、諫言をいるゝ家老は、戰場にて一番鎗をするよりも、遙にまさりたる心ばせといふべし。其子細は、敵に向つて勝負をするも、身命をかばひてはならぬ事なれども、必ず敵にうたるべきにもあらず。たとひ討死しても、世に名を殘し、主君にもをしまれぬれば、死しても本望なる事なり。又敵を討取りぬれば、主君の感にあづかり、恩賞を得て子孫にも傳はれば、戰場のはたらきは、生死ともに心にいさみあるべし。それとはちがうて、主君の無道なるをなげきてしば〱直諫すれば、忠言耳に逆ふ習にて、主君の心にあはぬ程に、常にいとひ嫌はれて、たゞ禮貌にてあひしらはれ、日に疎遠になるものなり。それに新進容悅の諂ひもの共、件の家老を事にふれて讒する程に、日を逐うて主君の目見せあしくなりて、何をいうても用ひられず。其時はいかなる忠臣も退屈する故に、或は病氣と稱し、或は致仕をねがうて、身を引退く分別するぞかし。然るに、主君の氣に背くにもかまはず、幾度もすゝみいでて極諫しなば、主君怒を積みて手討にするか、又は押籠めて出さぬやうにするにてあるべし。それを露も心にかけず、たゞわが報國の志をつくして終るは、世にありがたき忠臣といふべし。是に比すれば、戰場の一番鎗は、反てやすき道理なり」と仰せられしとなん。誠に萬世御子孫の御事は申すに及ばず、すべて人君たる人の永き鑑戒となるべき御言葉どもなり。

○杉田壹岐

是によりて思ふに、陷陣先登するは、難きやうにて易く、犯顏直言するは、易きやうにて難し。然るに古今君も臣も、陷陣先登の功を貴ぶ事をばしれども、犯顏直言の忠を重んずる事をばしらず。されば、君たり臣たる人、いづれも東照宮の上意を忘るまじき事なり。寛永のころ、越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふ者あり。もとは足輕なりしが、其身の材をもて微賤より登庸せられ、厚祿をうけ、國老に列しけり。伊豫守殿、參觀にて一年在江戶の內、費用過分なりしを、常に前年より支度して、用度足るやうにしけるは、ひとへに壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に犯顏直

晡時—申の刻、卽ち午後四時頃

言して、君の過を匡救する事を忘れず。ある時、伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及びて歸城あり。家老どもいづれも出迎へしに、伊豫守殿ことの外氣色よろしく、家老どもに對して、「今日わか者どものはたらき、いつにすぐれて見えし。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りていづれも喜び候へ」とありしかば、家老どもいづれも、「御家のため何より目出度御事にて候」といひしに、壹岐一人末座にありけるが、默々として居たりしを、何とぞいふかとしばらく見あはせられしが、こらへかねられ、「壹岐は何とおもふ」とありしに、其時壹岐、「只今の御意承り候に、はゞかりながら歎かしき御事に存じ候。當時士共御鷹野などの御供に出で候とては、さきにて御手討になり候はんも計りがたく候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。かやうに上を疎み候うて思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべきとは不レ存候。それを御存知なく、賴もしく思しめさるゝとの御意こそ、愚なる御事にて候へ」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀もちて側に居たりしが、「壹岐に座を立ち候へ」といひしを、壹岐聞きて其人をはたとにらみ、「何れもは御鷹野の御供して、猪、猿を逐うてかけ廻るを御奉公とす。此

糟糠の妻—貧困の時より艱難を共にし來りし妻

壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な」とて、其まゝ脇指を拔いてうしろへ投げすて、伊豫守殿の側へ進みより、「たゞ御手討に遊ばされ下され候へ。むなしくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はゞ、責めて御恩の報じ奉る志のしるしと存じ候はん」といひて、頭をのべ平伏しけるを見給ひて、なにともいはで奧へいられけり。其跡にて、外の家老ども壹岐にむかひて、「御爲を思ひて申されしは尤にて候へども、折もあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきををられ候事は、遠慮もあるべき事にこそ」と云ひしを、壹岐、「君へ諫を申上げ候に、御機嫌を考へ候ひては、よき折とてはなき物にて候。今日はよき序とこそ存候へ。其上某事は、御取立のものにて候へば、各とは譯の違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても其分の事にて候」といひければ、諸家老各感じあひける。さて家に歸りつゝ、切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日ごろ糟糠の妻のありけるにむかうて、「其許にいひおく事たゞひとつ侍り。御身は女の身なれば、直に御恩をうけたるにてはなけれども、我御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歷々の妻とて、大勢の所從に圍繞せられしは、かぎりなき御恩にあらずや。しかれば、われ生害仰

付けらるゝ後にても、たゞ朝夕今迄御恩の有がたかりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるべからず。もし女心とて、我身のものうきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を、言葉の末にもつゆおきなば、黄泉の下までもふかく怨と思ふべし」といひける。さて今やと待ちけるに、夜ふくる程に人來て門をたゝきしが、「召あるまゝ登城すべし」となり。さてこそとおもひて登城しけるに、すぐに寢所へめし入れ、「其方が晝いひし事心にかゝりて寢られぬ間、夜陰なれどもよびつるなり。わがあやまりたる事はとかくいふに及ばず。其方が心ざしをふかく感じ思うて滿足する」との事にて、直に腰の物を賜りしかば、壹岐も思ひ寄らぬ事にて、おぼえず落涙に咽びつゝ、拜賜してまかり出でけるとぞ。此事、翁加賀にありし時、越前の人ありて語りしが、今おもへば、此杉田などこそ、東照宮の仰せられし世に有がたき家老といふべし。誠に一番鎗よりも難き事にあらんかし。

○伴大膳

されば、巧佞なる臣は、人君の心にかなひて、常に任用せらるれども、大切の事には、

剛直なる人ならでは用にたちがたし。それに付きて、右の杉田事とはちがひたる事なれども、序ながらかたり侍るべし。大坂冬御陣の前に、片桐市正攝州茨木の城に據つて御味方いたせしに、柴山小兵衞が泉州堺に有りて急難なりと聞きて、間近く味方の急難を見捨てては、御味方申したる甲斐なき事とおもひ、茨木の城へ引取り一所にならんとて、手下の兵少し引きわけてつかはしけるに、其兵攝州尼崎を過ぎて堺にいたらんとしけるを、大坂より兵をつかはし、茨木の兵を取卷いて攻めける程に、尼崎の城へ援兵を乞ひしかども、城より救はざりしかば、茨木の兵のこらず討死しけり。此時尼崎の城主建部三十郎幼少なりし故、播州池田武藏守より、池田越前、宮城大藏などいふ宿將に、士卒を添へてつかはし置きけるが、此者ども片桐を疑ひて、茨木の兵を救はざるにてありける。世には武藏守大坂と內通あるやうにも沙汰せしなり。大坂と一たび御和睦の後、京二條の御城にて、此事御僉議ありしに、武藏守の家臣に、伴大膳といふ者は、上にもよく御存知ある者なりしが、御前において段々申わけいたしけれども、御憤未だとけず、「今においてとやかく申候うても、眼前に味方の兵うたるゝを見殺せし事、武藏守心底いぶかしく思しめさるゝよし仰せられ、其まゝ御座をたゝせらるゝを見奉り、脇

此申わけ―原本「申此わけ」とあり

指を拔いてうしろへなけすて、御側へ匍匐ひより、御小袖の裾にすがり、「是は御情もなき上意にて候。いかに御姫さまの御腹より生れ候はずとて、武藏守も御孫とは思しめされず候ふや。只今此申わけ仕らずしては、いつ申わけ仕るべく候や」とて、はら〲と涙をながしつゝ申上げければ、其誠を感じおほしめさるゝにや、「よし、今は聞きわけたるぞ。いそぎ歸りて武藏守に申しきかせて、安堵させよ」と上意ありしかば、大膳手を合せ平伏して、御禮を申上げてまかり出でけり。其跡にて御前伺候の衆へ仰せられしは、「あの大膳が父をも大膳といひて、武藏守が父三左衞門いまだ弱年にて庄三郞といひし時の馬卒なりしが、長湫の戰に、庄三郞が父勝入、兄庄九郞討死したると聞きて、同じく討死せんとて、乘りつけゆかむとするを、彼が父大膳、其時は何がし男とかいひて、馬の口を取りしが、しひて馬を引返してつれてのきけるを、庄三郞怒りて、「はなせ〲」といひて、馬上より鐙にて、頭を續けざまに二三町が間蹴つけし程に、面より血の瀑の如くながるゝをもかまはずして、つひにのかせけり。其時討死せば、むなしく死して家も絕えなまし。しかるに播州一國の主となりしは、かの大膳が其時の働にて存命したる故ぞかし。さすが親の子ほどありて、あの大膳も、主のために身をかばふ事な

池籞―いけす

きは、ういやつとおもふなり。今の世に、われらが前へいでて、さきのやうなる事をいふべき者は、外には覺えず。武藏守はよき人をもちたる」と上意ありしとなり。そもそも大膳が匹夫をもて天下の御威光に對し、主君の爲に一命を拋ちて、國の宿寃を明かにしけるは、世にたぐひなかるべし。さればこそ上聽を囘し、御氣色も霽るゝのみならず、ふかく御感を蒙りしは、大かたなるべき事かは。しかしながら、上の御盛德と申侍るべし。されば是に限らず、鈴木久三郞が池籞の鯉をとりしをば御手討になされんと、おほしめすほどの事なりしかども、直言を申上げければ、其まゝ御怒をやめられ、反て御感じあそばしけり。初鹿傳右衞門が御朱印に墨をぬりて惡口申せしをば、一往放棄せられしかども、長湫の戰に、傳右衞門ひそかにかくれて御供して首級を得たりしかば、卽時に其場にて御直に前の罪を御免し、戰功を御感じありける。其外にも、常に御威光を屈せられ、下の義氣を御取立てなされしかば、群士も勇氣を折かれ奉らざる程に、御ために命をすつる事を露いとふ心なかりき。かの織田、北條、武田、上杉の主將も、智謀勇略は世にすぐれけめども、事に己が威力にほこり、下の勇氣をひしぐをもて手柄とせし程に、一旦は盛なるやうなれ共、上一人の威勢ばかりにて、下の義氣おとろへては、久

孫謀を貽す—子孫の爲に計りて人才をのこすこと。詩經に出づ

敷はつゞかぬものなり。さればこそ、いづれも遂に亡びしぞかし。是をもて、東照宮御思慮のふかきをしるべし。其ころ御弓矢のつよかりし事、天下にならびなかりしは、いはれなきにあらず。然れども、今世の人、大かたは御武運つよかりしとばかりいふめり。もとより御仁德ふかゝりし故に、天命にかなひ給ひしは、自然の道理にして、それはせんぎの及ぶところにあらず。せんぎの上にていはゞ、御武運のつよかりしは、御弓矢のつよきにあり。御弓矢のつよかりしは、諸士の義氣を御そだてなされしにあり。しかれば、下の義氣を御育てありしは大切の事にて、御孫謀を貽したまへるひとつともいふべし。しかるを、たゞ御武運のつよきとばかり意得るは、いと淺き事なるべし。

○阿閉掃部

前に申しつる杉田壹岐が事につけて思ひ出し候。是も越前の士にて候。さして忠義に係る事にては侍らねども、其ころの士風を語り申すべし。秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へられけり。又狛伊勢とて、是も國にて世祿の歷々なりしが、嫡子に鎧の著初させけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧

志津ヶ嶽の戰—天正十一年羽柴秀吉と柴田勝家との戰

著する事を賴みけり。さて饗膳すみ、祝の盃に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の著初にて候まゝ、御身の御武功の事御物語候ひて彼に御きかせ候へ」といひしに、掃部、「いや某が身の上に、御はなし申すべき程の武功は覺え申さず候。されど、御望も默しがたく候まゝ、某一生の内に武者振の見事なる士を一人見申して候。その事を話し申すべし。江州志津嶽の戰に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、(阿閉掃部が父は阿閉淡路守とて、明智にくみしけるとなん。然れば志津ヶ嶽合戰の時、掃部は柴田方にてあるべし。)敵と覺しくて、うしろより詞をかけし故、馬を引返し候へば、其人申し候は、「今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候。御人體を見うけ、幸とこそ存候へ。御不祥ながら御相手になり申すべき」とて進みより候故、「それこそ此方も望む所にて候へ」とて、たがひに馬をのりはなし、すでに鎗をあはせんとしけるに、其人、しばし御待ち候へ。今朝より雜兵をおほく突崩し候故、鎗よごれて候まゝ、鎗をあらひ候ひて御相手になり候はん」とて、余吾の湖に鎗を打ちひたし、二三遍洗ひつゝ、「さらば」とて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてゝ、もののあやめも見えずなりぬ。其時あなたより又詞をかけ、もはや鎗先も見えず候。御殘多くは

ひきけろ―引出物に授く
一伯殿―越前侯忠直

候へども　是までにて候。御暇申候べし。御名こそ承りたく候。某は青木新兵衛と申す者にて候とて、某が名をも承り候ひて、此後又陣頭にて出合ひ候はゞ、互ひに人手にはかゝり申すまじく候。もし又味方にて候はゞ、わりなく入魂致し候べし。さらばとて立ちわかれしが。是程見事なる武士はつひに見侍らず。いかゞなりはて候にや」と語りけるに、其比伊勢がもとへ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。其日も來て勝手に居たりしが、此物語をきゝて、勝手よりにじりいでつゝ、掃部にむかひて、「さても只今の御物がたり承り、今更昔を思ひ、涙をおとしてこそ候へ。其時の御相手になり候青木新兵衛は、はづかしながら我等にて候。かく申すばかりにては、浮きたる事におほすべく候」とて、其時雙方の鎧のをどし、馬の毛色を一々いひけるが、ひとつも違はざりければ、掃部驚きつゝ、「さて／＼久しくてあひ候うて本望に候」とて、手前にありし盃を方齋にさし、「是をしるしに」とて、腰の脇指を拔いてひきける。それより方齋が名國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にてめし出されけるとぞ。其後一伯殿筑紫へ左遷の時、掃部はいかゞなりけんかしらず。方齋は先祿にて加賀へ招かれ、それよりすぐに仕へて、子孫相續して今にあり。翁加賀に有りし時、ある

先祿―以前に食みしと同じ祿高
僉議―研究

人此事を語るをきゝしが、青木が武者振の見事なるはさる事にて、阿閉が彼が事をいひ出でて、名のり合ひてよろこびし、又伊勢が子の鎧の著初に掃部を招きて、子のためにとて武功の物がたりを望みし、いづれもさしたる事にてはなけれども、其頃の士風、武をたしなみし事しられ侍る。只今人家に子をそだて候ふに、食の喰ひ初袴の著初などとて祝ひ候へども、鎧の著初と申す事は、大祿の家は存ぜず、我等如きの賤しき武士の家には承らず候。是も人々武の心懸うすき故にて候。よりて大小兩刀又は甲冑等のこしらへの華美を專にし、たゞ武を道具と迄意得る體にて候。我朝は、武家の治世になりしより、五百年以來天下武をもて風をなし候故、外の事はしらず、武の一筋は人々常に忘れず、假初の一言にも臆したる事をばいはず、しばらく立つにも脇指をはなさず、文道より見候はゞ、かたくなに賤しき方にもあるべく候へども、是程に心懸けず候うては、武の一筋はとほり申さず候。翁かねて學者に申し候は、「學者の道に志す事、武士の行住坐臥に武を忘れぬやうにさへ候はゞ、聖賢の域に至らん事も難かるべきにあらず。もとより武も義氣の發する所にて候。古來我朝の武士を見るに、多くは不學にて、文道の僉議はうとく候へども、義にあたりては、一命を輕んじ、廉恥の心を失はぬは、武義の

季路冉有—論語に「季子然問、仲由冉求、可レ謂ニ大臣一與。子曰、弑ニ父與レ君、亦不レ從也」仲由は季路、冉求は冉有

いたす所にて候。されば鎌倉以來敎化は世に行はれず候へども、責めて此武義ひとつにて士風をも維持し、國家も治平なる事に候へるに、近來はその武義さへかやうにおとろへ行き候事は、所詮風俗の日に遊惰になり候故と、いとなげかしくこそおもひ侍れ」

○士の節義

或時の會に、古今節義の事に及びけるに、翁いひけるは、「孔子、季路冉有の二子を、父と君とを弑するには不レ從と仰せせられて候。少し志あるきはの人の、君父を弑するに同意する事あるべきや。二子は孔門の高弟にあらずや。それにかく仰せらるゝ事、たゞ季氏が不臣を戒め給ふといふばかりにはあらず、これはいはれある事にて候。たゞ今刀を取つて君父を殺す者ありて、我に同意せよといはむには、誰か從ひ申すべきにて候。然るに時移り勢變じて、君父たる人を殺しても、其跡あらはれず、人もさしてとがめぬやうに成行く時は、己が利害にひかれて、覺悟を失ふものにて候。楊雄は王莽が平帝を弑せしに仕へて、反て莽が功德を頌し、沉約は蕭衍をすゝめて、和帝を弑し、その謀臣となる。さては明の靖難の時にて見給へ。燕王は建文帝を殺せしかども、在朝の名臣蹇義、夏原吉、楊溥、楊榮を始とし、いづれも燕王を奉じて、是に臣とし仕へざるはなし。其外歷代不學無識の徒は論ずるにたらず、是等は皆一代の文儒として、世に名をあらはす人ぞかし。是にてしるべし。季路、冉有を弑ニ父與一レ君には不レ從と宣ふは、二子大義においては、見ること明かにして、慥に覺悟のたがはぬ所を、聖人見屆け給ひてかく宣ひけることを。實に容易の事とはいふべからず。我朝にても、源義朝が父爲義を殺すにて見給へ。其身も大惡としらぬにてはなけれども、君命はおもし。父ながら朝敵となりたる人なれば、是を救ふ事叶ひがたし。それに鎌田正淸などいふ無慙の輩、いろ〳〵拵へていひけるまゝ、あへなく是を殺してけり。彼二子はかやうの場に至りては、たとひ身命を果しても、覺悟をたがふる事あるまじきなり。義朝さしも源家の名將と聞ゆれども、勇氣ばかりにて、義理にくらく、志節なき故に是ほどの理非にまよひたり。いかがして長田忠致がおのれをころすをとがむべき。但此事は、北畠親房の神皇正統記の論正しうして、最理に當れり。此事の斷案ともいふべし。正統記にいへるは、「義朝父のくびをきらせたりし事、大きなるとがなり。古今にもきかず、倭漢にも例なし。勳功の賞に申し替ふるとも、自から退くとも、などか父を申し助くる道なかるべき。名行かけ

無慙—恥を知らぬこと

石碏―春秋時代の衛國の忠臣

耆老―先輩 曲禮に「六十曰ㇾ耆」

はてにければ、いかでかつひに其身を全くすべき。程なく滅びぬる事は天理なり。およそかゝる事は、其身のとがはさる事にて、朝家の御あやまりなり。よく朝議あるべかりけるに、其比名臣もあまたありしが、などか諫め申さゞりける。大義には滅ㇾ親といふ事のあるは、石碏といふ人其子を殺したる事なり。不忠の子を殺すは理なり。父不忠なりとも、子として殺すの道理なし、保元、平治よりこのかた天下亂れて、武威盛に、王位かろくなりぬ。いまだ太平の世にかへらざるは、名行のやぶれぞかし」とぞ。此時代是程正しき議論あるをきかず。さすが親房南朝の耆老とて、此見識ある程に此議論もあるぞかし。ちかきころ、明智光秀が織田信長を弑せんとて、丹波路より引返す時、途中にて、旗下の將士へ隱謀の企ある事を始ていひきかせ、さて一黨同心せんといふ一紙の誓文を出しけるに、軍士たがひに驚き視て、とかうの事に及ばざりしに、齋藤内藏介申しけるは、「此御企千に一つも御利運あるべき事にて候はゞ、同意いたすまじく候へども、御敗亡は見えたる事にて候。それに只今辭退いたし候はゞ、命ををしみて其場をはづし申すにて候。それは士の義にあらず」とて、一番に血判しければ、殘りの人々も一言に及ばず、みな同じけるとなり。孟子に、「非義之義、大人弗ㇾ爲」といへり。内藏介が

文天祥、謝枋得―共に宋末の忠臣

方孝孺が事―字は希直又希古、宋景濂に學ぶ。明の惠帝召して侍

義は、大人のせざる所なり」此時光秀をつよく諫めてきかれず、光秀が手にかゝりて死なんは、中々まさるべし。萬一光秀本望を達し、永く世にあらば、内藏介いきてをるべきや。いきてをらば、前にいひたる事はいつはりなり。よしまた其時自殺するにもせよ、賊黨の名はのがれ得ず。世話にいはゆる犬死といふべし。畢竟義理の筋にくらき故に、小節に拘り時勢に逼られて、つひに賊黨に陷り、極罪に處せられけるは、なげかしき事ならずや」

○歲寒知二松栢一

座中ひとり、宋の文天祥、謝枋得が事をいひて嘆美するに、又ひとり、明の方孝孺が事をいひ出でて、「孝孺、成祖に對して始終少しも屈せず、あくまで成祖を罵つて口をさかれ、まのあたり赤族せらるゝを見て悔いざりし、古今義烈の士といふべし」といふを、翁聞きて、「文山が衣帶にのこれる贊、疊山が却聘の書を見給へ。二子の心事明白なる事をしるべし。文山が元の博羅と問答するを見るに、其氣象凜々として犯すべからず。しかも其從容たる事は、方孝孺等が慷慨して就ㇾ死にもまさりて殊勝にぞ覺え侍る。但文山は

講となす。建文四年、燕兵來り犯すや其執ふる所となる。清の成祖孝孺をして登極の詔を草せしめんとす。孝孺肯ぜず反て之を罵る。終に磔せらる。時に年四十六

顯仕—顯官といふに同じ

宋の丞相にて、もとより國と休戚を同じうする身なり。疊山は宋の臣たりといへど、顯仕にも登らず、國事に預る程の身にもあらねば、宋亡びて、元に仕へずして、隱れ居ても、さてやみなん。然るに八十歳におよべる老母ある故に、しばらくながらへてありしが、後に元人の聘を却けて、つひに食を絶ちて死しけり。其淸節文山と抗衡すべし。趙子昂、留夢炎等是を見て、恬然として元に仕へしこそ、いかで羞惡の心を失ひけるにや。無レ恥の甚しきものなり。さて明朝靖難の亂に、殉國の諸臣、その勇壯義烈、いづれも孝孺に劣るべからず。古今義氣の集るところとや申すべき。此時先朝の文武名をしらるゝ程の者、燕王を迎奉せしかど、此諸臣ばかり國難に殉ひし事は、誠に歳寒うして松栢をしるとも申すべし。孝孺が弟孝友が就レ戮しを孝孺見て、それまでは、九族門生ころされて尸を前に積むを見ても、一たび顧る事なかりしが、さすが兄弟の愛忍びがたくやありけん、おぼえず落涙しければ、孝友詩を口づから占つて、兄の孝孺に訣れける。其詩に、

阿兄何必淚潸々　取レ義成レ仁在ニ此間一
華表柱頭千載後　旅魂依レ舊到ニ家山一

赫著—名のかゞやきあらはるゝこと

讖緯—先きの事を察し考ふること

紅篋—朱塗の手箱

密緘—密封といふに同じ

いとあはれなりし事なり。百世の下までも、きく人袂をしぼるべし。されど、殉難の諸臣は、世に赫著する事にて侍れば、今更申すにも及ばず。こゝに其列にはあらで、殉死よりもまさりて覺ゆるは、建文帝に從ひて出亡せし二十二人にて候。中にも翰林修選程濟が貞節は、古今比類なき事といふべし。それにつきて、建文帝の始末を、各はくはしく考へ置き給へるや。翁たゞ今は記憶うせて、たしかに覺えしと思ふ事も多くはたがひぬれば、只あらましを物語し侍るべし。太祖の時、懿文太子薨じて、建文帝嫡孫をもて皇統を繼がれしが、帝年わかく材弱くおはせしに、叔父の燕王雄才ありて、倔強難レ制見えし程に、百歳の後國家の變あらむ事を太祖かねて慮り給へるにや、其時誠意伯劉基博學にて、讖緯の事をも奏進せしと聞えしが、劉基などが所爲にもあるにや、ひとつの紅篋を密緘して殘しおかれけり。大難に臨みて是を開けといふ事にぞありける。然るに、燕兵すでに大内に迫つて、京城守らず、今はかうよと見えし時、命じて大内に火をかけさせ、帝自から焚死するやうに物して、其紛れに程濟かの紅篋を打碎きて見れば、度牒三張、袈裟、帽子、剃刀の類まで内に備はりてあり。又篋内に朱書して、應文は鬼門よりいで、其餘は水關の御溝よりいでて、薄暮に神樂觀に會すと

度牒—俗人が僧尼となる時官より下げ渡す許可状
髮を祝し—剃髮せしむるをいふ

あり。三人の名、ひとりは應文、是は建文帝たるべし。ひとりは應能、是は楊應能くり應じ、一人は應賢、是は葉希賢應ず。程濟急に帝の髮を祝しければ、兩人も同じく髮をおろし、衣を易へて袈裟を著しぬ。帝は殿中にありあひける士九人を從へて、丑寅の門よりいでけるに、神樂觀の道士王昇舟を艤して待ちうけつゝ、帝を導きて觀に到りしが、程なく應能、希賢を始として、すべて二十二人來會する時は、すでに薄暮になりにき。かの紅篋の讖すこしもたがふ事なきは、いとあやしといふべし。それより二十二人の者、妻子をふり捨て、帝にしたがひ、いづくともなく出亡しけり。應能、希賢は比丘となり、程濟は道人と號し、此三人は左右をはなれず。外の十九人は東西に聚散し、道路に往來して、衣食を給し、應援をなし、相與に壹心戮力て、始終一のごとし。京城陷りし時、成祖、宮人に帝のあり所を詰問はれしに、馬后の屍をさししめしければ、さては自ら焚死しけるとて、其屍を煨燼の中よりとり出でて、禮葬せられしが、其後世に建文帝いまだ死せずと沙汰しけるを聞きて、ひそかに天下を搜してやまず。胡濙に命じて、仙人張三丰を訪求めさせられしも、實は帝の蹤迹をたづねんがためと聞えし。よりて人に物色せられん事をおそれて、一所に留居するもかなはねば、君臣ともに

兩比丘—應能と希賢
屢空にして—食糧の缺乏をいふ
械繫—いましめつなぐこと
詐罔—いつはり欺くこと

影をかくし、迹を消ちて、四方に漂泊す。其後從亡の人皆うせはてゝ、兩比丘も相繼いで身まかりければ、程濟一人ばかりのこりて、帝を奉護しけるが、或は屢空にして出でて糧を募り。或は侍病て出でて藥を乞ふ、その崎嶇艱難思ひやるべし。帝詩をよくす。名勝を遊歷して、多くは詩を賦して、懷舊の情をいへり。其中一首覺え侍る。

牢落西南四十秋　蕭々白髮已盈頭
乾坤有恨家何在　江漢無情水自流
長樂宮中雲氣散　朝元閣上雨聲收
新蒲細柳年々綠　野老吞聲哭未休

是を吟ずるに、人をして千載の恨あらしむ。帝長命にて、成祖、仁宗の兩朝を歷て、英宗正統五年に至りて、粵西におはせしに、帝と同宿の僧ありしが、今において帝いでては、朝廷にあはれまれんことをはかりて、帝の詩を竊みて、自ら建文帝と稱して出でければ、藩司其僧竝に帝を械繫して、京師に送りしに、程濟徒跣にてしたがひけり。御史鞫問の上に、其僧は詐罔をもて論死せし程に、帝はさてやむべかりしを、帝南歸の思ひあるによりて、自ら其實を白狀せられければ、朝廷舊宮人に命じて探求めしむるに、建文帝たること無疑に決定せしかば、詔ありて帝をむかへて西內にいれしむ。程濟これを聞きて、今日始めて「臣が職を終へぬ」とて、終に跡をくらましてのがれさりぬ。その帝

に從ひて出亡してより、こゝに至つて三十九年の間、艱楚をなめて始終つきまとひ、ふたゝび帝を宮中にいれし事、其貞節の堅きをいふに、古今いまだきかざるところなり。狐趙が文公にしたがひ、甯兪が成公に從ひしには、はるかにまさりぬべし。是をもていはゞ、一時殉難はやすく、程濟たる事は難し。孔子のいはゆる「其知には及ぶべく、其愚には及ぶべからず」とは、是等の事をや申すべき。帝旣に宮中に入りしかば、宮中の人老佛といひける。つひに壽をもて終られけるとぞ。これも古今にためしなく、いとめづらしき事なり」

○手折りし手にふく春風

日かず經て繼いで講會ありしに、講はてゝ、翁「前日節義の事を語り候ひしが、跡にておもひ候へば、いまだ申しのこして候。前日申しつる事どもにて考へて見給へ。盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志をかへぬは、是又士の常なり。もし時のもやうにつきて覺悟を變じ、世話にいふえりもとにつくやうにては、なにをもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙絲　立レ馬煩レ君折二一枝一

唯有二春風最相惜一　慇懃更向二手中一吹

池魚の災—近火のわざはひ

これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。此三四の句意、婉にしておもしろく覺え侍る。よりて、其意を翁がよめる歌に、

なれてふく名殘やをしき青柳の手折りし枝をしたふ春風

楊柳の人にをられてはや木を離れたるとて、春風のそれをよそにしてふきなば、いかに情なかるべきを、なほ其手折りし手をさりやらで、をしみがほに吹くこそ、いとやさしく覺え侍る。古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心をかへぬに喩へつべく候。翁むかし源平盛衰記を讀みて、源氏の士には渡部瀧口競、平家の士には彌平兵衞宗淸が事を感ぜしが、又東鑑にて、伊藤九郎祐淸(祐淸が事東鑑兩所に見えて、前には祐泰とす。今考ふるに、伊藤九郎が兄河津三郎を祐泰といふ。九郎を祐泰といふは誤也)が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を半選び置きしが、いまだ稿を脫せざる内に池魚の災にかゝり、其後ふたゝび草を起す事もなく打過ぎし程に、今は其文をば跡もなく忘れ侍る。渡部競は、源三位入道頼政が所從の士には第一のものなり。然るに治承年中、頼政高倉宮をすゝめて兵を起せし時、京師を急に發して、三井寺へ赴きしが、打忘れて

大將のかへうちたへかたらひ給ふ云々—大將のかく打たへ云々の誤

やありけん、競にかくとしらせざりし程に、競しばらく猶豫して家にありしを、平宗盛聞きて、日ごろ競が魁偉なるを見て、己が所從にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば、請ふべきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に殘りしときゝて、「六波羅に參れ」と人していはせければ、參りけり。宗盛對面して、「汝今より我につかへば、入道の恩にはまさるべし」とて、小糟毛といふ馬に貝鞍おき、乘かへの料とて、遠山といふ馬を引きそへ、黑糸縅の鎧冑まで皆具してたびけり。競かしこまり賜りて、ほくそ笑て罷歸りぬ。一族家人打ちよりて、「入道殿是程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取殘されしは、眞實に遺恨なり。大將のかへうちたへかたらひ給ふはいなみがたし。時の花をかざしにせよといふ事もあれば、たゞ此まゝにてあれかし」といふを、競、「いやとよ、勇士の義さはあらず」とて、宗盛よりたびける鎧著て、小糟毛に乘り、郎等七騎打ちつれて、三井寺へとて打出しが、六波羅の門前を通りし時、馬に乘りながら門の内へのぞきつゝ、高聲にいひいれけるは、「競こそ只今下し賜りし馬にのり、三井寺へ罷越し候。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れがたく候へば、此度死をともにいたすにて候。御門前をむなしく打過ぎんはほいなく候へば、御いとまを申候」とて、三井寺にいたり、頼政

時の花をかざしにせよ—當時の勢力ある者につき從へとの俗諺
いたはる事—病氣

と一所になりしが、其後宇治橋の合戰に、いさぎよく討死してけり。彌平兵衛宗清は、平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚れしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。其時宗清、頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して、疎意なきよしをいはせける程に、頼盛獨一門に叛きて都にとゞまりける。其後平家いまだ亡びずして西海にありし時、頼朝、舊恩の謝せんために頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべき由をいひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いざつれて下らん」といひしに、宗清いひけるは、「頼朝某に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひいでて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく候。今更源氏に諂ひて、其蔭により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜くこそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜やすき御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝某が事を尋ねられ候はゞ、折節いたはる事あるよしを仰せられて給り候へ」とて、鎌倉へは行かざりけり。其後西海へ下りけるにや、其終をしらず。伊藤祐清は、伊藤祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫

瓜期—任のみつる時期

板蕩—騷亂

の時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衛の役に當りて京師に赴きし間に、祐親が女と通じて一男を産ます。祐親瓜期に至りて京師より歸りし後、是を聞きて大に怒りつゝ、其男を殺しけり。賴朝をも害せんとするを、祐淸かなしみ賴朝をふかく愛護し、ひそかにのがれさらしむ。其後、賴朝兵を起して伊豆より相摸へ赴きし時、祐親平家のみかたとして。大庭景親等と石橋山にいたりて、賴朝を追襲ひけり。其後賴朝すでに東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて至りしを、その罪を決する迄、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐淸をめし出して、勸賞を行はれんとありしに、祐淸「たゞ御恩には、はやく殺され候へ。父囚はれ、其子勸賞せらるゝ法や候。もし我を殺し給はずば、平家に歸すべし」といふに、さればとて、我を救ひし者を殺すべきやうなしとて、許して放ちやりけり。祐淸それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、後篠原の合戰に、つひに討死をとげけり。此三人、時代も大かた同じく、志節も相似たり。その淸風高義源平の間に求むるに、其類すくなくおぼえ侍る。さて元弘建武の亂に至りて、天下板蕩の間、死難死節の士限なく相見え候中に、翁かねて安藤左衞門聖秀が事を感じて落涙しける。聖秀は北條高時が臣なり。新田義貞の妻の爲には伯父なりし

死なん命を—原本「死なんを命を」とあり意をたどりて假に削る

淚をさへ—淚をおさへか

いかにしも—原本のまま

我かたざま

かば、鎌倉すでに陷る時、彼女房義貞の文に我文を添へて、ひそかに聖秀がもとへつかはしける。聖秀は高時が將として新田の兵と戰ひしが、郎等大かた討死し、聖秀も薄手あまた負ひて引きかへしけるが、高時すでに屋形に火をかけて、東勝寺へ落ちけるといへば、「御屋形の燒跡には、討死のもの多く見ゆるか」と問ひけるに、「一人も見えず」といふを聞きて、「口惜き事かな。いざ殿ばら、とても死なん命を、御やかたの跡にて心靜に自害せん」とて、百餘騎を相從へて、やかたのあとへ赴きしが、今朝まで甍をならべて、さしも奇麗なりし大厦高牆、忽に灰燼となりぬるを見て、聖秀感慨にたへず、淚をさへ惘然として立ちたる所へ、彼文をもて來りぬ。是を披き見れば、「鎌倉の有さま、今はさてとこそ承り候へ。いかにしもして此方へ御出で候へ。身にかへても申し宥むべし」とあり。聖秀是を見て、大きに色を損じて申しけるは「我今迄主恩に浴して人に知らるゝ身が、今事の急なるに臨みて、降人になりて出でなば、豈恥を知りたる者といはんや。されば女性心にて、たとひかやうの事をいはるゝとも、義貞勇士の義をしられば、さる事やあるべきと制せらるべし。又義貞こなたの許否を試んためにいひこさるゝとも、北の方は、我かたざまの名を失はじと思はれば、かたく是を距るべし。只似

の名を云々—義貞の妻は聖秀とは伯父姪なれば己が一族の名を惜まばとの意

寃枉—むじつの罪

たるを友とするうたてさよ」と一度はうらみ一度は怒り、彼使の見る前にて、其文を刀に挐りそへて、腹かき切つて死にける。嗚呼聖秀いかなる人ぞや。義氣の勇壯志操の潔白、是に過ぎたる事やあるべき。さて近代にては、武田勝頼の臣小宮山内膳が節義こそ、最感嘆するに餘りあれ。内膳は勝頼近習の臣たりしが、天正年中の事にや、内膳人と爭訟しける事ありつるに、勝頼讒人の言をもちひて、内膳が不直に決せしかば、内膳罪なくしてながく逐ひしりぞけらるゝ程に、是非なく家に蟄居して數月を經けるが、織田の兵甲州に亂入して、勝頼敗北し、故府をすてゝ溫井常陸介を先とし、纔四十二人の兵と天目山中に奔るときこえしかば、内膳身をもて赴レ急しが、道にて追付きけり。さきの内膳と爭ひし者、竝に讒せし者を問ひけるに、いづれもとくに逃去りぬといへば、内膳慷慨としてかたへの人にいひけるは、「君我をもちひずして棄て給ふに、今出でて其難に死せば、君の明を損ずるに似たり。又死せねば臣の義をやぶる。よし君の明を損ずるとも、臣の義をば傷らじ」とて、四十二人と同じく國難に殉ひけり。此難に、甲州の士皆勝頼を叛きて逃去りしに、四十二人ばかり、傾覆流離の間につきまとひて、いさゝか二心なく國難に殉ひしは、いづれも節義の士と申すべし。中に内膳は、讒をもて寃枉

上意なんありける—原本「上意ありなんけろ」とあり意に從ひ假に改む

にあひしをも怨みず、從者の列にもあらぬ蟄居の身として、外より來て赴レ死し事、其忠烈はるかに溫井等が上にあるべし。武田滅亡の後、東照宮内膳が忠義をふかく感じ給ひ、其子なくして祭祀の絕ゆるを哀み給ひて、内膳が弟小宮山又七郎をめし出されしが、其後小田原陣の前、武職の人をきはめられしに、又七郎を以て御長柄鎗奉行に仰付けられける。其時内膳が勝頼に對して忠義ありし事をくはしく仰せたてられ、誠に武士の手本とおぼしめす。又七郎いまだ弱年なれども、兄内膳が忠義を感じ思召すによりて、重き職を命ぜらるゝよし上意なんありけるとぞ。誠に死後の面目、忠義の驗と申すべし。

○烈女種なし

翁むかし加賀にありし時、ある人のいひしは、「およそ人の諸惡、大小によらず、改めぬれば、世にいひわけあり。舊惡は少しも疵にてなし。たゞ改めてもいひわけのたちがたき事ふたつあり。士の死ぬべき場をはづしたると、ぬすみしたると、此ふたつは、一たび其事ありては、一生の疵となりて、其人ながくすたりぬべし。しかれば、士の家に生る者には、男女ともに幼少より節義の事を常にいひきかせて、忘れさすまじき事也」と。

「尤なる事なり。然るに、すべて婦人は、柔順を專にして、剛健をつとめずとはいひながら、士の婦女としては、此一ふしを忘るべからず。もし不慮の變にあはん時に、心よわくして節義を欠きなば、日ごろの婦行もいふにたらず。古より、衞の共姜を始として、歷代貞節の女世に絶えせず。漢の陳孝婦、魏の令女が事を、朱子の小學の書にも載せ給ひしはふかき心あるべし。それにつきて、衞侯の夫人南子が、「忠臣不爲昭々信節不爲冥々惰行」といひ、令女が、「仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心」といひしこそ、婦人の言にも似ず、耳をおどろかしぬ。聖賢の訓といふとも、是には過ぐまじく覺ゆ。されど、令女は言にはぢず、其行相叶ひたれば、元よりいふべきやうなし。南子は是ほどの見識ありながら、淫行あるこそ、いとゞ罪おもく覺ゆれ。こゝに又丈夫にもまさりて貞節世にすぐれたるは、倭漢よく似たる事あり。漢の平帝の皇后は、王莽が女なり。父莽、漢の臣として、天下を簒ひ、平帝を弑せしが、いく程なく漢兵起つて、莽を攻滅してけり。皇后宮闕に火のかゝるを見て、「我なにの面目ありて漢兵に見えんや」といひて、自ら火に投じてほろび給ひけり。我朝にては、長岡越中守忠興の夫人、明智光秀が女なりしが、父光秀織田信長の臣として、信長父子を弑しけるを、羽柴秀吉、西國より軍を還して、光秀を滅しぬ。其後關原の亂に、忠興、大軍に從ひて關東に下られける。其跡に、石田が兵忠興の舘に來て、夫人をとらへてゆかんとしけるに、夫人、「われ一命を惜みて、夫家の辱を貽さじ。敵のこみいらぬ先に」とて、自殺して果てられければ、其義にすゝめられて、留主の士、小笠原勝齋、河北石見、舘に火をかけておし竝びて腹をきる。何の局といふ女房其外三四人、手に手を取り、火中にとび入りて死にき。今に至りて、世にめづらしくいさぎよき事にぞいひ傳へ侍る。かゝる大逆臣の女に、かゝる貞烈の人ありける事、上千載をへだてゝ、孝平皇后にならぶべし。其外には、倭漢共にたえて類なき事なり。されば名將に種なしと申し侍るが、翁は、烈女にも種なしとこそ思ひ候へ」といへば、ひとりの客、「いやその種なきがたねあるにて候べし。此節義の心は、仁義の性を種として生じ候。此性なくして、氣習よりしからしむる物にて候はゞ、或は膂力のごとく、丈夫にはありて、婦女にはなく、或は威儀の如く、良家には餘ありて、卑族にはたらざるにもあらむかし。今本性を種として生ずる故に、父祖にもよらず、世類にもかゝらず、善人の子にも惡人あり、惡人の子にも善人あり。男女貴賤にもよるべからず、父祖親戚にもよるべからず」といふを、翁打感じて、「是こそ正當の論にて候

甄揚—取りあげ顯はす

へ。翁が申すは、人類の種あるを知りて、天性の種あるを知らざるにて候。但夫につき候ひては、婦女又は卑賤に節義の行あるは、甄揚して本然天性の種あるを證し、又は下賤のつたなき婦女等にさへかく節義あれば、士太夫をもてそれにおとるべきやはと思ひ候はゞ、人の義心を興起するにもなり候ふべし。こゝに、その人柄にも似ず、奇特に覺え侍るは、源義經の妾靜が事にて候。靜は京師にて名を得たる舞妓なりしが、材色をもて義經に寵せられけり。義經都を落ちし時、靜も吉野までつきまとひしが、それより都へ歸り居しを、賴朝鎌倉へめしよせて、義經の行方をとはれけれども、吉野より末はしらぬよしを申す程に、さて放ちかへさるべかりしを、義經の子を懷孕してありける程に、誕生する迄とて、しばらくとめられしが、かねて舞曲の藝、世に隱れなかりければ、賴朝その藝を見ばやとて、鶴が岡の祠にてまはせられける。靜心うき事に思ひて、再三辭しけれども、しひて命ぜられしかば、いなみがたくて舞ひけり。賴朝時といひ、所がらといひ、靜必ず祝歌をこそ唱ふらめと思はれけるに、さはなくて、

しづやしづしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな

又おしかへして、

蔕芥—小さきとげ、微細のことの譬

高舘—義經奥州にのがれし後住ひし所

幾星—幾粒

よしの山峯のしら雪ふみわけて入りにし人のあとぞこひしき

とかなでければ、賴朝怒つて、「今日の事なれば、時世をぞ祝すべきに、叛逆の義經をしたふ事奇怪なり」とて、すでに罪にも處せらるべかりしを、夫人政子の詫言にて、事解けにけり。靜それを蔕芥ともせず、程へて都に歸りつゝ、一生世に出でず、身を隱して終りけり。かの草も木もなびきし威に懾れず、勢に屈せず、始終志をたてゝ、義經に負かざりし事、高舘にて殉死せし輩とも竝稱すべし。ちかきころ、京師の醇儒中村惕齋が撰びしとかやいふ、倭漢貞烈の女を載せし、姫鏡と題せし書に、是をいひ殘しけるこそ遺恨なれ。是は靜娼家に生れて、出所たゞしからざる故なるべし。それはさる事なれども、名敎を裨くるためには、是等をもすつまじき事と、翁はかねて思ひし程に、今各へも申しつるぞかし。詩にいはく、「采封采菲、無以下體」この謂なり。

○澤橋が母

加賀の前田家より、毎年八丈島浮田家子孫のもとへ、資用のために、小金幾星、丹藥幾包、其外瑣細の物件、定數ありて、目錄の如く、公の官吏に付して、八丈が島へ達せし

渠魁―巨魁

徒跣―かちはだし

御曹子―「御曹司」を正しとす、貴人の子弟のなほ部屋住なるを尊びていふ稱

む。翁加賀にありし時、其いはれを故老に問ふに、澤橋兵太夫といふ者より起りたる事なり。豐臣太閤の時、前田家の先祖、大納言利家の女を、太閤養女とし、浮田秀家に嫁す。是秀家の夫人なり。然るに慶長年中、關原師散じて後、秀家は石田方の渠魁たれば、死罪に處せらるべかりしを、島津家の乞哀によりて、死一等を減じて、秀家竝に其子八郎、八丈が島へ竄逐せらる。八郎に乳母ありけるに、是はとくに逃去りぬ。其介の女房、(俗にさしといふ)八郎が幼少にして、乳母に離れて、遙々島に赴くを、ふかく泣悲しみ、徒跣にて官廳に詣り、しきりに八郎につれて島に到らんと願ひけれども、制禁ありし程に、是をゆるさず。女房、「此上はなにの爲にいきてあらむ」とて、すでに自殺せんとするを、官吏おさへて、さて議しけるは、「此女房を目前にて見殺しなば、後に上に聞えん時、不便におぼしめして、など窺はざりしともし御とがめもありなんか。只窺ひ奉りて、御旨にまかするにしくはなし」とて、窺ひければ、「女なればくるしかるまじ。島へつかはし候へ」と、命下りしかば、女房限なくよろこびて、秀家父子につれて、島へ赴きけり。其時三歳になりし子を抱き、浮田家の夫人のもとへ來て、「自は八郎御曹子の御事、餘り勞しく候へば、御供申し候ひて島へ參り候。此御奉公を忘れおはしまさずば、此子を御側の人へ仰付けられ御育てさせ、人になして給り候へ」といひすてゝさりぬ。夫人其子を常に膝下に置きて撫育し、「此子が母は、身をすてゝ我子八郎が先途を見届けし者なれば、此子をばわが子とおもふべし」とて、所生のごとくせられしとなり。其子の父は、いかなる者にかありけんしらず、氏は澤橋にてありける。夫人後には加賀に到り、前田家に依つておはせしが、秀家備前の國守たりしによりて、加賀國人夫人を稱して備前君とす。今に其墓加賀にあり。夫人在世の時、澤橋氏が子成長して、仕ふべき程になりしかば、前田家へ召仕はるゝやうにふかく附託せられしかば、彼家にて所領賜り、澤橋兵太夫何がしと名乘りけるが、たゞ明暮母の事をのみ思ひて、涙をおとしけり。いく程なく、遁世の願あるよしにて國をさり、形をかへて僧となり、いづかたにありとも行方しれざりけるに、元和のころにかありけん、將軍家御上洛ありて、二條の御城へ入らせらるゝ時、ひとりの僧御駕輿ちかく訴狀を捧げけるを、御供の中より抑へけれども、きかざりける程に、討つてすてんとしけるを、御輿の内より御覽ありて、「沙門を聊爾なる事いたし候な。訴狀うけ取り候うて、御跡より召連れて參り候へ」と、御直に上意あり。さてもと前田肥前守家來のよし申すによりて、前田大和守、御上洛の御供

仰出さるゝは―原本「仰出さるは」とあり

にてありしに御預ありて、後程なく江戸へ還御ありしかば、大和守召具して江戸へ下りぬ。其訴狀の趣は、「某三歲の時、母にて候もの、主家の爲に、八丈が島へ罷越して候。御慈悲に、母と一所に島へ遣はされ下され候へ」との事になんありける。官吏上の御旨を奉りて、思ひとまるやうに再三寬喩ありけれども、御うけ合ひ申さず。所詮思ひ切りたる容色なり。上にも其志を不便におぼしめさるゝにや、重ねて仰出さるゝは、「島へ遣はさるゝ事は、御大法においてならせられぬ事なり。島より母をめし返さるべし。島より歸り候やうに、文にて申しこし候へ」とありければ、兵太夫申すやう、「有難き御事に候。たとひ申しこし候うても、母中々承引仕るまじく候。されども仰出されにて候まゝ、申しこし候はん」とて、文かきて遣はしけるが、兵太夫申す如く、母島にて其ふみを見て、大きに腹だち、「我汝が三歲の時、御主の先途を見とゞけんとて、上へ奉願て、一度こゝへ來りしものが、今汝を見んとて、御主をすてゝふたゝび歸るべきやうやある。いと口惜しき事を聞くものかな。かさねて申しこし候はゞ、返答にも及ぶまじ」といひこしける。官吏、兵太夫を公廳へめしよせ、是程に仰出されてかなはねば、上にもなさるべ

徵辟―召抱へんと招くこと

きやうなし。其かはりには、外に願ひ奉りたきことあらば、御かなへ下さるべきよしひ渡しければ、兵太夫かしこまりて、卑賤の身として、上をはゞかり奉らず所存を申上げ候に、重く御取りあげありて、是程迄に仰出され候ふに、此上に私の所存をたて申すべきにも候はず。たゞし、一つ願ひ奉りたき事こそ候へ。前田家は、浮田と由緒ある事にて候へば、彼家より、毎歲助成の金竝に入用のもの承り候ひて、永代島へさしこし候ふやうに公命下り候はゞ、限なき御恩澤にて候ふべし。しからば、母も悅び申すにてあるべく候。某母への孝行このひとつにて候。外に願ひ奉るべき事はなく候よし申上げければ、其事下りて朝議ありけるに、「是はくるしかるまじき事なり。されど、金も員數多くはなりがたし。其外の物も、品によりてならぬものもあるべし。所詮僉議して、其員數、其物品をきはめて、前田家へ申渡し候やうに」との事にて、今に至るまで、毎歲加賀の家より、定めのごとくしたゝめて官へ付し、官にて其物件を點檢し、島へいたり届くる事になりたり。此事四方へきこえしかば、列侯の家より爭ひて徵辟せしかども、兵太夫、「我此後仕官の所存なし。但加賀の家は、舊君の事なれば、これは辭すべからず」とて、加賀へ歸參しけるが、程なく病死し、子なくして家絕えにける。翁古今を考ふる

耿介—節を守り度に從ふこと

に、母子たがひに忠孝の道を盡したる事、是に類すべきはなし、一奇事といふべし。況や匹夫をもて萬乘の尊を動かし奉りし事、至誠の致す所とも申すべし。然るに是程の事を、加賀にてさへ、今は沙汰する人も稀なれば、其名世にあらはれずして埋るゝこそ口惜く候へ。さて、上の御仁政は勿論の事ぞかし、よく下情を御察し、卑賤の義を御そだてなされしは、誠に有がたき御事なり。御祖訓のごとく、國家の元氣を養はるゝの思しめしにてもあらんかし。淺智短慮の及ぶべきにあらず」

○天野三郎兵衞

他日繼いで諸客來會せしに、翁いふやうは、「前田節義の事を申候ひつる。但節義は、事變によりてあらはれ候。もし平居無事の時にていはゞ、廉潔耿介の士ほど世に貴ぶべき物は候はず。官職に任ずれば、必ず成績をいたし、事變にあへば、必ず節義を顯す。常變ともに國家の用に立つものにて候。すべて智勇ある士は、一人一職に任じては、一かど用にたち候へども、諸司の職を命ずるには、人がらの廉潔なる士を選ぶべし。いかにとなれば、諸司には必ず同寮あり。其心廉潔ならざるは、權威を貪り、又は名聞を務

先格—先例

遷就—あれにつきこれにつき心の動くこと

むる程に、相嫉まねば必ず相おもねるものなり。さる程に、外はしひて相和すれども、内は互に相ふせぐ。それ故、智も勇も相さへられて、剛も剛をなさず、柔も柔をなさず、たゞ僉議がちにて、先格をおひ、後難を招かぬやうに裁斷する迄にて候。いかでか國家において推したちたる驗を見るべき。よりて諸事はかどらず、ゆきて屆かぬ事もおほきぞかし。永祿のころ、東照宮參河に御座なされし時、御制法を定められ、高力與左衞門清長、本多作左衞門重次、天野三郎兵衞康景を三奉行に仰付けらる。其頃輿人の諺に、「佛高力鬼作左どちへんなしの天野三郎兵衞」といひしとぞ。どちへんなしは、左右遷就して一決せぬの俗語なり。此諺をもて考ふるに、高力はたゞ寬仁にして、本多があらきにかまはず、本多はたゞ勇決にして、高力が慈悲にかまはず。天野は高力か本多が裁斷をそねむ心なく、たゞ道理次第にして、少しも己をたてぬと見え候。これは、三人ともに人がら廉潔にして、奔競の心なき故に、同職にあはせんともせず、また同職をおさへんともせず、互に面々の心のまゝにふるまふと見えし。そこを御覽なされ、同職に仰付けられしが、始は思ひ〱にて一致せぬやうに見えしに、此三人にて國政たゞしく、諸事治まりし程に、御目がねのつよき事を、人々感服し奉りしとなり。高力、本多が人がら

の事は、くはしくしらず。天野康景は、慶長年中、駿州興國寺の城主として、三萬石を領しけり。領地の竹をきらせて、營作の爲に積置きて、足輕三人をして守らせけるに、御領田原の鄕民、此竹を盜取りしかば、番をせし足輕見付けて、盜一人をきり殺す。殘黨逃有つて、代官井手某に訴ふ。井手鄕民の手前を吟味せざる事はあるまじきが、竹を盜む事慥かならぬにやありけん、人を康景がもとへつかはし、御領の民を、こなたへ斷なくして卒爾に殺す事重罪なり。速にその足輕を誅すべきのよしをいひやりければ、康景、「盜を殺すは古今の法なり、なにをもて罪とせん。其上かの足輕私に殺すにあらず、康景下知してころさしむ。もし此事誤にならば、康景罪に行はるべし」とて、少しも許容の氣色なし。井手其まゝにてはやみがたき故、鄕民實は竹をぬすまず、無實の罪にてころさるゝを、康景己が足輕に荷擔して、誅せざるのよし言上しければ、康景がもとへ下手人出すべきのよし仰出されけれども、前のごとくいひて御うけ申上げず。東照宮きこしめして、康景においては、不義の所爲あるべからず。もしくは、人のいふに欺かるゝにやあらん。後日に御糺問ありて、實否を定めらるべきのよし仰出されしが、本多上野介正純を康景がもとへつかはされて、たとひ此事理なりとも一たび仰出されたる上にて、其通に仰付けられねば、御威光も輕きやうに聞ゆる間、三人に鬮をとらせ、その內一人とりあたりたる者を誅ししかるべきのよし、正純申されしかば、「御威光輕くなるとある上には、とかう申上ぐるに及ばず」とて、御うけ申上げにける。さて申しけるは、「理をまげて罪なきものを殺し我身を立つるは、勇士の本意にあらず、所詮身を退くるにしかず」とていづちともなく逐電し、行方はしれざりけり。其後、台廟の御時に及びて、ある人駿遠あたりの地にてかありけん、その所はたしかに聞かず、一人の仙人とおぼしきに行きあひしに、其仙人「今は誰の代ぞ」ととふ。「今の君は、權現樣の御子御代を繼がせ給ふ」といふ。「權現樣とはたが事ぞ」と問ひける程に、くはしくいひきかせければ、その時よく合點して、「土井甚三郞といふものありしが、いまはいかがなりぬる」と問ひけるとぞ。甚三郞は大炊頭の事なり。此事世に沙汰ありて、「其仙人は大かた天野三郞兵衞にてあらん」といひけるが、「康景駿河にありし時、甚三郞既に大炊頭といひしに、かの仙人甚三郞といふを見れば、康景にてはあるまじ」といふ人もあれど、古人は眞率にて、いつもよびつけたる名をいふほどに、大炊頭の若名をよく覺えて、かくいひたるにもあらんかし。よし其仙人は誰にもせよ、嗚呼康景潔白の士なるか

台廟—德川二代將軍秀忠

な。無辜をころして己が身を立つるは、非義なり。ころさねば上意にそむくに似たり。とにかくに世にありては、身の一分たゝずと思ひきりて、三萬石の祿を棄てゝ跡を消ちぬるこそ、世にたぐひなき事といふべし。

○結解の何がし

されど、潔白なる武士も、世に絕えずあるものなり。寬永正保のころにかありけん、江戶芝の天德寺境內のわき寺に、常念佛とて、常にたえず念佛を唱ふる所ありしが、ある夕暮に、住僧外へ出るとて見れば、旅人と見えて、油單つゝみ頭にかけて、其さまいやしからぬ人の、門前にたゝずみてありしが、やゝ久しくして、歸るまで元の所にありし故、住持怪しみて「何人にて候や。內へ入りて休み給へ」といへば、其人いふは、「御寺の念佛の聲いと殊勝に覺え候程に、こゝに時を移して居るにて候。左候はゞ、御茶ひとつ給らん」とて內へ入りぬ。住持「いづかたよりいづかたへ參られ候ふや」と問ひければ、「某は奧州邊より出でたる者にて候。江戶にむかし知りたる者の候うて、遙々尋參り候へども、年久しき事にて候故、其人の行方も今に知れ申さず候。是よりいづかたへなりとも身をよせ候はんとこそ存じ候へ」といふを、住持きゝて「はや日も暮れて候まゝ、こよひは是に一宿いたされ候へ」とてとめけり。翌日住持いひけるは、「御身の落つき所もいまだ定まらぬと聞えて候。其間はいつ迄も御宿いたし申すべし。ゆる〳〵と寺に御逗留候へ」といへば、「かたじけなく候」とてとゞまりけり。さてなにくれと物がたりするに、ふるき事など覺えて、たゞ人とは見えざる程に、天德寺の和尙聞て、後は本房へまねきて、ねんごろに扶持し置きつゝ、寺中の事をまかせしが、殘る所もなくよく取りさばき、衆僧のしまりにもなりしかば、簡要の人とてたつとびあひけり。其ころ或國主の退休して居らるゝ人ありしが、世に年たかく、ふるき事をも覺えて、常に傍にゐて伽になる人あらば、俸祿も厚く、國賓のあしらひにて召抱へむとて、尋求められしに、此寺の檀越、「この人にしくはあるまじ。幸の事」とて、この人に告げければ、「御志は忝く候へども、某事、奉公の望はなく候。今までは申さず候へども、斯く御懇意の上につゝみ申すべきにても候はず」とて、そこにて始めて名乘りけり。それ迄は寺にてなにとか名をつきてをりけん、それはしらず。「某は蒲生氏鄕の家にて、結解の何某と申す者にて候。蒲生の家亡び候うてより、他家に腕くびを握る心なく、乞食候うてなりとも一生ををへ

つゝ、行倒るゝまでと覺悟いたし候ひつるに、存知もよらず寺の御恩になり候。今はただ此御恩をこそ報じがたく候へ」とて、九戸合戰の時、其外にも氏鄕より賜りし感狀、其後蒲生滅びて、方々諸侯より招きし書狀ども取出でて、座中の人に見せて、「もはや是も無用のものに候」とて、火にて燒きすてけり。斯くて歲月を經し程に、明曆丁酉のとし、江戸中大火にて、天德寺も延燒しけり。結解、「たゞ某にまかせられ候へ」とて、和尙をはじめ衆僧をも立ちのかせ、わが身ひとり後に殘りてかけ廻りつゝ、佛像、佛經、其外諸道具ひとつも殘らずのけさせて後、「もはや思ひのこす事もなし。汝等ものき候へ」とて、下邊男までをもことごとくのかせけり。さて、火燒通りてのち、堂間の燒あとに、一人凝然として、手を拱し、結跏趺坐して、焚死してありけるを見れば、かの結解なりけり。寺中の上下、淚をながしをしみあひしとぞ。結解、いつまで寺のわづらひとなりて存命せんと、ほいなき事におもひしかども、久しく寺の恩を受けける故、なにとぞ今一度恩を報じて、ともかくもならばやと思ひしに、幸火災に付いて、寺の爲に身をすてて、一かどの奉公せし程に、もはや是までと思ひてこそ、自らは焚死ぬらめ。その心を思ひやるに、いさぎよく覺え侍る。又ちかきころ、一人の獨行の士あり。翁わかき時、

巳の刻ばかり—まだ古くならぬをいふ
皆具—附屬品などの一切具はりゐること

世に沙汰せし事なり。　阿部故豐後守忠秋の家にて、物頭つとめし者のよし。姓名をば今忘れたり。何とぞ子細ありけるにや、忠秋へいとまを取りて、江戸八丁堀にて、町の裏屋をかりて住居せしが、年を經るにしたがひ貧困して、糧も絕ゆる程に、家主見かねて、朝夕のたべ物つゞけ候ひしが、病氣づきけるとて、打臥して、外へも出でずなりぬるゆゑ、家主人をつかはし、粥などやうのものもたせ贈りけれども、不食の病とて、それを辭してうけず。戸をさして人の入り來らぬ樣にせし間、家主日々戸外より病を尋ねけるに、始はいらへもしけるが、後はいらへもなかりし故に、近隣のものなど召しつれ、戸を破り。内へ入りて見れば、具足櫃によりかゝり、膝の上に大小を橫たへて、すのこの上にこも一枚敷きたるに坐して終りけり。傍に遺書一通あり。披いて見れば、年來家主の恩を忘れぬよしをしるしおき、「寺へのつかはし物、竝に家主へ宿代のいまだすまずして殘りしを、此金にて引取り給はり候へ」とて、遺書に金を添へて殘しおきけり。扨具足櫃の中には、巳の刻ばかりにかゞやきける鎧一領、皆具のまゝにて、黃金三枚いれ置きけり。大小のしたても、古くこそあれ皆金ごしらへのまゝなり。さて衣服は、著せし物のみにて、其外鍋釜等のものひとつもなし。百日にも食物をしたゝめたる氣色とは

見えざりき。此事私にて決しがたく、時の町奉行所へ申出でければ、「其者の遺書のごとく沙汰いたし候へ」との事にてありける。後日に忠秋もきかれて、「さては餓死しけるよな、不便の事なり」と申されしとなり。世に申し傳ふる佐野源左衞門常世が事、何に出でける事にかさだかならず。或人、「是は、太平記、北野通夜物がたりの段に見えし、攝津の國難波の浦の老尼の事を取直して、造り出したる物なり」といひし。さもあらんかし。それはそれにもせよ、此餓死しける浪士などこそ、今の世の常世ともいふべけれ。上に御大事あらば、一番に馳參るべき事疑なし。されど昔の常世は、ふたゝび世に出でしが、此人はむなしく餓死して果てけるこそ、其身もさぞ無念に思ふらめ。かやうの人、世にうづもれて、語り侍る人もなし。なげかしき事なり。

○二人の乞兒

近世是ほど風俗衰へて、利欲にさかしけれども、人の性もと善なる程に、族姓にもよらず、ならはしにもよらず、乞食體の者にも、はからざるに義理をしるの心あるぞかし。朱子小學の書に、「幸玆秉彝、極天罔墜」といへるは、信にして誣ひざる事とこそおもひ侍れ。此十年以前、享保癸卯の歳の十二月十七日、江戸室町の商人、越後屋吉兵衞といふ者の手代市十郎、諸方の買置の金請取りて歸りしが、金三拾兩入れたる袋ひとつ見えざる故、さだめて途にておとしたるものにてあらん。もはやあるまじきとはおもひながら、もと來し路を段々に尋ねありく程に、ある所に乞食一人ありしが、見とがめて、「なにを尋ね候や。もし金をおとさるゝにて候はずや」といふをきゝて、市十郎うれしくて、有のまゝに語りければ、「さればとよ、我等拾ひ置いて候。其主のたづね來ぬ事はあらじと、それを待ちてこそさき程より此所にをるにて候。いよ〳〵慥なる事承りとどけて、たがひなくば渡し候べし」といふ。市十郎、金の員數、又は中にある證文などのやう、一々いひきかせしに、「さては疑なし」とて、取出し、袋のまゝにて渡しけり。市十郎餘の事に、さてやみがたくて、内五兩取出して、「是はせめてそこの得分にせられよ」とて與へけれども、中々受くるけしきなし。市十郎いひけるは、「此かねはなき物にきはめ置きしに、そこの志ゆゑにこそ、ふたゝび手にも入りたれ。然るを、其殘らず我物とすべきにあらず。達て受けてくれ候へ」といへば、「よく考へて見給へ。其五兩をもらふ心得ならば、三拾兩を返し申すべきや。もとより自分の慾にてひろひ置き

たるにてなく候。定めておとしたる人、主人の金などならば、さぞ難儀に及ばるべし。他人に拾はせなば、其落せし人にはふたゝび返るまじ。さらば我等拾置きて、其人に返さまく思ひて、拾ひ置きたるにてこそ候へ。そこ許へ渡し候へば、我等が志通りて候。さらばいとま申し候はん」とて、其儘そこをさりて、見かへりもせで行きけるを、市十郎跡をしたひて、取あへず懐中より金一星取出し、「けふは寒氣もつよく候。歸られ候はば、是にて酒をもとめてたべられ候へ」とてあたへければ、「是は御志にて候まゝ、申受け候うて、是にて御酒たべ申すべき」とてそれをば受けて立ち別れける。名を尋ねれば、名は八兵衛とて、車善七が手下の乞食のよし申候。市十郎宅に歸りて、主人吉兵衛にくはしく語りしかば、吉兵衛聞きて感涙にたへず、「なにとぞ右の五兩を八兵衛につかはしたし。明朝早く善七が宅迄持參し、善七にも申しきかせ、八兵衛に合點いたさせ、とかく受け候やうにはからひ候へ」とて、市十郎に手代頭をさしそへつかはしける。さて善七がもとへ行きて尋ねければ、「其八兵衛と申候乞食は、昨夕いづくにてやらん、金一切もらひ候とて、善七へも見せ候ひしが、なかまの乞食どもよびあつめ候うて、その金をもて酒肴もとめ、人にもたべさせ、其身もたべ候ひしが、たべつけぬものを多くたべ候うて、食傷いたし候か、今曉急死いたし候」といふを聞きて、市十郎おどろき、死骸を見屆け、善七に、「此死骸もらひたく候。かまへて粗忽に外へ移すべからず」と堅くいひ合せ、さて家に歸り、其よしを吉兵衛にいひきかせければ、早々人をつかはし、死骸をうけ取り、右の五兩の金をもて、本庄無縁寺にて厚く葬りしとなん。吉兵衛も義に感ずる事商買には奇特といふべし。日ごろ加賀侯家の用をきゝて出入する故に、手代市十郎その月の廿日に加賀の邸へ來て、かの家の役人に始終語りしとて、翁にきかする人ありき。世に是に似たるやうの事ありと、折ふし人の話に聞くといへど、是程たしかなる事はきかず。よりて聞きたる通りを、少しものこさず、各にも語り侍る。おもふに、八兵衛たゞ人にあらず。いかなれば乞食の黨には入りにけん、定めてもとは賤しからぬ者にありしが、孤貧きはまりて、家もなく乞食してありく程に、外の乞食と一例になりて、是非なく善七が手下に屬しけるにもあらむ。されば、ながらへて甲斐なき事とおもひしが、幸に金を得て酒肉をもとめ、火伴と歡會しける程に、これを限りとおもひて、自ら喉などしめて死しけるにもあらん、はかりがたし。この八兵衛を士とし、又は人の上におくとも、權柄をもて人の物を乞求るやうの事は、決してすまじき者なり。され

金一星―小粒銀一箇

商買―「商賈」にあらざるか。且く原本に従ふ

孤貧―よるべなくまづしきこと

火伴―仲間の義

嗟來の食―いやしみて與ふる食
凍餒―寒さと飢
甄揚―前に註せり

ば、世には名は歷々の士大夫とよばれて、實は乞食なる人もあり。此八兵衞は、名は乞食なれども、實は士大夫といふべし。又加賀の國に野田山とてあり。前田家先祖以來代代こゝに葬る故に、家中の諸士も、死すれば其麓に葬らざるはすくなし。さる間、中元には家々より。墓前に燈籠を具ふ。毎歲の事なり。厚祿の家こそ、假屋を造り人をつけ置きて守りもすれ、其外は、大かた夜ふくればともし捨てて歸りぬるに、下部の惡黨ども來て、火を打ちけし、蠟燭を奪取りけり。側に乞食とおぼしき者、こもをかぶりて臥し居たりけるが、それを見て、「人の祖考のためとて墓にすゝめける物を、さやうに狼藉する事あるべからず」と制しけるに、惡黨ども、もろともに罵つて、「こもをかぶる身として、いらぬ事をいふ奴かな」といひしに、その乞食きゝて、「各が今するやうなることをせぬ故にこもをかぶる」といひしとぞ。齊の餓者の、嗟來の食を食せざる故に、こゝに至る、といひしに語意相似て、おもしろく覺え侍る。此乞兒辭令にもよかりなん。言簡にて意足るといふべし。只いつもくり事のやうなる事なれども、古も今も、からもやまとも、節義の守りある人あれど、凍餒にさへ免れずして、溝壑に斃れて、其名も世にしられぬこそかなしけれ。もとより幽隱の行を甄揚するは、吾徒の任なり。今物語せし結解の何がし、乞食八兵衞が類、世になほ多かるべし。翁がきかぬはいかゞせん、きゝてはいはざるに忍びず。昔我朝勅撰の和歌集を見るに、いやしき野僧妓女の類も、天子公卿に名を列するは、倭歌に尊卑の差別なし。是を倭歌の德といへり。今翁が節義を語るとて、良家名族の士に、乞食などをも並べ舉げてひとつに稱するも、其心亦しかなり。節義に貴賤のへだてなし。是節義の德といふべし。各にもきかれ候ひて、翁が議論不倫なりと思ひ給ふべからず」